

都城市所在

はなのきいけんびら
花木池平遺跡

県有体育施設整備事業（調整池）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

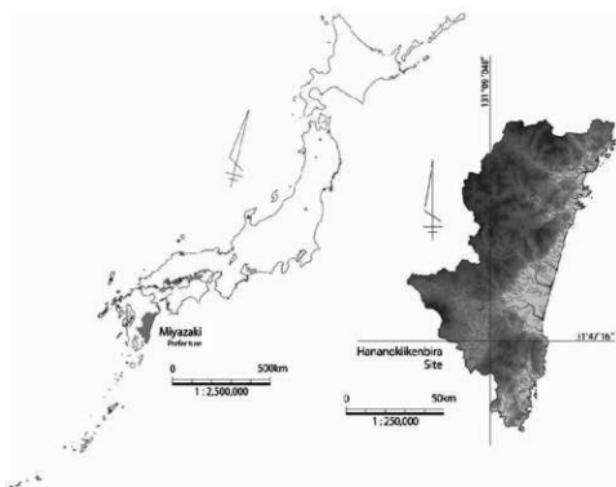
宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

はなのか いけんびら

花木池平遺跡

県有体育施設整備事業（調整池）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2022

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、令和9年開催予定の国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会の主会場となる山之口運動公園陸上競技場の建設に伴い、令和元年度から令和2年度にかけて、都城市山之口町に所在する花木池平遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

花木池平遺跡では、縄文時代と古墳時代から近世にかけての様々な遺構や遺物が発掘されました。なかでも、古墳時代後期頃の集落跡と考えられる竪穴建物跡や溝状遺構を検出したことは、大きな調査成果の一つです。さらに、古代の掘立柱建物跡や畝状遺構、近世の水田跡の検出により、この地において連綿と続いてきた人々の営みを明らかにすることができました。また、遺物の一部には、翡翠製の勾玉や中国・越州産陶磁器が出土しており、他地域との交流についても読み取ることができます。

今回の調査で得られた成果は、山之口地区をはじめとする都城盆地東部地域の歴史を解明する上で、重要な位置を占めるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用され、埋蔵文化財保護に対する県民の皆さんの理解を深めるとともに、広く活用していただける資料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、御協力いただいた関係諸機関および関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和4年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 菊村祐司

例　言

- 1 本書は、県有体育施設整備事業（調整池）に伴い、令和元（平成31）年度・令和2年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した花木池平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県総合政策部国体準備課（現、国民スポーツ大会準備課）の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、第1次調査を令和2年1月14日から令和2年3月27日まで、第2次調査を令和2年4月15日から令和2年8月21日まで、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、調査課題調査第二担当主査 古川 誠を主任に、恵利武馬・竹田享志・加藤真理子・石塚啓祐・二宮満夫を担当として発掘作業員の協力を得て行った。現地調査における図面作成及び、写真撮影については、調査担当者を中心に行った。
- 4 現地調査における測量業務については、（株）南日本総合コンサルタント（第1次調査）、（株）旭総合コンサルタント（第2次調査）、空中写真撮影については（有）スカイサーベイ九州にそれぞれ委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。本書にかかる業務については、図面の作成、実測、トレースを、主として古川が整理作業員の協力を得て行い、石塚・二宮・藤木聰・堀田孝博・和田理啓・飯田博之・谷口武範が補佐した。
- 6 本書で使用する土層及び土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修の『新版 標準土色貼』に拠り記述した。
- 7 実測で使用した測量基準は、国土座標平面直角座標系第II系（世界測地系）及び東京湾海拔（T.P.）で、方位は座標北（G.N.）を指す。また、国土地理院発行地形図は真北を指す。
- 8 本書で使用した位置図及び地形分類図は、国土地理院の『電子国土Web』『電子地形図25000』を基に作成した。
- 9 本書で使用した造構等の略記号は次のとおりである。

S A	・	・	・	・	・	堅穴建物跡	S B	・	・	・	・	・	掘立柱建物跡	S C	・	・	・	・	・	土坑
S E	・	・	・	・	・	溝状造構	P	・	・	・	・	・	堅穴建物内土坑・小穴	→	・	・	・	・	・	敲打痕の範囲
↔	・	・	・	・	・	磨面の範囲	↔	・	・	・	・	・	砥面の範囲	↑	・	・	・	・	・	上
- 10 本書の執筆は第I章第1・2節を二宮が行い、その他の執筆及び編集を古川が行った。
- 11 出土遺物写真撮影は、東憲章が行い、古川が補佐した。
- 12 出土遺物の分類や年代観等は、第V章に示した文献を総合して参考にしている。
- 13 整理作業に伴う自然科学分析については（株）古環境研究センターに委託した（結果については、第IV章に掲載）。
- 14 勾玉は、岡山県古代吉備文化財センター米田克彦氏にご教示いただいた。
- 15 出土遺物・諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	2
第3節 発掘調査の方法と経過	3
（1）発掘調査の方法	3
（2）発掘調査の経過	4
第4節 整理作業及び報告書作成等	5
（1）整理作業の経過	5
（2）報告書原稿の作成等	5
（3）教育普及活動	5

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境	6
第2節 既往の調査と歴史的環境	6

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序	11
第2節 江戸時代の遺構と遺物	15
（1）遺構の分布	15
（2）水田遺構	15
第3節 平安時代の遺構と遺物	19
（1）遺構の分布	19
（2）掘立柱建物跡（S B 1）	20
（3）溝状遺構（S E 5）	21
（4）竪状遺構	22
（5）小穴	27
第4節 古墳時代の遺構と遺物	28
（1）遺構の分布	28
（2）竪穴建物跡（S A 1～6）	28
（3）土坑（S C 1）	48
（4）溝状遺構（S E 1）	48
第5節 繩文時代の遺構と遺物	55
（1）遺構の分布	55
（2）土坑（S C 2）	55
（3）自然流路	56

第6章	包含層出土遺物	62
(1)	近世の陶器	62
(2)	磁器	62
(3)	中世の陶器	63
(4)	古代の須恵器	63
(5)	古代の土師器・縁軸陶器	66
(6)	古墳時代の須恵器	68
(7)	古墳時代の土師器	68
(8)	弥生土器	68
(9)	縄文土器	68
(10)	石器	69
第IV章 自然科学分析の結果		
第1節	はじめに	84
第2節	植物珪酸体分析	84
(1)	はじめに	84
(2)	分析法	84
(3)	分析結果	84
(4)	考察	85
第3節	花粉分析	86
(1)	はじめに	86
(2)	方法	86
(3)	結果	86
第4節	放射性炭素年代測定	87
(1)	はじめに	87
(2)	試料と方法	87
(3)	測定結果	87
第5節	自然科学分析のまとめ	88
第V章 総括		
第1節	縄文時代の様相	98
第2節	古墳時代の様相	98
第3節	平安時代の様相	99
第4節	江戸時代の様相	99

挿図目次

第 1 図 花木池平遺跡周辺地形分類図	9
第 2 図 花木池平遺跡及び周辺遺跡分布図	10
第 3 図 第 1 次調査区土層断面図	12
第 4 図 第 2 次調査区基本土層及び下位層 の柱状図	13
第 5 図 花木池平遺跡構造分布図	14
第 6 図 水田構造平面図	17
第 7 図 水田構造出土遺物①	17
第 8 図 水田構造出土遺物②	18
第 9 図 平安時代構造分布図	19
第 10 図 S B 1 平面図・断面図	20
第 11 図 S B 1 出土遺物	20
第 12 図 S E 5 平面図・土層断面図	21
第 13 図 S E 5 出土遺物	21
第 14 図 竪状構造平面図・土層断面図	23
第 15 図 竪状構造出土遺物①	25
第 16 図 竪状構造出土遺物②	26
第 17 図 竪状構造出土遺物③	27
第 18 図 小穴平面図・土層断面図	27
第 19 図 小穴出土遺物	27
第 20 図 S A 1 平面図・土層断面図	29
第 21 図 S A 1 出土遺物	29
第 22 図 S A 2 平面図・断面図・土層断面図	31
第 23 図 S A 2 出土遺物	31
第 24 図 S A 3 平面図・断面図・土層断面図	35
第 25 図 S A 3 出土遺物①	36
第 26 図 S A 3 出土遺物②	37
第 27 図 S A 4 平面図・断面図・土層断面図	38
第 28 図 S A 4 遺物拡大図・断面図 (1/15)	39
第 29 図 S A 4 出土遺物	39
第 30 図 S A 5 平面図・断面図・土層断面図	41
第 31 図 S A 5 小穴土層断面図	42
第 32 図 S A 5 出土遺物①	42
第 33 図 S A 5 出土遺物②	43
第 34 図 S A 5 出土遺物③	44
第 35 図 S A 5 出土遺物④	45
第 36 図 S A 6 出土遺物	46
第 37 図 S A 6 平面図・断面図・土層断面図	47
第 38 図 S C 1 平面図・土層断面図	48
第 39 図 S C 1 出土遺物	48
第 40 図 S E 1 平面図	50
第 41 図 S E 1 遺物集中箇所拡大図	50
第 42 図 S E 1 土層断面図	51
第 43 図 自然流路土層断面図	51
第 44 図 S E 1 出土遺物①	52
第 45 図 S E 1 出土遺物②	53
第 46 図 S E 1 出土遺物③	54
第 47 図 S C 2 平面図・土層断面図	55
第 48 図 S C 2 出土遺物	56
第 49 図 自然流路平面図	58
第 50 図 自然流路出土遺物①	59
第 51 図 自然流路出土遺物②	60
第 52 図 自然流路出土遺物③	61
第 53 図 近世の陶器実測図	62
第 54 図 磁器実測図	63
第 55 図 中世の陶器実測図	63
第 56 図 古代の須恵器実測図①	64
第 57 図 古代の須恵器実測図②	65
第 58 図 古代の土師器実測図①	66
第 59 図 古代の土師器実測図②・ 縄輪陶器実測図	67
第 60 国 古墳時代の須恵器実測図	68
第 61 国 古墳時代の土師器・弥生土器実測図	70
第 62 国 縄文土器実測図①	71
第 63 国 縄文土器実測図②	72
第 64 国 石器実測図①	72
第 65 国 石器実測図②	73
第 66 国 植物珪酸体分析結果	92
第 67 国 花粉ダイアグラム	93
第 68 国 历年較正結果①	96
第 69 国 历年較正結果②	97
第 70 国 历年較正年代マルチプロット図	97

表目次

第1表 土器観察表①	74	土器観察表⑧	81
土器観察表②	75	土器観察表⑨	82
土器観察表③	76	第2表 石器計測表	83
土器観察表④	77	第3表 銅製品計測表	83
土器観察表⑤	78	第4表 植物珪酸体分析結果	90
土器観察表⑥	79	第5表 花粉分析結果	91
土器観察表⑦	80	第6表 放射性炭素年代測定結果	97

写真目次

写真1 植物珪酸体（プラント・オパール）	94	写真2 花粉	95
----------------------	----	--------	----

図版目次

図版1 調査区遠景（東から）／調査区全体合成写真（上が北）		積状況（北西から）／SE1中央ベルト土層堆積状況（南西から）／SE1遺物出土状況①（南から）／SE1遺物出土状況②（南西から）	
図版2 調査区西側土層断面（北東から）／調査区西側土層断面拡大（東から）／水田遺構土層断面①（北から）／水田遺構土層断面②（北西から）／水田遺構（南から）／SB1完掘状況（南東から）／SE5検出状況（南東から）／SE5土器出土状況（北東から）		図版9 SE1南ベルト土層堆積状況（東から）／SC2完掘状況（北から）／自然流路完掘状況（北東から）／自然流路北側土層堆積状況（南東から）／A区西側土層堆積状況（東から）／作業の様子①（D区北から）／作業の様子②（SA4東から）／検出遺構の説明の様子（SA5北西から）	
図版3 細状構造検出状況（北東から）／細状構造土器出土状況（北東から）／細状構造土器出土状況（北東から）／細と細間（南東から）／SA1検出状況（北東から）／SA1完掘状況（北東から）／SA2土層堆積状況（南西から）／SA2完掘状況（北西から）		図版10 水田遺構出土陶磁器・土器・須恵器・石器／SB1・細状構造出土土器・SA5・細状構造出土陶磁器・土器・須恵器・縄文土器／SA1・SA2出土土器・須恵器	
図版4 SA3床面状況（南東から）／SA3床面状況（北東から）／SA3土層堆積状況（南東から）／SA3完掘状況（北から）／SA3遺物出土状況（北西から）		図版11 SA3出土土器／SA3出土土器・須恵器・石器	
図版5 SA4完掘状況（西から）／SA4検出状況（北東から）／SA4土層堆積状況（南から）／SA4遺物出土状況（南西から）／SA4遺物出土状況拡大（北西から）		図版12 SA5出土土器／SA5出土石器	
図版6 SA5完掘状況（南西から）／SA5検出状況（東から）／SA5土層堆積状況（南東から）／SA5たも石出土状況（西から）／SA5遺物出土状況（北から）		図版13 SA4出土土器・石器／SA6・SC1出土土器・石器	
図版7 SA6完掘状況（北西から）／SA6検出状況（北西から）／SA6土層堆積状況（南西から）／SE1検出状況（南から）／SE1遠景（南から）		図版14 SE1出土土器①／SE1出土土器②／SE1出土土器・須恵器／SE1出土勾玉	
図版8 SE1全体写真（上が北東）／SE1北ベルト土層		図版15 SC2出土縄文土器／自然流路出土縄文土器①／自然流路出土縄文土器②／自然流路出土石器	
		図版16 包含層出土中近世陶磁器／包含層出土弥生土器・土器・須恵器／包含層出土土器・須恵器	
		図版17 包含層出土縄文土器①／包含層出土縄文土器②	
		図版18 包含層出土石器①／包含層出土石器②／包含層出土石器③	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県では、令和8（2026）年に本県で開催される国民体育大会（令和5（2023）年より国民スポーツ大会に名称変更）及び全国障害者スポーツ大会に向けた競技施設の選定にあたって、可能な限り県内の既存体育施設を活用することで調整してきたが、主要な県有体育施設の多くが昭和54（1979）年に開催された「日本のふるさと宮崎国体」の際に整備されたもので、老朽化が著しく、また現在の施設基準に適合していないなど多くの課題を抱えていた。そうした中、宮崎県総合政策部国体準備課（現・国民スポーツ大会準備課、以下「国スボ準備課」）では、平成30（2018）年に、整備にあたっての基本的な考え方、施設基本計画、整備スケジュール等について具体的にとりまとめた「県陸上競技場整備基本計画（素案）」を作成（翌年に策定。以下、「基本設計」）し、陸上競技場、体育館、プールの主要3施設を新たに整備する方針を定めた。

「基本計画（素案）」の作成後に、宮崎県教育庁文化財課（以下、文化財課）に対して、主要3施設の新たな開発予定地における埋蔵文化財保護について照会があり、このうち都城市山之口町で整備が行われる陸上競技場の事業予定地一帯については、周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、同一の河岸段丘面の約1km南側に、縄文時代草創期～早期を主体とする遺構・遺物が確認された王子山遺跡が近接して所在することに加え、同遺跡一帯が中世城郭の王子城跡にも比定されていることから、文化財課では試掘調査による詳細把握の必要があると判断した。

事業予定地の現況は、試掘調査段階では都城市營山之口運動公園の敷地、市営住宅の敷地及び民間事業者の倉庫を含む資材置き場として利用されていた。対象地の旧地形は、本来的には運動公園一帯を最高地点として北側に傾斜する尾根地形を呈していたと考えられるが、民間事業者の資材置き場にあたる運動公園の北側については大きく削り込まれて平坦地が形成されていた。試掘調査は事業予定地である約220,000m²を対象に平成30年3月及び7～9月にかけて計70か所で実施したが、現況の運動公園と市営住宅の敷地内における試掘坑では施設及び建物建設による地形の改変が著しいことが判明し、旧地形が残る場所においても遺物がわずかに出土しただけであった。一方、民間事業者の資材置き場に設定した試掘坑では、運動公園との境界である崖法面下については旧地形が大きく削平されていたものの、大部分において良好な状態で鬼界アカホヤ火山灰以下の地層が残っており、一部では上位層である霧島御池軽石層及びその上位クロボク層の堆積も確認できた。その中で、対象地の東側については深い谷地形となっていることが判明したが、谷地形の起点にあたる最西側には縄文時代早期に属する遺物包含層と焼礫の安定的な分布が認められた。これらのことから、全事業予定地の中で、民間事業者の資材置き場のうち北西端側について、埋蔵文化財が顕著に残ることが明らかになった。前述のとおり当概地については周知の埋蔵文化財包蔵地外であったことから、試掘調査の結果に基づき「周知の埋蔵文化財包蔵地の新規発見」を平成30年11月5日付けで都城市教育委員会教育長に対して通知し、遺跡名については都城市と協議を行い、当概地の小字名から「上平遺跡」と呼称することとした。

こうした動きの中で、令和元（2019）年になって、主要施設が整備される段丘面東側の開析谷内にある現況運動公園の第2駐車場と、その南北に隣接する当時田畠と竹林であった民有地において、「基本設

計」には明記されていなかった「調整池」の整備が計画され、ほどなく、文化財課に対して上平遺跡と同様に埋蔵文化財保護に関する協議の申し入れがあった。「調整池」の事業予定地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地に当たり、駐車場を挟んで、北側の水田が花木池平遺跡（都城市山之口地区 YK77）、南側の畑が峯元第2遺跡（都城市山之口地区 YK76）に該当することから、文化財課では詳細把握のための確認調査が必要であると判断した。包蔵地外である古池を埋め立てて整備された駐車場を除いて、令和元年10月と12月に花木池平遺跡で計18箇所、同年12月に峯元第2遺跡で計9箇所について確認調査を実施した。結果、峯元第2遺跡に設定したトレンチでは、表土や造成土等に古代の遺物が少量含まれていただけで、遺構についても旧地形が残る場所においてさえも時期不明の小穴が1基検出できたほかは皆無であった。一方で、水田4筆と竹林1筆からなる花木池平遺跡での事業予定地では、昭和51（1976）年に圃場整備が実施された影響で、特に東側の旧地形の変更が著しく、さらに霧島御池降下軽石層が削り込まれていた。このため、霧島御池軽石層よりも上位層の大半が失われていたが、北から1筆目と4筆目の耕作地では、同層面上で溝状の遺構や多数の小穴群が検出され、また古墳時代や古代の遺物が集中して出土する場所も認められたことから、花木池平遺跡では上位部分に削平はあるものの遺構等が残ることが明らかとなった。

文化財課では事業予定地のうち埋蔵文化財の存在を確認した地点の取り扱いについて、国スボ準備課と工事計画変更等の埋蔵文化財保護の協議を行ったが、新しい体育施設の整備がスポーツランドの拠点形成を軸とした本県の発展を見据えて取り組んでいることと、災害時の避難施設あるいは救護等の活動拠点の確保といった災害時への備えとして整備されるという点、さらに調整池についても当該地点に設置できないと体育施設から流入する雨水等の処理に十分な機能が発揮できないことから、埋蔵文化財の現状保存は困難であるという結論に達したため、発掘調査による記録保存の措置をとることとなった。

上平遺跡と花木池平遺跡における文化財保護法第94条に基づく工事通知は、国スボ準備課長より令和元年12月17日付けで提出され、発掘調査の指示に関する回答を宮崎県教育委員会教育長より令和元年12月27日付けで行った。発掘調査の実施については、宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、上平遺跡は令和2（2020）年3月4日から、花木池平遺跡は令和2年1月14日から調査に着手した。

後に、新型コロナウイルス感染症流行により、本県開催が令和9（2027）年に1年延期となった。

第2節 調査の体制

花木池平遺跡の発掘調査及びそれに伴う整理作業と報告書作成は以下の体制で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

事業調整 宮崎県教育庁文化財課

主査 松本 茂（平成29・30年度）

主査 藤木 聰（平成31（令和元）年度）

主査 甲斐 貴充（令和2・3年度）

発掘調査・整理作業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター

令和元（2019）年度 発掘調査

所長 山元 高光

副所長兼総務課長 内野 真由美

総務担当主幹	寺原 真由美
調査課長	赤崎 広志
調査第一担当副主幹	和田 理啓
調査第二担当主査	古川 誠（調査主任）
調査第二担当主査	恵利 武馬
調査第二担当主査	竹田 享志
調査第二担当主事	加藤 真理子
調査第二担当主査	二宮 満夫

令和2（2020）年度 発掘調査及び整理作業・報告書作成

所長	山元 高光
副所長兼調査課長	赤崎 広志
総務課長	鈴木 勝代
総務担当主幹	阿波野 ゆかり
調査第一担当副主幹	和田 理啓
調査第二担当主査	古川 誠（調査主任、整理作業・報告書作成）
調査第二担当主査	石塚 啓祐
調査第二担当主査	二宮 満夫

令和3（2021）年度 発掘調査及び整理作業・報告書作成

所長	菊村 祐司
副所長	赤崎 広志
専門主幹	谷口 武範
総務課長	鈴木 勝代
総務担当主幹	阿波野 ゆかり
調査課長	飯田 博之
調査第一担当副主幹	和田 理啓
調査第二担当主査	古川 誠（整理作業・報告書作成）

第3節 発掘調査の方法と経過

（1）発掘調査の方法

グリッドの設定

調査対象地域全域に対して、国土座標に（世界地図）に基づいた 10m × 10m のグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。

遺構の掘削

遺構については、検出状況から個別の任意の主軸を設定し、半裁もしくは4分法により、埋土の堆積

状況を確認しながら掘削することを基本とした。貼り床を有する遺構については、床面上の調査後、貼り床を除去し、地山面まで完掘した。遺構からの出土遺物については、トータルステーションを用いて三次元座標の記録を行った。なお、包含層からの出土遺物については、1グリッドを均等に4分割して層ごとに取り上げた。

作図記録

遺構実測は、基本的に竪穴建物跡、土層断面等については縮尺1/20、溝状遺構及び小穴群については縮尺1/50で実測を行った。調査の工程上、一部トータルステーションを用いて記録した三次元座標を基にデジタル図化も行っている。

写真撮影

全調査とともに、基本的にフルサイズCCDを搭載したデジタルカメラを使用して記録している。なお、第1次調査、第2次調査とともに、遺構検出面において業者委託による空中写真撮影を行った。

(2) 発掘調査の経過

花木池平遺跡の発掘調査は、県文化財課の確認調査の結果を受け、発掘調査が必要と判断された水田4筆の最南1筆(D区)を、令和元年度に第一次調査として行った。続いて、残り最北の1筆(A区)については、令和2年度に第二次調査としてを行い、併せて2筆目(B区)及び3筆目(C区)については、当初調査範囲としていなかったが、第1次調査中に表土面において多くの遺物を見つかりため、西側3分の1程度を第2次調査の範囲に加えることとした。(以後、水田区画1~4筆目を、それぞれA~D区と呼称)

第1次調査(令和2年1月14日~令和2年3月27日)

第1次調査の調査対象面積は、2800m²である。調査は、1月14日から現場事務所の設置及び調査に伴う事前準備を現地で行い、20日から重機を用いて近世から現代の耕作土と推定される第Ⅰ~Ⅱ層の除去を行った。24日から人力による包含層掘削を開始した。調査区西部から3号竪穴建物跡(SA3)、そのすぐ東側で4号竪穴建物跡(SA4)、さらにその東側で5号竪穴建物跡(SA5)を検出した。2月18日には、調査区中央やや東側で、6号竪穴建物跡(SA6)を検出した。SA3~6の埋土中からは、多くの遺物が出土し、いずれも古墳時代の後期頃と推定された。

また、近現代の芋穴や耕作による擾乱土からは、古墳時代~近世の遺物が出土した。

検出した遺構の掘削作業を3月26日まで行った。SA3は、湧水により想定より時間を要することとなったことと、調査区西側に遺構が伸びていることが判明したため、第2次調査で掘削を継続して行うこととし、3月27日に現地での調査を終了した。

第2次調査(令和2年4月15日~令和2年8月21日)

第1次調査と同様に、近世から現代の耕作土と推定される第Ⅰ~Ⅱ層の除去を重機にて行った。本次調査では、最北のA区と、B区及びC区の西側半分を調査対象とした。重機掘削後の精査において、A区の東側が圃場整備の際に地形が削平されていることが判明したため、調査範囲を当初予定範囲から西側2/3程度に縮小することとし、調査対象面積は、3800m²となった。4月24日から人力による包含層

掘削を開始し、同時に、第1次調査区西側遺構についても継続して調査を行った。A区とB区の境界で1号竪穴建物跡（S A 1）、古墳時代の溝状遺構（S E 1）、平安時代のものと推定される溝状遺構（S E 2～3）及び畝状遺構（S S 1～6）を検出した。S S 1・2では、須恵器が大量に出土した。C区では、霧島御池軽石層上面を検出面とし、2号竪穴建物跡（S A 2）、溝状遺構（S E 4）が確認された。6月23日及び8月13日の2回に渡って空中写真撮影を行った。検出した遺構の掘削は、8月20日まで行った。8月21日に現地での調査を終了した。

なお、埋蔵文化財への理解を目的として、現地説明会の開催を計画していたが、発掘期間中が新型コロナ感染症流行により、緊急事態宣言の発令下であったこともあり、断念した。

第4節 整理作業及び報告書作成等

（1）整理作業の経過

整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センター本館にて実施した。令和2年度は遺物水洗及び注記・接合作業を行った。令和3年度は、フローテーション作業で得られた炭化物の選別作業、遺物実測・拓本・トレイス作業ならびに図版作成作業、遺物や図面記録類に関する収蔵作業のほか、報告書作成を進めた。

また、石器実測図作成の一部と、フローテーションで得られた炭化物や現地にて採取した土壌等の自然科学分析については、業務委託とした。

（2）報告書原稿の作成等

遺構や遺物実測図を掲載した図版作成作業においては、手書きトレイスによる浄書のほか、Adobe社製の各種ソフト（Illustrator CC・Photoshop CC・InDesign CC）によるデジタル製図やレイアウト等の編集も併用した。遺物写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを使用している。

（3）教育普及活動

遺跡発掘速報会（令和3年8月29日　於　宮崎県立図書館）において、調査成果の概要と整理作業状況の報告を行う予定であったが、新型コロナ感染症流行による県独自の緊急事態宣言発令のため、中止となった。

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

都城市は、宮崎県の南西端に位置し、東の鰐塚山系や北西の霧島山系をはじめとする山々に囲まれた広大な都城盆地の中央部にある。面積は約 653 km²、人口約 16 万人の宮崎県第2の都市で、中心市街地は盆地南部に形成されている。北から南東にかけて高原町、小林市、宮崎市、三股町、日南市、串間市の4市2町、南西方面は鹿児島県霧島市、曾於市、志布志市の3市に隣接する。

都城盆地は、北東部の青井岳から東部の東岳・柳岳などをへて南部の金御岳に続く山地と、西部の瓶台山から白鹿岳にかけての山地、及び北西部の霧島火山群に囲まれる広大な凹地状の地形を形成している。盆地には東部山地から沖水川、萩原川、東岳川、西部の山地から庄内川、横市川、さらに南部からは安久川、梅北川などの小河川が市内中央部で大淀川に合流し、盆地北部に向かっている。これらの河川沿いには平坦な河岸段丘や扇状地が広がり、氾濫原や低地を形成している。

花木池平遺跡は、都城盆地北東縁の都城市山之口町に所在し、都城市街地から北東に約 12 km、東岳川及び佐土原川流域に形成された標高約 168 m の河岸段丘上に位置している。平成 18 年に都城市と合併する以前は北諸県郡山之口町であり、北西部は同市高城町（旧北諸県郡高城町）と、東側は宮崎市と隣接する。尾根の間を中小河川が東から西に流れ、町中央部はこれらの河川が形成した扇状地が広がっており、現在は宅地や農地として利用されている。

第2節 既往の調査と歴史的環境

花木池平遺跡が所在する旧山之口町内には、平成 20 年度に都城市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査（都城市教育委員会 2009）によって、縄文時代から近世にかけて 133 ヶ所（旧高城町との境界に所在する遺跡を含む）の遺跡が把握されている。旧町域における本発掘調査事例は 9 ヶ所と限られているが、ここでは本遺跡周辺の既往の調査を中心に概観する。（第 1・2 図）

縄文時代

縄文時代の遺跡として 53 ヶ所の遺跡が把握されている。当該遺跡から南西へ約 1 km にある王子山遺跡（都城市教育委員会 2012）では、縄文時代草創期から早期にかけての竪穴状遺構、土坑、炉穴、配石・集石遺構が検出されており、長期的な定住生活が営まれていたことが窺える。遺物としては、草創期の隆帶文土器、貝殻文円筒形土器、妙見式土器、塞ノ神式土器等の早期の土器群、石鎌・石斧・磨石等の各種石器類の他、炭化堅果類・鱗茎が出土している。

南へ約 3.4 km にある萩ヶ久保第 1 遺跡（都城市教育委員会 2010）では、早期の集石遺構や土坑、中期の陥し穴状遺構や土坑が確認されている。遺物としては、早期の前平式土器や志風頭式土器に加え、押型文系の土器も多数出土している。また、北西へ約 0.8 km にある山之口一本松遺跡（都城市教育委員会 2016）では、前期から中期の地震痕跡とみられる液状化に伴う噴砂跡が見つかっている。後期については、総合運動公園内及び本遺跡と同事業同時期に発掘調査を行った、令和 4 年度報告予定の上平遺跡においても竪穴建物 1 軒が検出されている。

弥生時代

当該時代の周知の包蔵地としては、数多く点在しているものの、発掘調査があまり行われていない。富吉前田遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2011）では、後期～古墳時代初頭とされる独立棟持柱を有した掘立柱建物跡と土坑など、集落の一角にあたる遺構群が検出されている。富吉平遺跡（都城市教育委員会 2015）では、弥生時代前期末に比定される土器が比較的まとまって出土しており、付近に当該期の遺跡が所在する可能性が高いことが明らかとなった。土角遺跡（都城市教育委員会 2019）では、中期から後期にかけての堅穴建物跡5軒から多量の土器が出土している。この他、峯元第1遺跡では、本地域では稀少な磨製石剣が採集されている。

古墳時代

当該遺跡より南西へ約 2.6 km に、県指定史跡の「山之口村古墳」が存在する。花木川支流佐土原川左岸の河岸段丘面上に所在した円墳 5 基（臨之田第2遺跡内）及び右岸段丘面上の円墳 1 基（王子山遺跡内）、さらに富吉川右岸の河岸段丘面上に立地した円墳 3 基と地下式横穴墓 1 基（後田遺跡内）を總じて「山之口村古墳」として登録されていたが、現在は後田遺跡内の円墳 2 基（1・2号墳）が残存するのみである。これら古墳の造営時期についての詳細は明らかではないが、都城市山之口地区遺跡詳細分布調査報告書（都城市教育委員会 2009）によると、王子山遺跡内において、地下式横穴墓と推測される地点から後期後半に属する須恵器杯蓋と土師器杯身が出土しており、これらと上記古墳との関係も指摘されている。その他、王子山遺跡の北に位置する総合運動公園では、地下式横穴墓から鉄製刀子や勾玉が出土したとも伝わっている（山之口町史編纂委員会 1974）。北西側の丘陵上に近接する上平遺跡（令和4年度報告予定）では、後期の地下式横穴墓 1 基と木棺墓 1 基が検出された。

古墳時代の集落遺跡は、都城市内での検出事例はまだ少ない状況にあり、本遺跡から西北西に 1.5 km に位置する二本松遺跡（都城市教育委員会 2010）では、部分的な調査ではあるものの、古墳時代の大溝が見つかっており、大型の構造を呈していることから、付近に大規模な集落が存在していたことを窺わせている。

古代

山之口地区内には、日向国府と大隅国府を結ぶ古代官道が通り、そのルート沿いに水俣駅が置かれていたと推定されているが、これらを直接的に示す遺跡はまだ見つかっていない。官衙跡を含む拠点的な遺跡ではないかと言われている、通称「新町原」の後田遺跡一帯においては、平安時代の土師器や須恵器が多数散布し、縁釉陶器の破片が採集され、西畠遺跡では製塙土器も採集されるなど、古代の交通ルート上の要衝に何らかの施設や集落が営まれていた可能性がある。（宮崎県埋蔵文化財センター 2015）

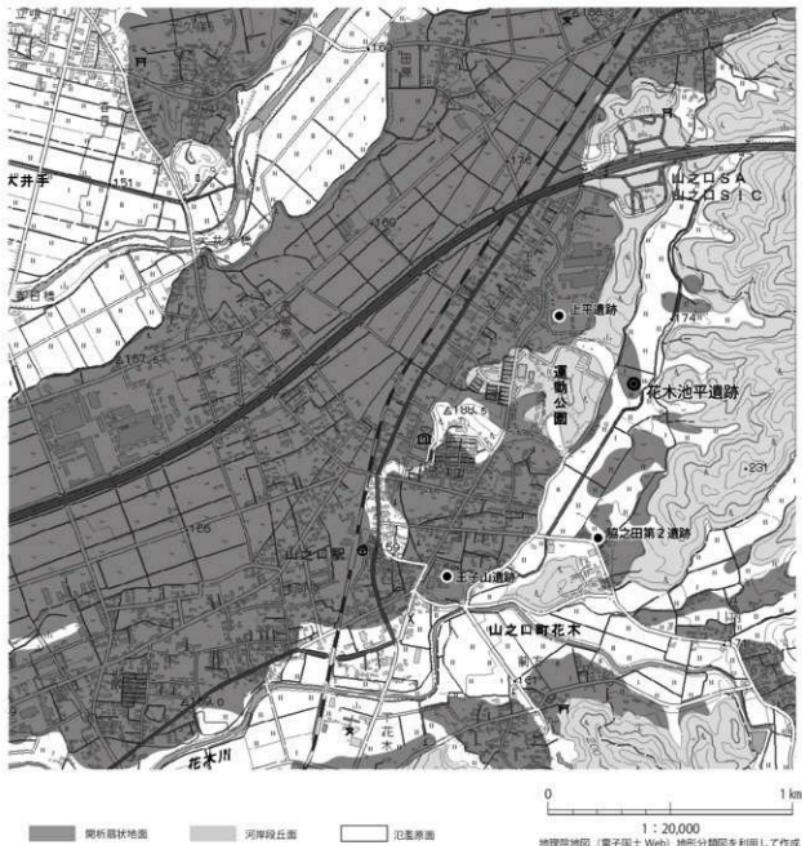
中世・近世

本遺跡から南へ約2.3kmにある三俣（松尾）城跡は、丘陵の地形を巧みに利用した曲輪が形成されている事が確認され、掘立柱建物跡・溝状遺構・道状遺構・曲輪を取り巻いたと考えられる柵列が検出された。遺物としては、染付・青磁の貿易陶磁のほか、土師器や銅製品などが出土している。また、掘立柱建物跡の柱穴1基からは木柱痕が確認されている。

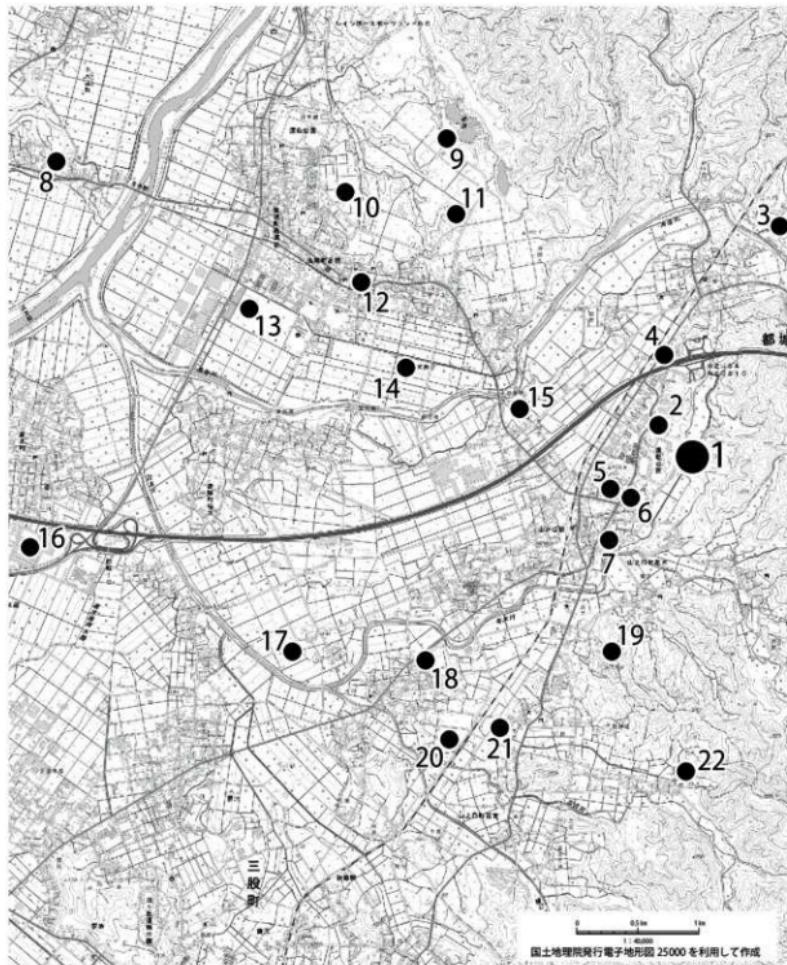
三俣（松尾）城北東曲輪跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2004）では、土壘と土壘の内側に沿うように道状遺構と思われる硬化面および柵列（柱穴6基）が確認された。16世紀所産と思われる土師器・貿易陶磁器が確認されている。

また、本遺跡から南西へ約2.8kmにある富吉前田遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2011）では、江戸時代の鍛冶工房跡と鍛冶関連遺物のほか、薩摩系焼・肥前系焼等の国産陶磁器が確認され、鹿児島藩領の村落形態の一端が窺える。

近世の山之口町は、いわゆる「山之口郷」と呼ばれ、鹿児島藩の直轄地として推移していく。麓地域には、地頭仮屋が置かれ、周辺は郷士の屋敷地が形成されており、近世の地割が現在にも引き継がれ、屋敷地を含めた街並みに当時の面影を見ることができる。



第1図 花木池平遺跡 周辺地形分類図



- | | | | |
|------------|-------------|---------------|--------------|
| 1 花木池平遺跡 | 2 上平遺跡 | 3 山之口城跡 | 4 山之口一本松遺跡 |
| 5 山之口佐土原遺跡 | 6 峯元第1遺跡 | 7 王子山遺跡（王子城跡） | 8 平原地下式横穴墓群 |
| 9 永山原遺跡 | 10 茶園原遺跡 | 11 高城牧ノ原遺跡群 | 12 高城（月山日和城） |
| 13 真米田遺跡 | 14 七日市前遺跡 | 15 二本松遺跡 | 16 並木添遺跡 |
| 17 土角遺跡 | 18 富吉前田遺跡 | 19 三俣城跡 | 20 富吉平遺跡 |
| 21 山之口古墳 | 22 萩ヶ久保第1遺跡 | | |

第2図 花木池平遺跡及び周辺遺跡分布図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序

花木池平遺跡は、都城盆地の北東部の河岸段丘上にある山之口運動公園の東側に位置する。本来的には運動公園一帯を最高地点に東側へ傾斜する尾根状地形の緩斜面（標高170m前後）に立地していたと考えられる。現況は、緩斜面を造成した水田や畑地が広がっている。そして、本遺跡の東側には花木川支流の佐土原川が南流する。

調査区の地形は、比高差約0.8mと調査区西側から南東側にかけて極めて緩やかに傾斜している。第1・2次調査区とも、畑として利用されていた。近現代～現代の耕作土である第I層～第III層を重機により除去して、第IV層から本格的な調査を開始した。

基本土層観察は、第3・4図土層確認位置図に示した第1次調査時の調査区西壁、第2次調査時の調査区西壁、北壁、下層トレンチにおいて確認した。本遺跡の基本層序は下記の通りである。

第I層は、黒褐色細礫混砂質土で、層厚約0.1～0.2mの現代の耕作土である。

第II層は、黒褐色細礫混砂質土で、IIa～IIcに分ける。第I層より細礫を多く含み、硬くしまる。霧島御池軽石と褐色粘質土のブロックを含む。層厚約0.3～0.5mの客土である。

第III層は、黒褐色粘質土で、霧島御池軽石（黄色粒子）及び桜島3（文明）降下軽石が混ざる。層厚約0.1～0.3mの近世耕作土である。

第IV層は、黒色土で、霧島御池軽石（黄色粒子）及び桜島3（文明）降下軽石（白色粒子）を少量含み、硬くしまる。弱い粘性を帶びていて、層厚約0.1～0.15mを測り、古代の包含層に当たる。

第V層は、にぶい黄褐色粘質土で、霧島御池軽石（黄色粒子）及び桜島3（文明）降下軽石（白色粒子）を極少量含み、ややしまる。層厚約0.1～0.15mを測り、古代の遺構検出面及び古墳時代の包含層に当たる。

第VI層は、黒褐色粘質土で、古墳時代の遺構検出面に当たる。

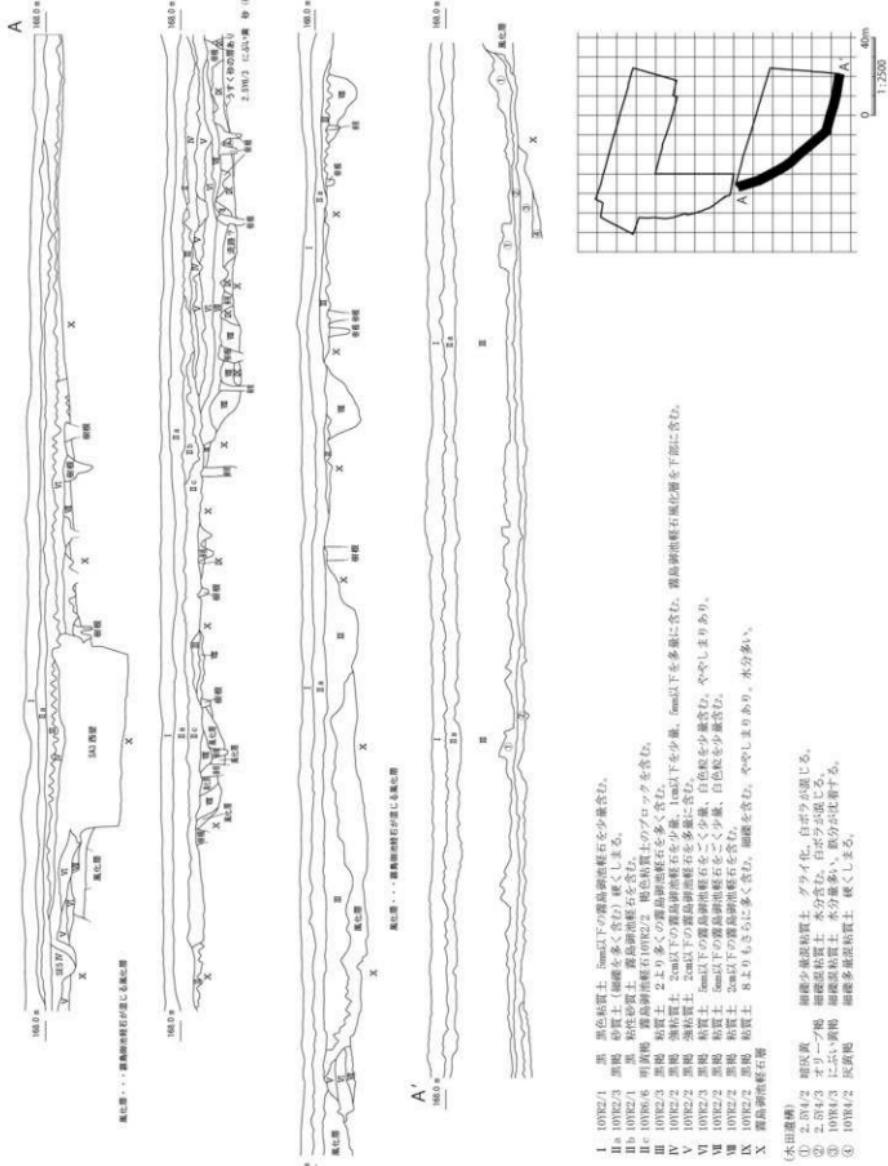
第VII層は、黒褐色粘質土で、強い粘性を帶びていて、霧島御池軽石及び桜島3（文明）降下軽石を多量に含む。

第VIII層は、暗灰黄色土で、強い粘性を帶びていて、1cm以下の霧島御池軽石を多く含む。

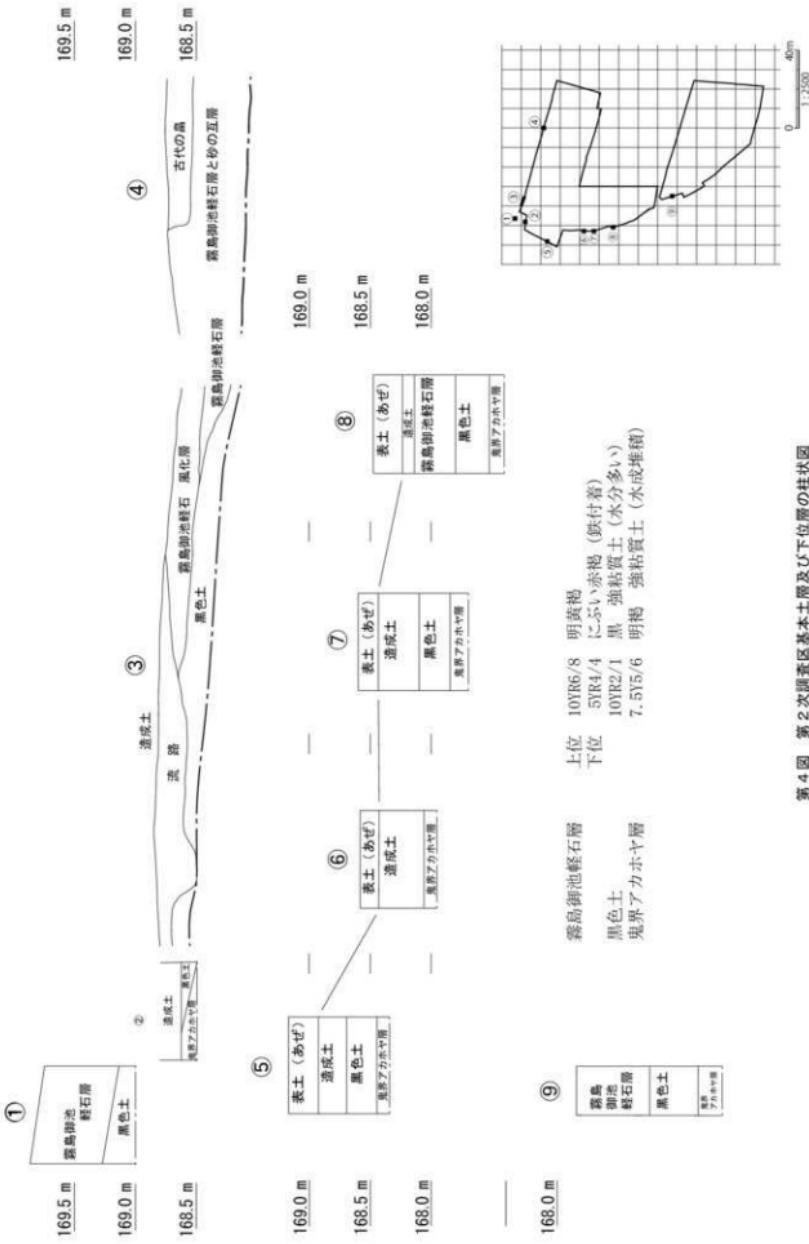
第IX層は、にぶい黄褐色土で、強い粘性を帶びていて、5mm以下の霧島御池軽石が混在する。第X層の霧島御池軽石層の風化層に当たる。

第X層は、霧島御池軽石層に当たる。

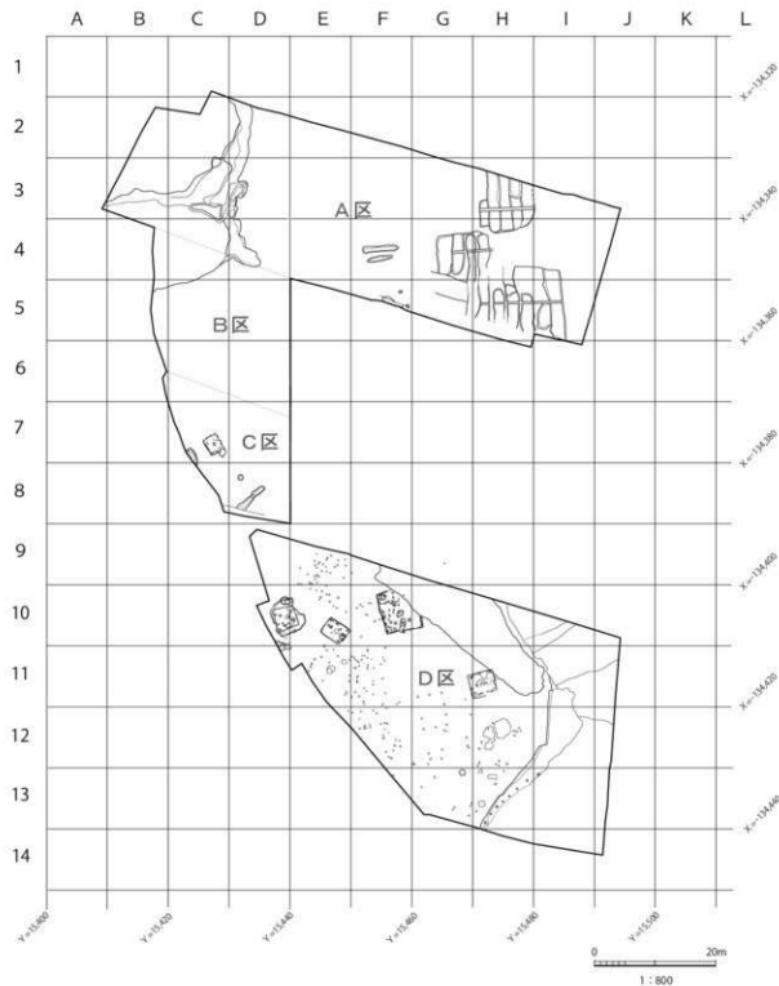
なお、第X層より下位層については、トレンチ等の掘削に伴い、黒色粘質土層及び鬼界アカホヤ火山灰層が確認されているが、部分的な確認のみで、全体的な検出作業は行っていないため、基本層序には組み入れていない。



第3図 第1次調査区土層断面図



第4図 第2次調査区基本土層及び下位層の性状図



第5図 花木池平遺跡 遺構分布図

第2節 江戸時代の遺構と遺物

(1) 遺構の分布

江戸時代の生活面としては、旧地形がD区西側から東側かつ南東側に向かって、極めて緩やかに下っていることから、低位であったと考えられる。現代の圃場整備により、主に水田耕作を目的とした第I層及び第II層が形成され、第II層は、霧島御池軽石層がブロック状に混ざる客土である。それらを重機及び人力により慎重に除去した結果、基本土層第III層と水田層①～④層において、江戸時代の水田面を検出することができた。

(2) 水田遺構（第6～8図）

本遺構は、D区東側のI10グリッドからI14グリッドに位置し、標高167.1m～168.3mのほぼ平坦な面に立地する。発掘調査当初は、霧島御池軽石層がD区全面に渡って平壠に広がっているものと捉えていた。土層確認を行い精査したところ、D区東側は、西側と比べ層中に含まれる霧島御池軽石の径が不揃いで、ブロック状に堆積していることがわかったため、霧島御池軽石層ではないと判断し、第III層上面の5cm程度を残して重機で除去した。除去後の精査で、西側から地続きとなる霧島御池軽石層を、本グリッド周辺から東方向に0.4m～0.5m程度下がったところで検出した。これにより、厚く堆積していたこの層は、圃場整備によって埋め立てられた客土（第II層）と判断した。

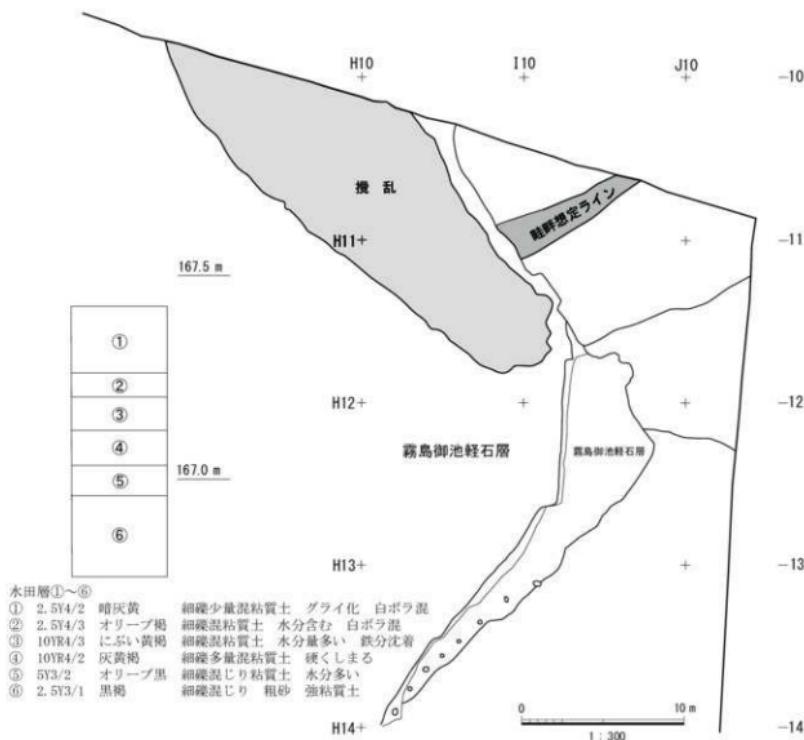
第II層除去後、第6図で示す水田層①～④層の掘り下げを順に行つた。⑤と⑥層は自然科学分析を行うためにトレチを入れて検出した層である。①～④層は主に褐色系粘質土で構成されている。どの層も全体的に硬くしまり、③層では層の下位で鉄分沈着が見られた。植物珪酸体分析の結果では、イネのプラント・オパールが③層～⑤層にかけて比較的多く検出されており、水田耕作の可能性が強く示唆される（詳細は第IV章で記述）ため、床土として利用されていた可能性が考えられる。また、②及び③層からは、多数の土師器及び陶磁器が出土した。調査区南東側にいくにつれ、霧島御池軽石層が深くなることがわかり、この上に堆積する水田層の層厚も南東側にいくにつれ厚くなっていることが確認できた。上層が大きく削平を受けており、平面的に水田区画としての明確な畦畔等は検出できなかつたが、土層断面や自然科学分析の結果も踏まえ、水田遺構であると判断した。

この水田遺構と霧島御池軽石層の平面上での境界で、ほぼ等間隔で並ぶピットを検出した。検出状況から柵列と判断した。直径20～50cmのものが6基、約1.5mの間隔ではほぼ直線上に並ぶ。主軸はN-40°-Eにとり、埋土は霧島御池軽石混じりの黒色土であった。深さは全て約10～20cm程度である。遺物は出土しなかつた。

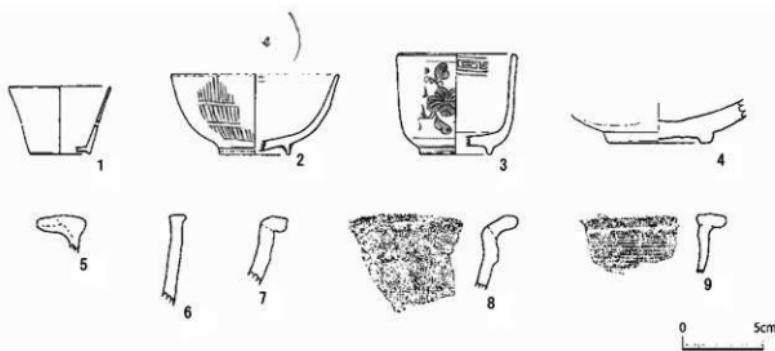
遺物としては主に、肥前、薩摩、青磁などの陶磁器と併せて、中世の須恵器や古代の土師器を多く含む。ここでは35点を図化掲載した。

1～3は磁器で肥前焼である。1は猪口で、胴部の一部を欠く。底部から口縁部に向かってふくらまず、ごくゆるやかに外反し、内外面とも施釉する。18世紀後半から19世紀所産のものと考えられる。2・3は碗である。2は外面に暦文、内面中央に昆虫文を施す広東碗で、18世紀後半から19世紀所産のものと考えられる。3は外面に草花文、内面には雷文帯を施す。4は肥前系陶器の鉢または塊で、高台内は露胎である。内面全体と外面の底部から胴部にかけての一部が施釉する。胎土に白色粒と微細な光沢粒を含む。16世紀末から17世紀所産のものと考えられる。5～13までは陶器で薩摩焼である。5～

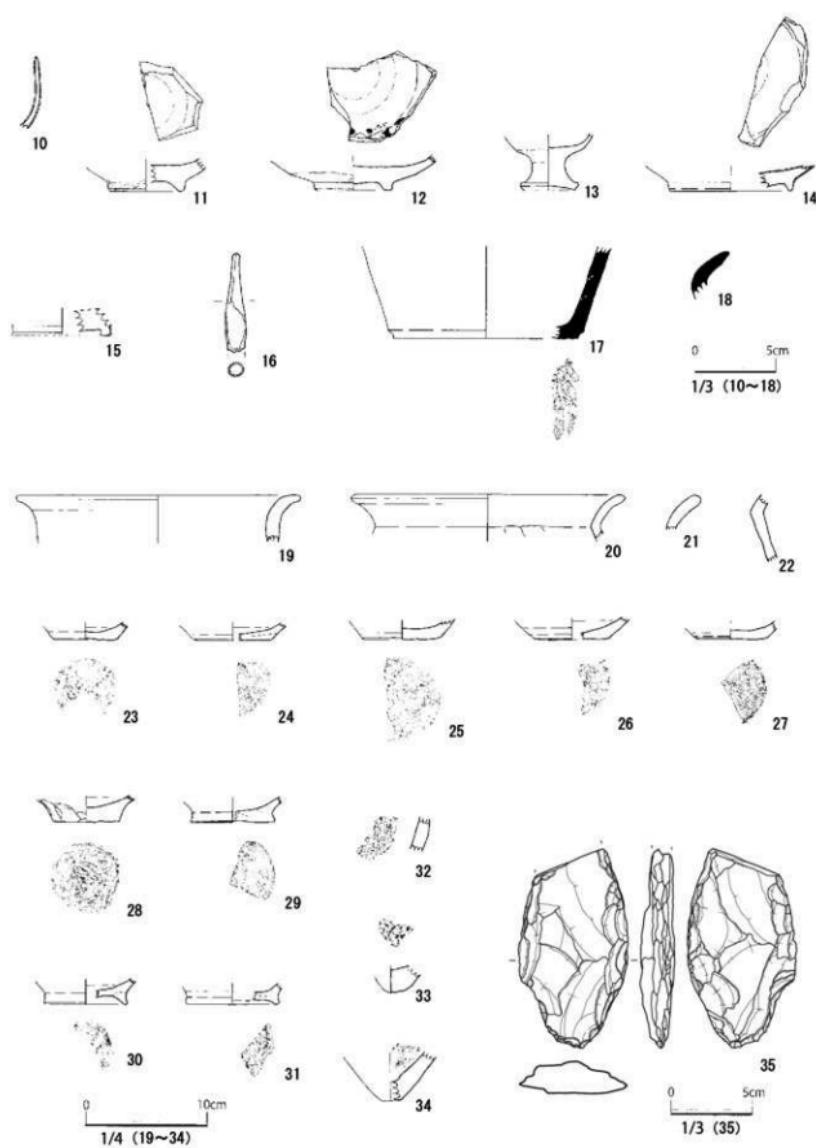
9は苗代川系、10～13は龍門司系である。5は甕の口縁部で、口縁部が内側にL字状に屈曲する。内外面ともに部分的に施釉と露胎がみられる。6は口縁部に2条の凹線が巡る。口縁部の折り返しから口唇部にかけて短い。口唇部のみ露胎する。7は口縁部に2条の回線が巡る。口縁部は折り返して断面逆L字状を呈す。内外面とも全体に自然釉がかかる。8・9は擂鉢である。8は、口縁部がくの字状を呈し、口縁部下に2条の凸帯が巡る。内面口縁部の下部に擂目を残し、内外面ともに施釉する。9は口縁部が逆L字状を呈し、内面には格子状の擂目が残る。内外面ともに施釉する。10・11は碗である。10は口縁部から胴部で、内面の一部に無釉箇所がある。11は底部で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台内は露胎する。12は皿の底部で、外面は高台内も含めて施釉し、高台から胴部にかけて透明釉、統けて白色釉がかかる。内面の見込みに蛇ノ目釉剥ぎが見られ、鉄絵が描かれている。18世紀頃の所産と考えられる。13は仏飯器の胴部から底部で、短い脚部を有し、小型の高壺状の器形を呈する。腰部で折れ大きく外反する。外面の高壺状の部分に白色釉及び透明釉を施し、脚部は露胎する。14・15は青磁の龍泉窯系で、14世紀後半から15世紀前半の所産と考えられる。14は皿、15は碗の底部である。14は見込みに圓線が巡り、オリーブ黄の釉がかかる。15は推定底径5.9cmを測り、高台から胴部に立ち上がる箇所が欠損している。16は銅製の煙管の吸い口で、一部欠損している。内部に木質等は残っていない。17・18は中世の須恵器である。17は東播系須恵器のこね鉢で、平底を呈する。底面の残存が少ないため明確ではないが、何らかの圧痕がみられる。内面、外面の底部の一部及び断面に赤茶色の付着物がみられる。18は瓶の口縁部で、内外面の所々に赤茶色の付着物がみられる。19～31は古代土師器である。19～22は甕である。19～21は口縁部で、内外面とも横方向のナデを施す。20は口縁から頸部にかけてのもので、内外面は横ナデ、内面にだけケズリが見られる。一部分にサビのような付着物が付いている。胴部から底部を欠損しているため厳密な時期比定は困難であるが、概ね今塩屋編年3～4期と想定される。22は頸部付近で、外面の頸部付近にカキ目、内面に粗いナデを施す。23～31は壺の底部である。23は底径5.3cm、ヘラ切り底である。24はヘラ切り底で、内面は回転ナデの後ナデが見られる。25・26はヘラ切り底で、全体的に風化著しい。27は底部に門歛痕を残す。28は外面の底部付近に粘土を削った痕があり、高台を削り出している可能性がある。29は円盤状高台を呈する。30・31は高台付壺で貼付高台である。30は高台内に貼付痕跡が見える。31は風化著しいため明確ではないが、30に比べ高台の高さは低いと考えられる。32～34は布痕土器の胴部及び底部である。風化著しく残存部分も少ないが、胎土に大きい粒子をわずかに含み、内面に布目痕を残す。35は石斧で、基部側を大きく欠損する。全体的に摩滅が進み、側縁部から刃部にかけては、稜線が強く摩耗し丸みを帯びている。縄文時代の遺物と考えられる。



第6図 水田造構 平面図



第7図 水田造構 出土遺物①

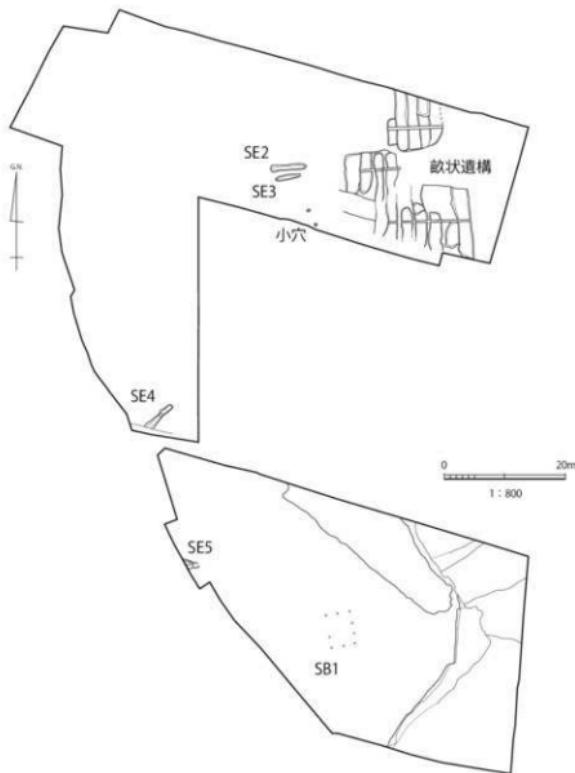


第8図 水田造構 出土遺物②

第3節 平安時代の遺構と遺物

(1) 遺構の分布 (第9図)

A区及びD区の中央付近の霧島御池軽石層上面が平安時代の遺構検出面である。D区では、多くのピット群が広がる中で、SA5やSA6と近似する主軸をもつ掘立柱建物跡(SB1)を1棟検出した。SB1周辺は、霧島御池軽石層の上位層である基本土層IV層～VI層が、昭和50年代の圃場整備事業によりほぼ削平されていて、旧地形ではもう少し高かったと考えられる。また、A区では、ほぼ東西方向に走る2・3号溝状遺構(SE2・3)、C区とD区の境界で4号溝状遺構(SE4)を検出した。SE2・3は、検出面からの深さは0.15m程度であった。SE4は、全長約5.5mで、幅は約1.5m、検出面からの深さは約0.2mを測る。溝の走向は、北東から南西方向で、同方向に徐々に深くなる。いずれも遺物は出土しなかった。

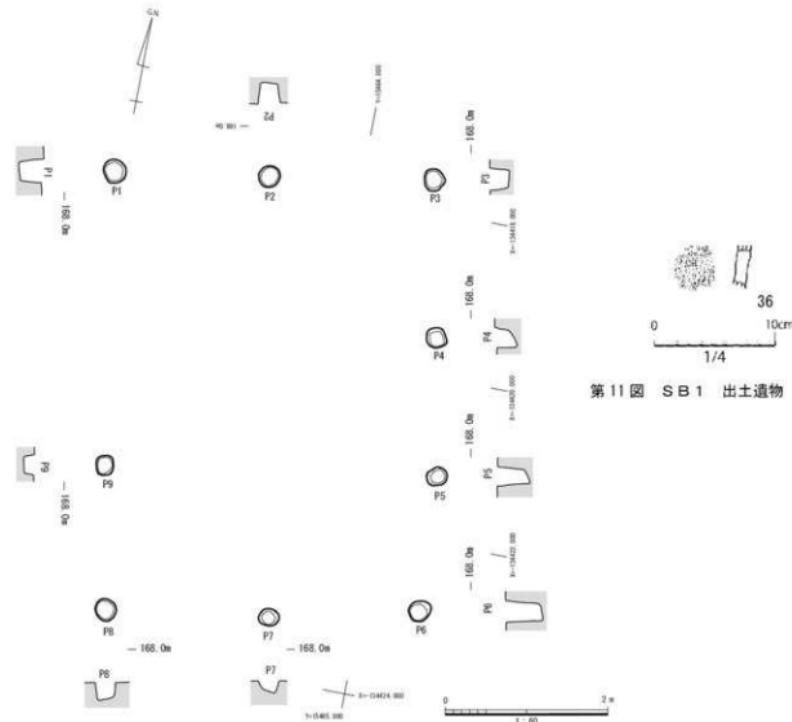


第9図 平安時代 遺構分布図

(2) 堀立柱建物跡 (SB 1)

1号堀立柱建物跡 (第10・11図)

G 11・12 グリッド中央やや西よりの平坦面に位置する。2間×3間の側柱で、西側の桁が3本の柱となる。平面は長方形で、柱間は、P 1-P 2間 1.94 m、P 2-P 3間が2 m、P 3-P 4間が1.98 m、P 4-P 5間が1.68 m、P 5-P 6間が1.7 m、P 6-P 7間が1.85 m、P 7-P 8間が2 m、P 8-P 9間が1.78 m、P 1-P 9間が3.64 m、梁行が3.85 m～3.95 m、桁行が5.36 m～5.4 mである。主軸は、N-10°-Wとなる。各柱穴は、不整円形を呈し、柱穴の規模は径0.22 m～0.3 mで、検出面からの深さは、P 1～4及びP 8は0.19 m～0.27 mと揃えるが、P 7が0.11 m、P 9が0.14 mと他に比べて浅く、P 5とP 6はそれぞれ0.36 m、0.44 mと深かった。浅い柱穴については、上位層が、後世に削り込まれ検出面が下がっていると考えられ、実際は各柱穴が、P 6のような深さをもつ柱穴であったと推察される。出土遺物は、P 4からの1点を掲載している。36は、布痕土器の胴部で、内側に布目痕が残存する。

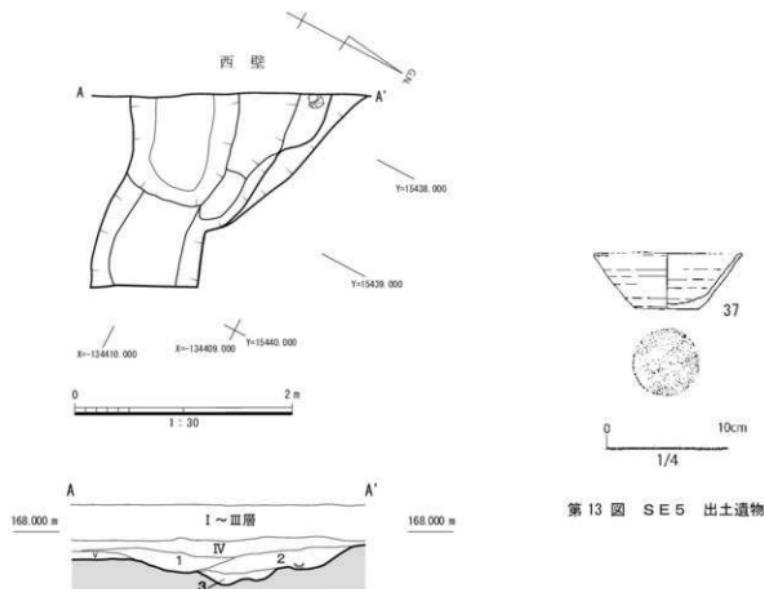


第10図 SB 1 平面図・断面図

(3) 溝状遺構 (SE 5)

5号溝状遺構 (第 12・13 図)

S A 3 の西辺を検出するため、調査区境界の西壁を約 1.8 m 程度拡張して掘削したところ、V 層上面で検出した。部分的な検出であるため全体形等は不明である。調査区壁までの長さは約 1.7 m、幅約 1.0 m ~ 2.2 m、検出面からの深さは最深部で約 0.4 m を測る。溝の走向は S E 4 と同方向で、南西方向に向かって徐々に深くなり、調査区外へ延びると考えられる。断面は浅い U 字形を呈している。埋土は 3 層に分かれ、黒褐色の粘質土で径 1 cm 以下の霧島御池軽石を少量含み、水分量が多い。溝の底面付近となる V 層中から土師器の壺 1 点が出土した。37 は、口縁部と底部の一部を欠損するほぼ完形の壺である。外面は回転ナデ調整で、内面は回転ナデ後ナデ消しがみられる。底部はヘラ切りである。口径 12.3 cm、底径 5.3 cm を測る。



第 13 図 SE 5 出土遺物

I ~ V は基本土層参照

- 1 10YR2/1 黒 黒色粘質土 5mm 以下の御池ボラを少量含む
- 2 10YR2/2 黒褐 粘質土 5mm 以下のボラを少量含む しまり有
- 3 10YR2/2 黒褐 強粘質土 1mm 以下のボラを少量含む 水分量多い

第 12 図 SE 5 平面図・土層断面図

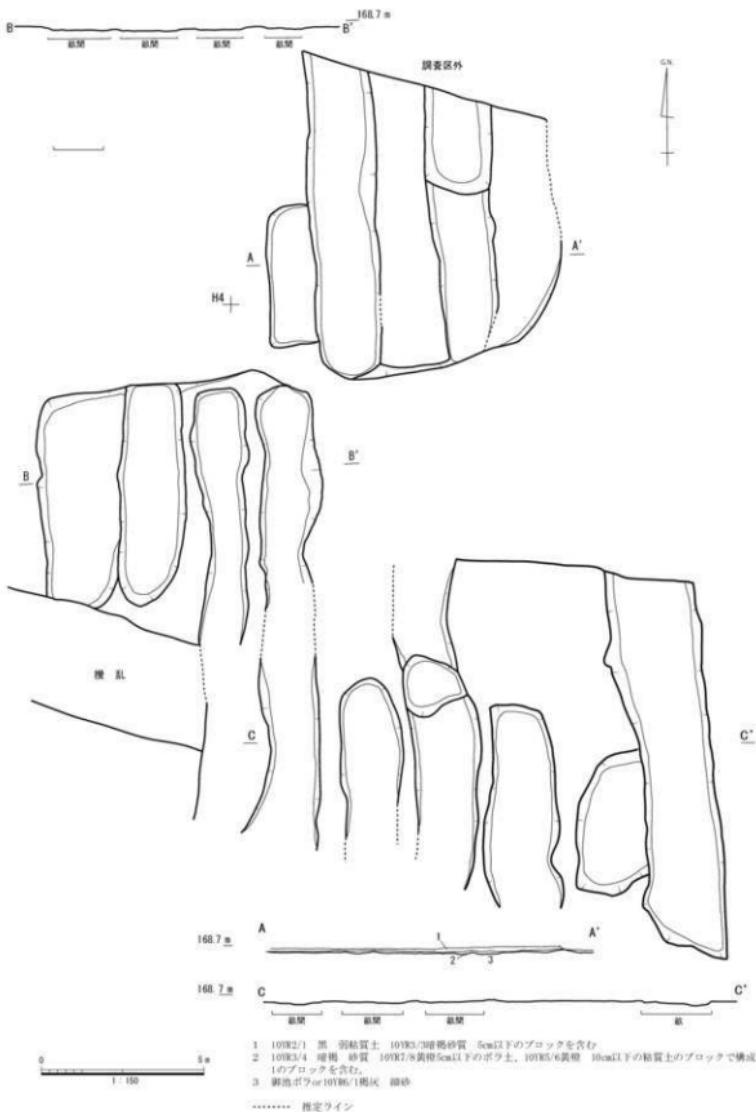
(4) 畝状遺構（第 14～17 図）

A 区 H3・G4・H5・I5 グリッド付近の霧島御池軽石層上面で検出した。G3 グリッド杭を起点にして南東側約 30 m 方四の範囲に、長さ約 7 m～10 m、幅 1.3 m～2 m で、ほぼ南北方向に畝間が並列している。深さは約 10 cm である。本遺構周囲が広範囲に渡って削平されており、部分的な検出にとどまっている。埋土は、2 層に分かれ、下層ほど霧島御池軽石を含む割合が多くなっている。畝は、地形に制約を受けたと考えられ、ゆるやかな曲線状を呈する箇所や直線状に伸びる箇所がある。

遺物は 64 点を図化掲載した。古代の遺物は 50 点で、土師器は 30 点、須恵器は 20 点である。38～40 は甕で今塙屋編年甕 II A 類と思われる。38 は頭部から口縁部に向かって外反する。外面及び内面の頭部から口縁部にかけてハケ目がみられる。39・40 は、内外面の頭部から口縁部にかけてカキ目がみられる。頭部から口縁部にかけて 39 は外反、40 はくの字状に屈曲する。41～61 は壺である。41 は、口縁部から胴部で、推定口径 14.2 cm である。内外面は回転ナデ調整で、胴部から口縁部に向かって直線的に延びる。42～44 は口縁部である。内外面とも回転ナデ調整で、口縁部は直線的に延びる。45 は胴部で、内外面とも回転ナデ調整である。46～61 は底部である。46・47 は底部の形態が他と比べ厚い。底面はヘラ切りである。48 は内外面とも回転ナデ調整で、底面に黒色物質が付着する。49 は推定底径 5.8 cm で、内外面とも回転ナデである。50 は推定底径 5.4 cm で、内外面とも回転ナデ調整である。外面に粘土の塊のようなものを残す。51 は底面が若干の膨らみを有し、ヘラ切りである。52 は、底面中心に向かって形態が薄くなる。底面はヘラ切りである。53 は胴部から底部で、内外面とも回転ナデ調整で風化気味である。底面にヘラ切りと門歯痕を残す。底部から胴部に向かって直線的に立ち上がる。54 は推定底径 6 cm で、底部から体部に直線的に立ち上がる。55 は、推定底径 7.4 cm で、内面は回転ナデ後に一部工具痕を残す。56 は、内面底面に丁寧なナデかミガキがみられ、その中に変色がみられる。57 は、推定底径 4.8 cm で、内外面は回転ナデ調整である。58 は推定底径 4.8 cm で、内外面とも回転ナデ調整である。59 は、推定底径 7 cm で、内外面とも風化が著しく調整不明である。60 はほぼ完形で、円盤状の高台を貼り付けて形成したと考えられる。底面は回転ヘラ切りである。61 は完形で、内面側底部に化粧土を一部残し、ヘラ切りである。外面に漆と思われる付着物を残す。

62～65 は、高台付壺である。体部上半をほとんど欠いている。62 は高台が外方に開き、端部が平坦に近い。63 は、62 と比べ高台の器高が低い。64 は端部が尖り気味になり、高台先端の断面が三角形状になる。65 は端部が欠損し、形状は不明である。底面は全てヘラ切りである。66・67 は高台付壺の底部である。66 は推定底径 7.2 cm で、内面は黒色である。端部は丸みを帯び、摩耗気味である。高台内に門歯痕を残す。67 は底部及び高台端部を欠損している。内面は黒色でミガキが施され、光沢を帯びている。68 は布痕土器で口縁部から胴部で、推定口径 14.3 cm である。内面に布目痕が残存する。

69～88 は須恵器で、69～81 は甕である。69 は口縁部片でくの字に外反する。内外面とも回転ナデ調整である。70 は頭部でくの字に外反する。頭部下位に回転横ナデ後格子目タタキ後一部ナデ消し、頭部付近は回転横ナデである。内面は痕が深くていびつな同心円当て具痕を残す。71～81 は胴部である。71 は、外表面は格子目タタキを施し、内面は多方向のナデ後指押さえがみられる。72 は格子目タタキを施し、一部焼成時に空気が入って膨らんでいる箇所がある。内面はナデ調整が認められる。73 は、外表面は格子目タタキ後ナデ消し、内面は無文タタキがみられる。74 は、外表面は格子目タタキを施し、内面は同心円当て具痕半磨り消しがみられる。75 は胴部から底部で、外表面は格子目タタキを施し、内面は当て具



第14図 敗状造構 平面図・土層断面図

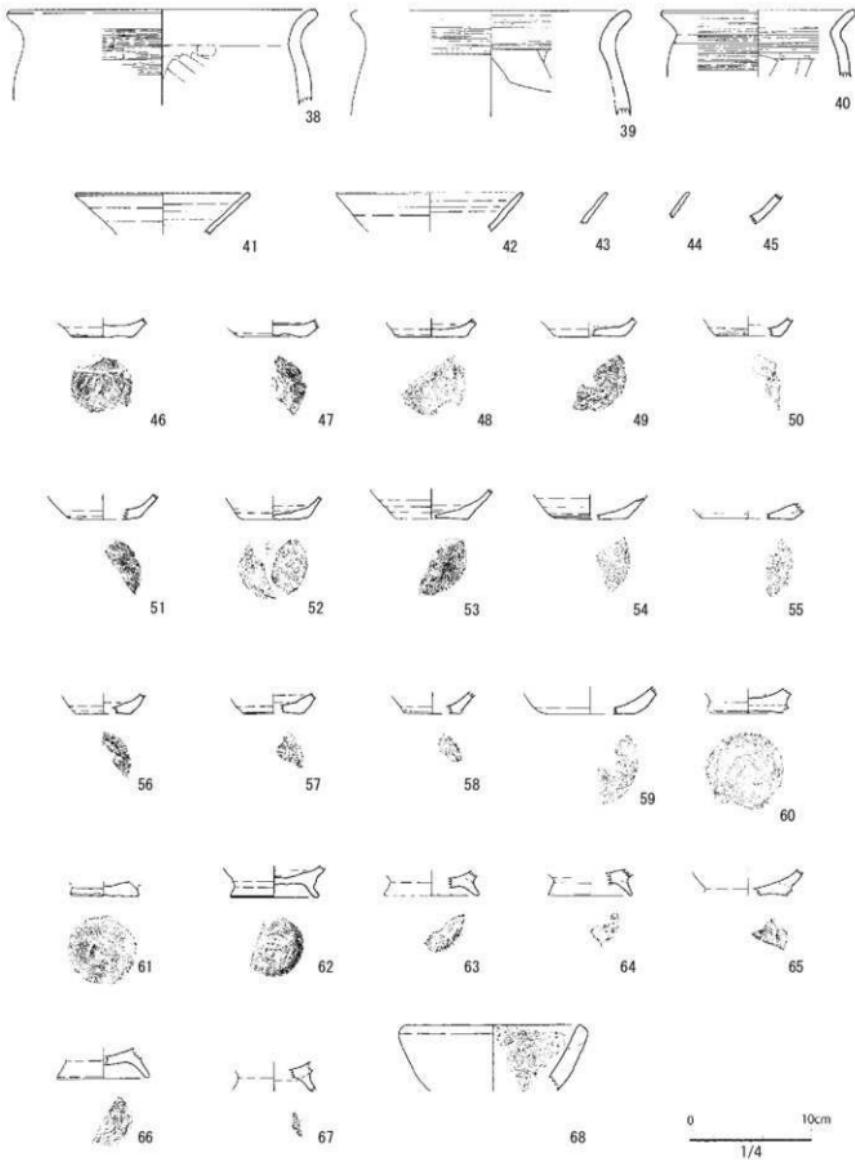
痕がみられる。76は、外面は格子目タタキを施し、内面は当て具痕がみられる。77は、外面は格子目タタキを施し、内面は平行タタキ後ナデがみられる。78は、外面に平行タタキを施し、内面に同心円当て具痕がみられる。79は、外面は平行タタキを施し、内面は当て具痕がみられる。80は、外面は平行タタキを施し、内面は当て具痕がみられる。81は、内外面とも平行タタキを施し、内面の一部にナデがみられる。82は壺の口縁部で、内外面に自然釉がかかる。83は壺または瓶の口縁部片である。内外面とも回転ナデ調整で、口唇部に横ナデがみられる。84は瓶の頸部である。内外面とも回転ナデ調整で、頸部の一部に打ち欠きがみられる。85は短頸壺の頸部である。外面の頸部上位は回転横ナデ調整で、自然釉がかかる。頸部下位はタタキ後にナデがみられる。頸部推定径は11.6cmである。86・87は胴部である。86は、外面に格子目タタキ後ナデを施し、内面に横方向及び斜方向のナデがみられる。87は、内外面とも回転ナデ調整がみられ、外面の一部に自然釉がかかる。88は甌または壺の胴部である。内外面とも回転ナデ調整で、外面には部分的に自然釉がかかる。89は越州窯系青磁の水注で、肩部の把手下部付近と思われる。オーリーブ色の釉を内外面に施す。90は緑釉陶器の皿の口縁部である。口縁部に横方向の沈線が巡る。口縁部はやや外反する。91～93は、白磁である。91・92は景德鎮窯系で16世紀頃の所産と思われる。91は碗の口縁部片である。口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部は丸みを帯びる。体部は厚い。92は皿の口縁部片で、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、口縁部が外反する。93は皿の口縁部片で時期不明である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。

94～97は、古墳時代の土師器である。94は壺の口縁部で、外面は横方向のナデ後縱方向のナデ、上部に横方向の強い工具痕がみられる。全体的にススが付着する。内面は横方向のナデである。95は高壺の口縁部である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整がみられる。傾き不明である。96は、壺の底部付近で丸底を呈する。内外面ともナデ調整である。内面の一部に黒色物が付着する。97は壺の口縁部から胴部である。胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。外面は工具による調整後ナデ、内面は工具によるナデ後工具痕をナデ消す。

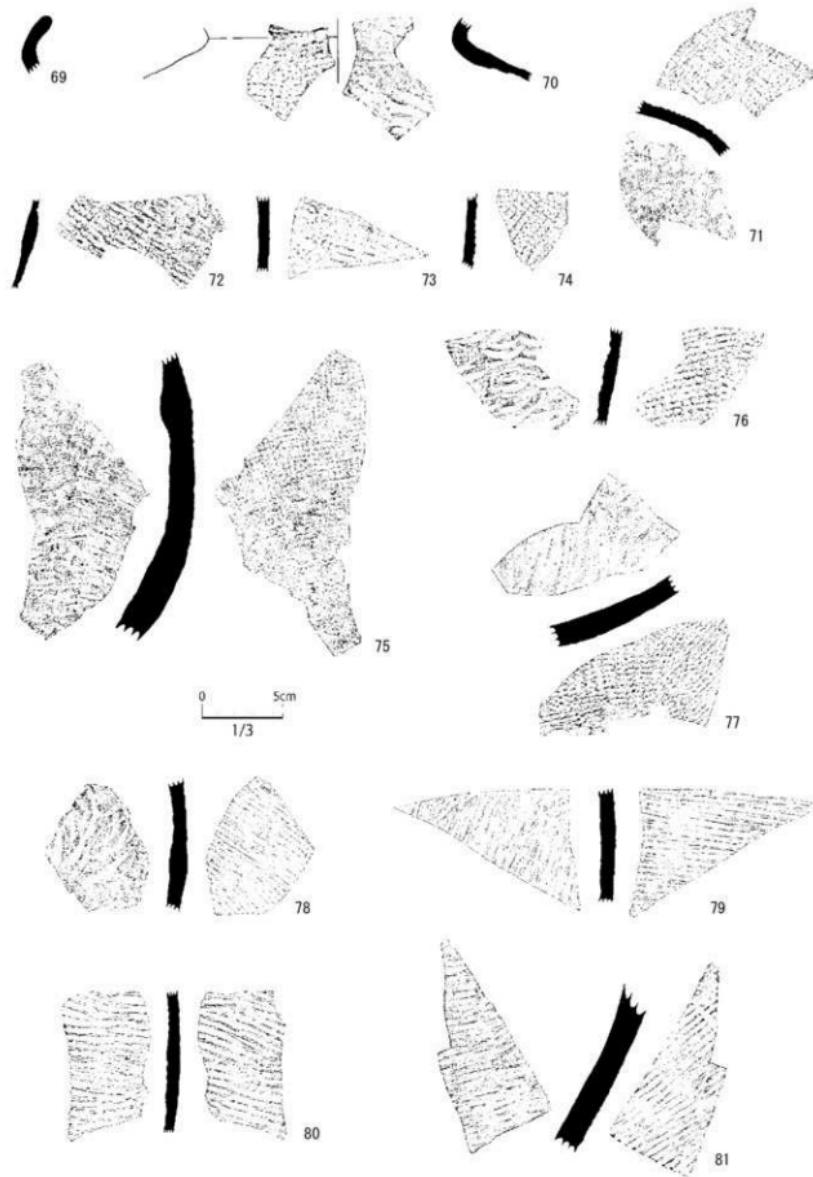
98は古墳時代の須恵器で、高壺の脚部である。突帯と透かしをもつ。5世紀後半の所産と思われる。内外面とも回転ナデ調整がみられる。

99・100は縄文時代後期に該当する土器である。99は丸尾式土器の口縁部で、外面に斜方向の貝殻腹縁刺突文を、内面に多方向の貝殻条痕を残す。100は型式不明の口縁部である。内外面は横方向のミガキがみられる。全体的に風化著しい。

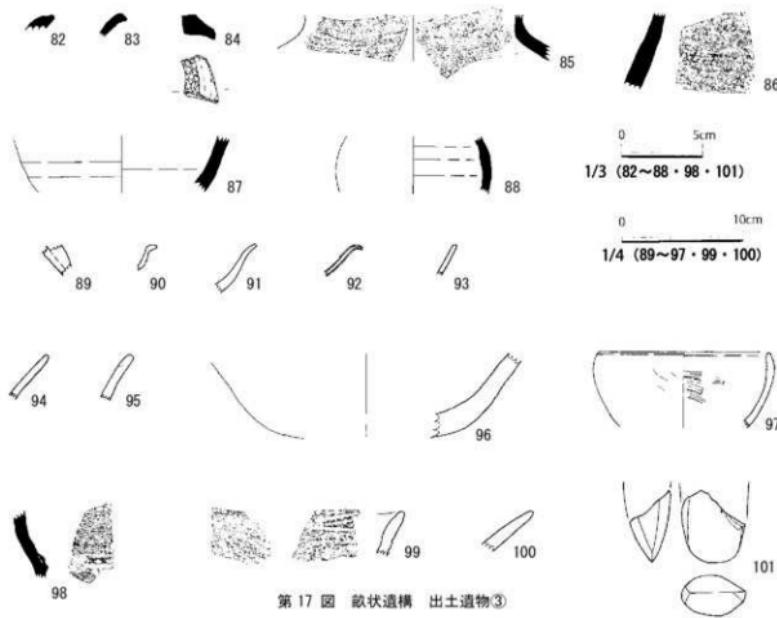
101はホルンフェルス製の両刃の磨製石斧で、刃部のみ残存する。側面に稜線が走り、使用痕はない。縄文時代後期頃の所産と思われる。



第 15 図 破片遺構 出土遺物①



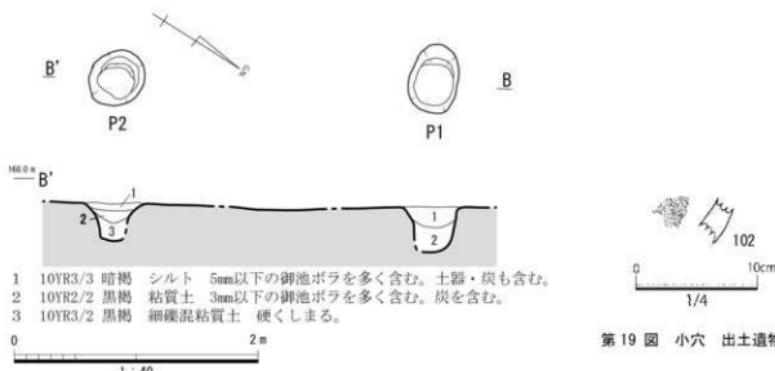
第16図 鉱状遺構 出土遺物②



第17図 鮫状遺構 出土遺物③

(5) 小穴 (第18・19図)

S A 1北東側で小穴を2基検出した。規模は、P 1が径約0.34m、深さ約0.4m、P 2が径約0.3m、深さ約0.32mであった。2つの小穴が似通っていることから、北側や南側でさらに連続する可能性を考え精査したが、この2基以外は検出できなかった。102は、P 1から出土した布痕土器の胴部片で、内面に布目の圧痕が残る。



第18図 小穴 平面図・土層断面図

第19図 小穴 出土遺物

第4節 古墳時代の遺構と遺物

(1) 遺構の分布

古墳時代の遺構は、第IV層除去後のV・VI層において検出した（第5図）。調査地最南に位置するD区は、北東から南東側にかけて広範囲で擾乱されている。古墳時代の遺構は、中央から西側にかけて古墳時代中期から後期に属する堅穴建物跡4軒（SA3～SA6）、調査地北部のA区中央付近で、古墳時代前期から中期に属する堅穴建物跡1軒（SA1）、A区西側で溝状遺構1条（SE1）を検出した。C区西側では、堅穴建物跡1軒（SA2）を検出した。

(2) 堅穴建物跡（SA1～6）

1号堅穴建物跡（SA1）（第20・21図）

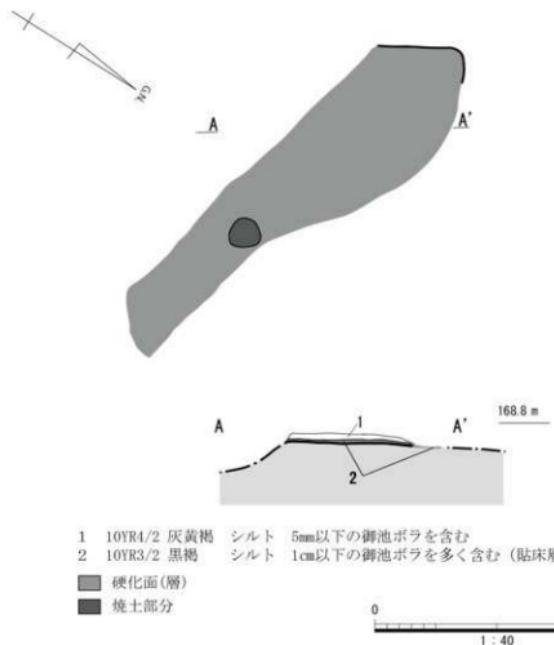
III層の除去後に、5Fグリッド付近で検出した。A区とB区の境界にあった、約0.6m幅の現代の畦を取り除いたところ、土壌が硬化した面が確認でき、調査の進捗に伴い堅穴建物跡の一部と判断した。畦があった箇所以外は、昭和50年代の圃場整備事業により大きく削平を受けている。

建物の主軸は、N-16°-Wをとる。これは、D区で検出した堅穴建物跡（SA3・5・6）の主軸とほぼ平行する。上述の通り、遺構のほとんどは削平されており、床面の一部のみを検出した。床面は、遺構検出面とほぼ同レベルで、長さ約3m、幅は広いところで約1m、深さ約4cm程度の範囲を残すのみであった。硬化面の広がりを確認したところ、西側で堅穴建物跡の床面隅角部分と考えられる箇所を検出できた。全体的な平面プラン及び柱穴は確認できなかった。中央付近には、被熱した部分があり、地床炉跡と考えられる。

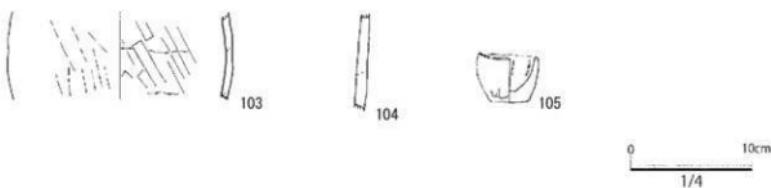
遺物は、残存する埋土中から甕などの土師器類が出土した。その他、炭化物の小塊が多く出土したので、床面上から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。（第IV章参照）

遺物は3点を図化掲載した。

103と104は甕の胴部である。103は、内外面とも斜方向の工具ナデが施されている。104は、内外面とも斜方向工具ナデが施されており、外面の一部にススが付着している。105は、ミニチュアの土師器で、ほぼ完形である。内外面に指ナデが見られ、器表の風化が著しい。内面にのみ、一部工具によるナデが見られる。



第20図 S A 1 平面図・土層断面図



第21図 S A 1 出土遺物

2号竪穴建物跡（S A 2）（第22・23図）

C 7グリッドの霧島御池軽石層上面で、表土除去後に検出した竪穴建物跡である。周囲には、30 m程離れた南東側に竪穴建物跡（S A 3～5）が存在する。

昭和50年代の圃場整備事業により、床面近くまで、大きく削平を受けていた。遺構の南東部の一部は、現代のイモ穴により搅乱されている。

S A 2の平面形は、長軸3.0 m、短軸2.5 mの隅丸長方形を基調とし、主軸はN-28°-Wで、S A 4とほぼ平行する。遺構検出面から床面までの深さは、中央付近で最大約0.16 mを測る。床面積は約7.5 m²である。

床面では、7基の小穴を検出した。主柱穴はP 1・P 2・P 3・P 4で、P 1-P 2間が約1.5 m、P 2-P 4間が約1.4 m、P 3-P 4間が約1.4 m、P 1-P 3間が約1.5 mである。規模はいずれも、径約0.2 m、深さ約0.05～0.15 mと浅い。貼床は検出できなかったが、床面全体が硬化していることから、貼床を構築せず地山（霧島御池軽石層：第X層）を生活面としていたと考えられる。

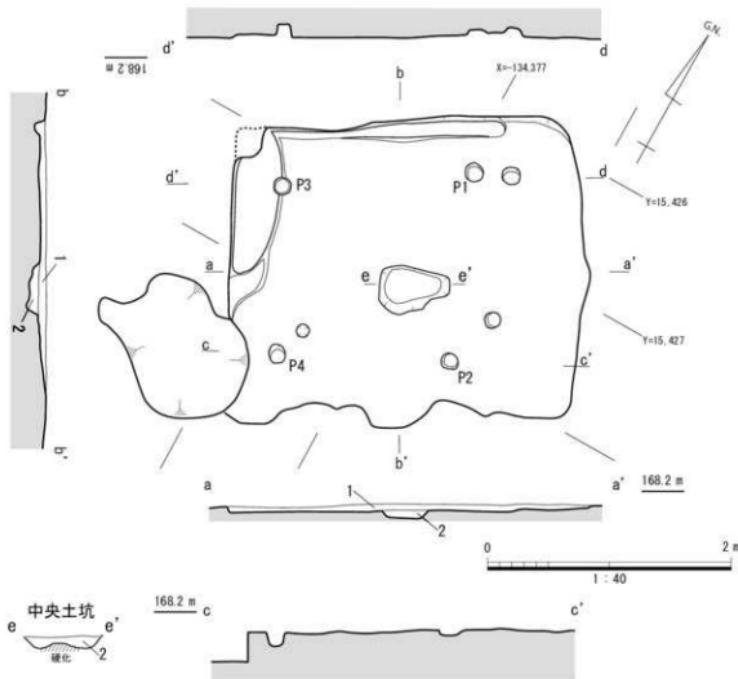
中央付近では、規模が径約0.36 m～0.48 m、深さ約10 cmの不整梢円形を呈する土坑を検出した。埋土中にごく僅かな焼土があった。その他の小穴は、性格不明である。また、北西部分で、幅約6～10 cm、深さ約8 cmの壁溝を検出した。

竪穴建物跡の埋土は、2層に分層した。風化した霧島御池軽石を多量に含む暗褐色系粘質土からなり、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物の出土は、土師器3点、須恵器1点の計4点である。

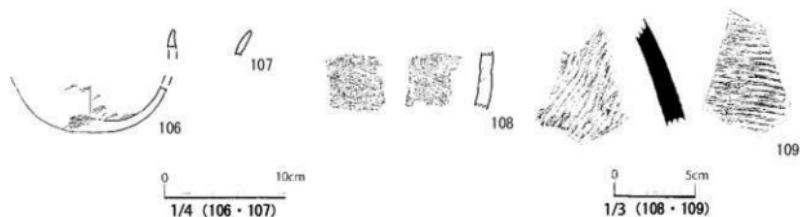
106は古墳時代の土師器で、壇の口縁部と底部である。口縁部の内外面は横ナデ、底部の内外面はヘラミガキで調整され、胴部欠損である。107は古代の土師器で、壇の口縁部である。内外面とも回転ナデで仕上げている。108は古墳時代の土師器で、壺の胴部である。外面はナデと所々に強い工具痕が残り、棒状の圧痕が一箇所見られる。内面にも多方向に工具痕が広範囲に広がる。

109は古代の須恵器で、壺の胴部である。外面は平行タタキ、内面は平行當て具痕がみられる。



- 1 10YR3/4 喪掲 粘質土 5mm以下の霧島御池軽石を多く含む。細かい炭も少量含む。
2 10YR3/3 喪掲 粘質土 5mm以下の霧島御池軽石を多く含む。極小の焼土をわずかに含む。

第22図 S A 2 平面図・断面図・土層断面図



第23図 S A 2 出土遺物

3号竪穴建物跡（S A 3）（第24～26図）

D 10 グリッドのIV層上面で、検出した竪穴建物跡である。東側約5mの位置に4号竪穴建物跡（S A 4）が近接する。

遺構西辺が当初設定した調査区の外へ至るため、西辺の立ち上がりを土層観察用ベルトで断面を確認しながら、調査区を拡張した。

S A 3の平面形は、一边が約4m四方の方形を基調とし、主軸はN=15°～Wで、S A 1・5・6と平行する。遺構検出面から床面までの深さは約0.7mであった。ピット間の距離がほぼ等間隔であることから、P 1～P 4を主柱穴とした。P 1が径約0.34m、深さ約0.1m、P 2が径約0.3m、深さ約0.16m、P 3が径約0.4m、深さ約0.14m、P 4が径約0.32m、深さ約0.24mである。中央付近には地床炉が作られており、一部被熱した箇所があった。その他の小穴は、いずれも用途不明である。

埋土は、黒色系粘質土からなり、12層に分層できる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と判断した。貼床は、径1cm以下の霧島御池軽石を含む黒色あるいは灰黄褐色の粘質土で、全面に施されている。厚さは2～3cm程度で固くしまっていた。8層及び10層は、地下水に含まれる鉄分の酸化により赤化していた。

遺物は主に4、5、8層に含まれる。8層から出土した遺物は、そのほとんどが床面に近い高さで出土した。検出面に近い層で出土した遺物には、古代の遺物が多く含まれる。古代の溝（S E 5）が南側に近接し、本遺構の上に延びていたと考えられることから、住居廃絶後の過程で古代の遺物が埋まつたものと考えられる。

本遺構の北・東・南側の床面から一段高いところで、テラス状の平坦面を検出した。検出面からは、東・南側は深さ10cm前後、奥行が60cm前後、北側は深さ30cm前後、奥行が120cm前後を測る。住居との位置関係から竪穴建物に付随する施設と考えられる。（以下、「棚状施設」と呼ぶ。）北側の棚状施設内では土坑を検出した。土層の観察から、S A 3に先行する遺構と考えられるが、遺物の出土はなく、詳細な時期や性格は不明である。

遺物は38点を図化掲載した。110～113は甕で近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に該当する。110・111は口縁から胴部である。110は胴部から頸部にかけてやや内反したのち、口縁部へ直線的にのび、口唇部は丸みを帯びる。頸部に斜方向の刻目をもつ貼付突帯が1条巡る。口縁部付近に一部スス付着が見られる。111は、推定口径31.3cmと大きい。110と比べやや外へ傾き、胴部から口縁部までは直線的にのびる。頸部に1条の刻目貼付突帯とその剥離痕が残る。内外面とも横・斜め方向のナデがみられる。112は胴部で、斜方向の刻目貼付突帯が2条巡る。棒状の工具で2条とも押圧されている。113は底部で、幅4mm程度の工具によるナデがみられる。114は壺の口縁部から胴部である。球形の胴部を呈していて、頸部には斜位の刻目貼付突帯が1条巡る。外面の突帯部分と胴部の一部に黒変が見られ、口縁が梢円に変形している。115～123は高坏である。115・116は坏部の口縁部である。115は口縁部でやや外反し、内外面ともミガキがみられる。116は、口縁部にかけて直線状にのび、外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整がみられる。117～123は脚部である。117・120は脚柱部から裾部まで緩やかに外反し、スカート状に済曲して開く。118と119は同様の脚部と思われ、いずれも外面に縱方向のミガキがみられる。119は脚柱部と裾部に明瞭な段が見られる。121は、裾部で推定底径18.6cmを測る。122は外面にミガキがみられる。123は内外面とも横方向のナデがみられる。124は坏である。ほぼ完形であり、胴

部から口縁部にかけて内湾しながら延びる。125は鉢の口縁部で、内外面ともミガキがみられる。

126～142は、古代の遺物で、SA3の埋没過程で混入したものと考えられる。126～128は古代の甕で口縁部である。126は、胴部にふくらみをもち、頭部から口縁部にかけてくの字状に屈曲する。内面に頭部と口縁部の境を明瞭に残す。推定口径23.64cmである。127は126ほどの屈曲はないものの、ぐの字状に曲がる。内面の頭部と口縁部との境にあたる部分は欠損のため不明である。外面口縁部にカキメ、内面口縁部は回転ナデがみられる。推定口径18cmである。128は、頭部から口縁部にかけて逆L字状に屈曲する。外面口縁部に横ナデ後一部ナデ、頭部に横ナデ後縱方向のミガキの痕跡がわずかにみられる。129は高台付塊の底部である。体部から口縁部にかけて外側に直線的に延びるものと思われる。高台端部は面取りされ外側に開く。130は高台付坏で、内外面とも回転ナデ調整である。131～137は、土師器の坏である。131は口縁部から底部で、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整で、底面はヘラ切りである。底径と口径の差が大きい。132・134は、底面はヘラ切りで、内外面とも回転ナデ調整である。133は132や134に比べ、底部の形態が厚い。底面はヘラ切りである。135は外面の棱線が底部から体部にむかって逆L字状に曲がる。136は高台が外方に開き、先端が尖り気味となる。137は高台が欠損した底部である。底部はヘラ切りで、内外面とも回転ナデ調整である。

138は黒色土器の塊である。外面は回転ナデ、内面は黒色でミガキが施され光沢を帯びている。

139・140は、布痕土器の口縁から胴部である。内面に布目痕をもち、口唇部の断面が三角形である。

141・142は須恵器の甕で胴部である。141は、外面が平行タタキ、内面は当て具痕がみられる。内外面とも風化著しい。142は全体的に焼成不良である。外面の調整は不明で、内面は平行当て具もしくは同心円当て具痕がみられる。

143～146は石器である。143は上牛鼻産黒曜石製の石鎌である。両側刃が鋸歯状になっていて、左右一ヶ所ずつ強い鋸歯状になっている。先端は欠損している。144は、ホルンフェルス製の石斧である。基部が欠損し、全体的に摩滅している。145はホルンフェルス製の剥片である。143～145は、埋没過程で繩文時代の包含層から混入したものと考えられる。146は砂岩製の砥石である。一部にサビの付着がみられる。

4号竪穴建物跡（SA4）（第27～29図）

E10グリッドにおいて、霧島御池輕石層（第X層）で検出した遺構である。約5m西側にSA3、約5m東側にSA5が接する。

SA4の平面形は、長軸3.6m、短軸2.8mの楕円方形を基調とする竪穴建物で、主軸はN-48°-Wで、SA2とほぼ平行する。遺構検出面から床面までの深さは、中央付近で最大約0.36mを測る。床面積は約10.08m²である。

床面では、11個の小穴を検出した。このうち、P9及びP11の2基を、その配置や構造から主柱穴であると判断した。その他の小穴は、用途不明であり、樹根等も含むと考えられる。P9-P11間は、約1.6mである。P9が径約0.17m、深さ約0.4m、P11が径約0.24m、深さ約0.32mである。この2つの柱穴は、建物の中央から北東寄りとなる。中央付近には地床炉があり、規模は径約0.7m～0.8m、深さ約3cmの不整梢円形を呈する。埋土中に炭化物が多く含まれており、その下層は全体的に赤化

していた。P 3は、直上ではほぼ完形の土器が出土し、遺物取り上げ後の検出となった。床の一部分で、霧島御池軽石が混じる暗褐色系粘質土による貼床を検出した。壁溝は、西角壁際から P 2 北角壁際、P 4 の東角壁際にかけて、幅約 6 ~ 10 cm、深さ約 6 cm のものを断続的に遺構の縁で検出した。

埋土は黒色系粘質土からなり、6 層に分けられる。レンズ状に堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。本遺構の検出時には、古代の遺物が集まって出土し、これらは埋没過程の最終段階で流入したものと考えられる。また、地床炉付近の炭化物と、土器に付着していた炭化物、計 2 点の放射性炭素年代測定を行った。(第 IV 章参照)

遺物は、埋土上層及び 4・5・6 層から出土している。4 層では、P 3 の直上となる建物南東角付近で、ほぼ完型の甕が横倒しの状態で出土した。(第 28 図参照)

遺物は 12 点を図化掲載した。

147 ~ 154 は、土師器である。147 ~ 148 は甕である。147 はほぼ完形の個体である。底部付近の一部が欠損している。底部から口縁部にかけて内反し、外面の頭部に 1 条の刻目貼付突帯をもつ。外面に横・斜方向の工具ナデが見られ、全体的にススが付着し、一部風化気味である。148 は口縁から胴部である。頭部に 1 条の刻目貼付突帯をもつ。刻目に布痕があり、突帯の一部に縦方向の強い条痕が残る。外面の口縁付近に微量のススが付着し、内面の口縁付近と胴部付近には炭化物の付着が見られる。

149・150・152 は高杯の坏部である。149 は、坏底部が狭く、屈曲部が不明瞭である。口縁部がわずかに外反する。内面は横・斜方向のミガキが見られ、黒斑が広がる。近沢編年(近沢 2016) 甕 2d 期に該当する。150 は口縁部で、口唇部が丸い。内外面とも横方向のナデが見られる。152 は、外面は横・斜方向のナデ後ミガキ、内面は多方向のナデ後ミガキが見られ、坏底部は狭い。

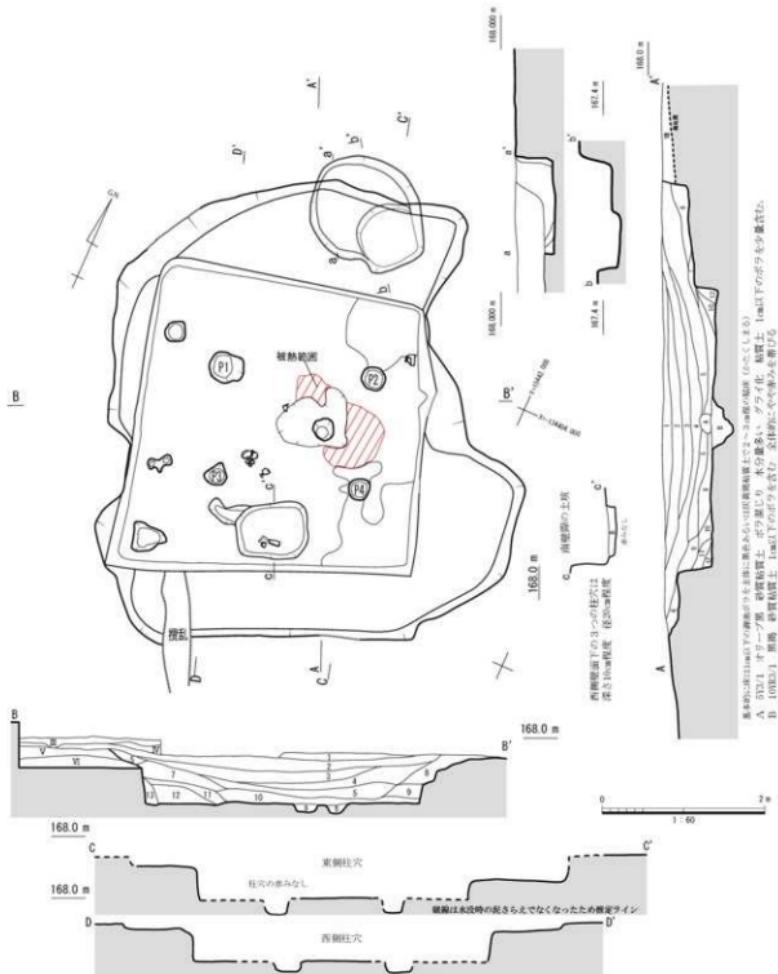
151 は坏の坏部で、粘土維目の部分に、横方向にナデ後、等間隔に斜めの溝を掘りこんでいる痕が残る。粘土の密着度を上げるためのものと考えられる。外面の一部に黒斑が見られる。

153 は坏部から脚部である。脚部内面に指によるつまみ出しと、粘土のしづりが見られる。近沢編年(近沢 2016) 甕 2d 期に該当する。

154 は脚部である。裾部にかけてハ字状にやや外反しながら開く。外面は縦方向のミガキ、内面に縦方向の工具ナデが見られる。近沢編年(近沢 2016) 甕 2d 期に該当する。

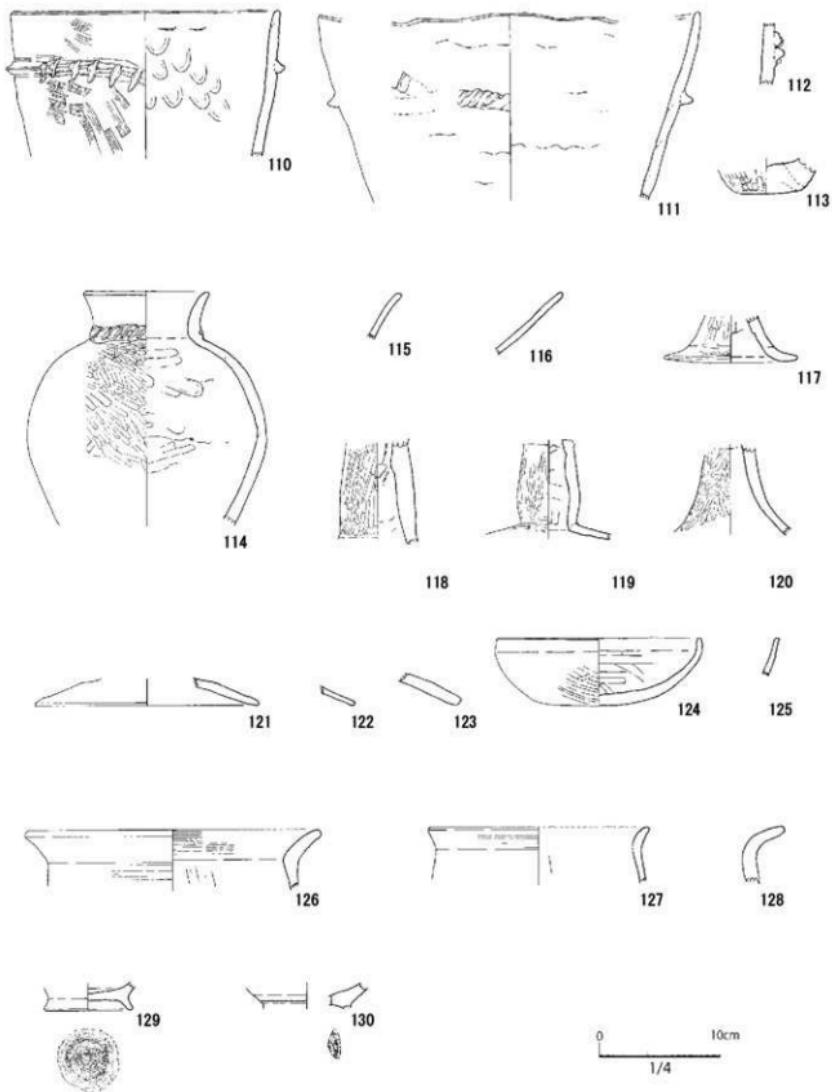
155 は尾鈴山酸性岩類の蔽石である。正面と裏面は磨っていて、側面に敲打痕が多数見られる。

156 は砂岩製の台石である。火による剥落が見られ、全体的に赤く焼けている。

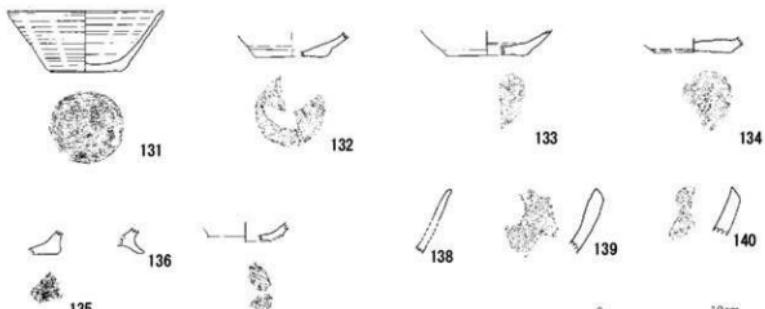


- 1 10YR2/1 黒 黒色粘質土 5mm以下の御池ボラを少量含む。
 2 10YR2/3 黒褐色 粘質土 1cm以下の御池ボラを少量、5mm以下を少量含む。ややしまりあり。
 3 10YR2/3 黑褐色 粘质土 2より多くの御池ボラを多く含む。
 4 10YR2/2 黑褐色 强粘质土 2cm以下の御池ボラを少量、1cm以下を少量、5mm以下を多量に含む。御池風化層を下部に含む。
 5 10YR2/2 黑褐色 强粘质土 2cm以下の御池ボラを多量に含む。
 6 10YR2/2 黑褐色 粘质土 5mm以下の御池ボラをごく少量、白色粒を少量含む。ややしまりあり。
 7 10YR2/2 黑褐色 粘质土 5mm以下の御池ボラをごく少量、白色粒を少量含む。
 8 10YR2/2 黑褐色 粘质土 2cm以下の御池ボラを含む。
 9 10YR2/2 黑褐色 粘质土 8よりもさらに多く含む。細纖維を含む。ややしまりあり。水分多い。
 10 御池ボラ風化層 ブロック
 11 10YR2/2 黑褐色 粘质土 9よりもさらに多く含む。2cm以下の御池ボラを多量に含む。水分量多い。硬くしまる。細纖維含む。水分つかりため全体的に赤化
 12 10YR2/1 黑 黏质土 1cm以下の御池ボラを多量に含む。細纖維含む。ややしまりあり。
 13 10YR3/3 喀褐色 粘质土 1cm以下の御池ボラを少量含む。

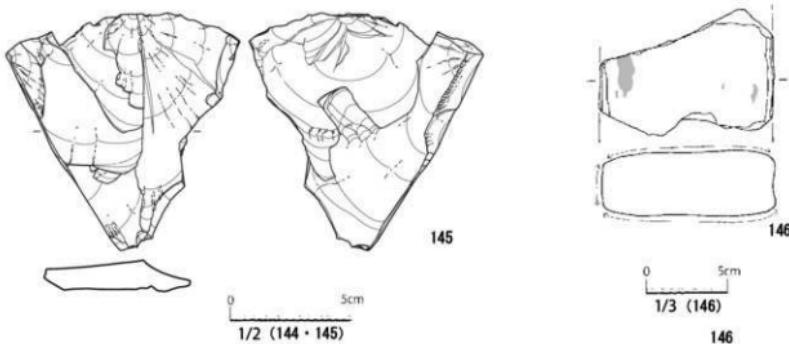
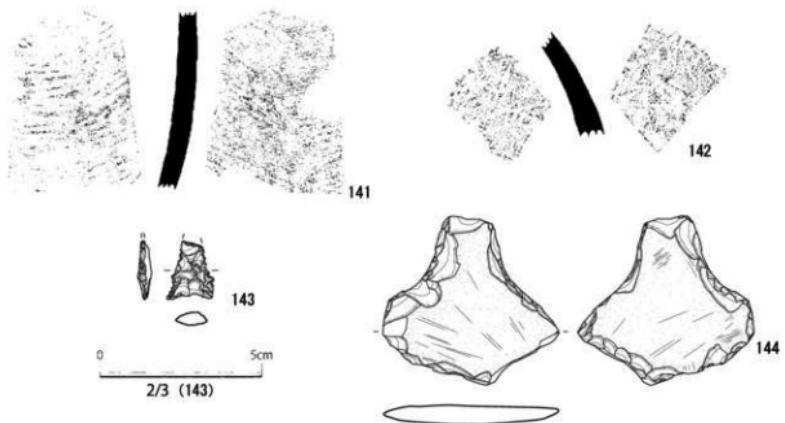
第24図 SA3 平面図・断面図・土層断面図



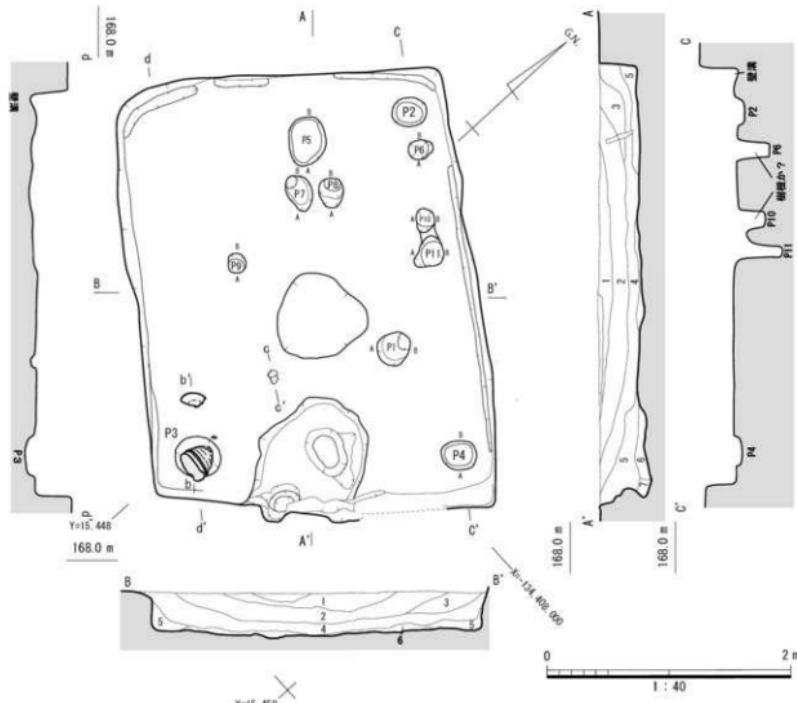
第25図 S A 3 出土遺物①



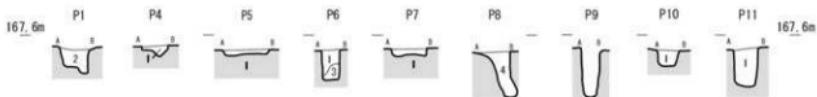
1/4 (131~140)
10cm



第26図 S A 3 出土遺物②

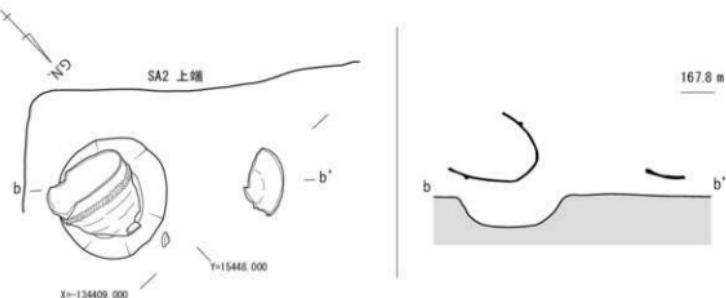


- 1 10YR1.7/1 黒 強粘質土 少量の御池ボラを含む 基本土層IVと同じ (遺物包含層)
- 2 10YR1.7/1 黒 強粘質土 1より御池ボラを多量に含む。
- 3 10YR3/2 黒褐色 粘質土 5mm以上の御池ボラを多く含む。
- 4 10YR3/2 黒褐色 粘質土 1cm以上の御池ボラを多量に含む。シルト質。
- 5 10YR3/1 黒褐色 粘質土 1cm以上の御池ボラを少量、1cm以下のボラを多量に含む。
- 6 10YR3/2 黒褐色 粘質土 1cm以下の御池ボラを少量、5mm以下を多量に含む。褐色のブロックを含む。

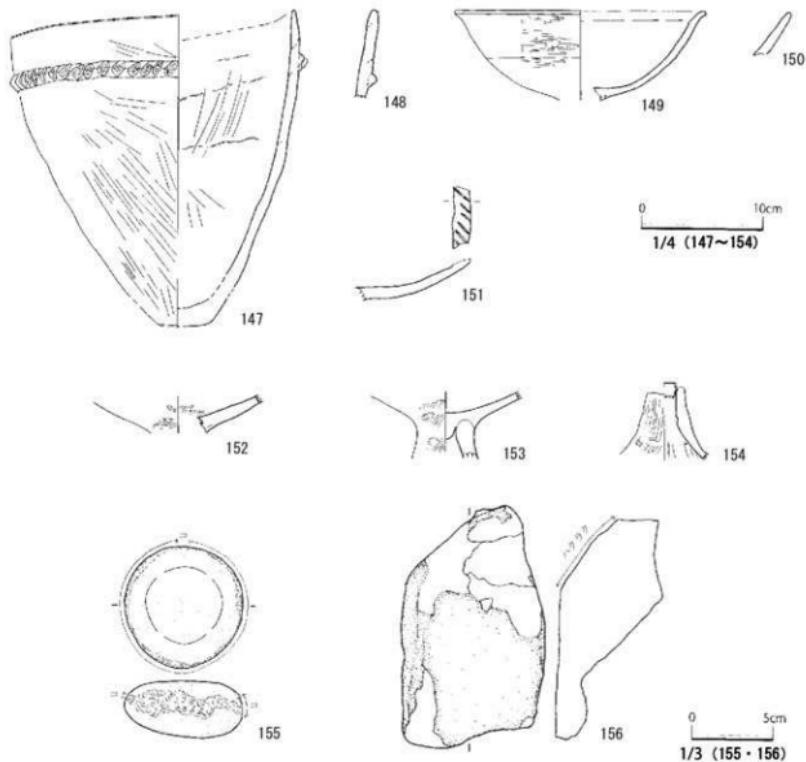


- 1 10YR2/2 黒褐 粘質土 1cm以上の御池ボラを多量に含む 所々に炭を含む
しまり有り
- 2 10YR3/1 黒褐 強粘質土 5mm以下の御池ボラを少量含む
- 3 10YR1.7/1 黒 強粘質土 5mm以下の御池ボラを多量に含む しまり有り
- 4 10YR3/2 黒褐 強粘質土 5mm以下の御池ボラを多量に含む

第27図 S A 4 平面図・断面図・土層断面図



第28図 SA4 遺物拡大図・断面図 (1/15)



第29図 SA4 出土遺物

5号竪穴建物跡（S A 5）（第30～35図）

S A 5は、F 10 グリッドにおいて、霧島御池軽石層の面で検出された。遺構の北東側は、D区内を縦断する大きな擾乱に破壊され、完全な形での検出とはならなかった。周囲には、約5m西側にS A 4、10m南東側にS A 6が隣接する。

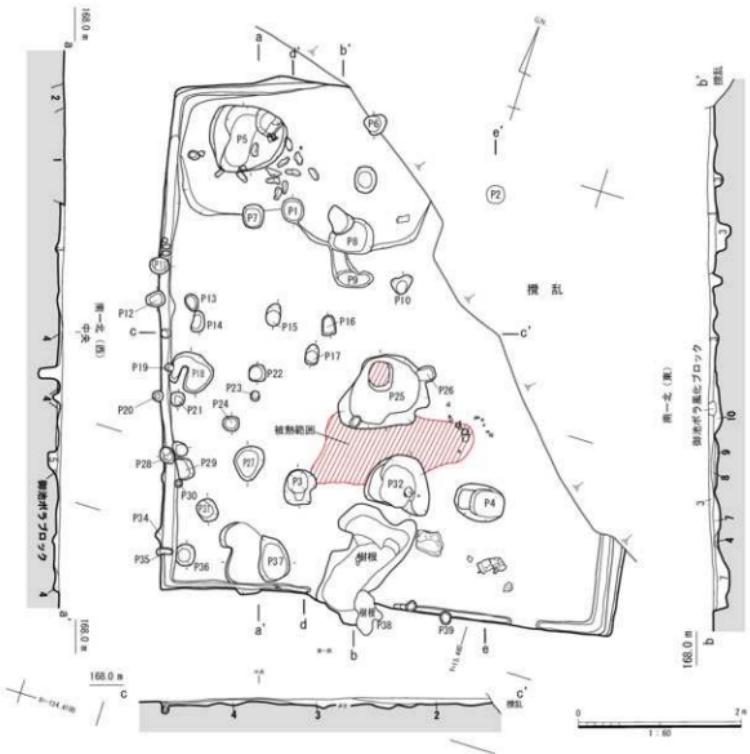
S A 5の平面形は、長軸約6.5m、短軸約5.6mの南北に長い長方形を基調とする竪穴建物跡で、主軸はN-12°-Wをとる。遺構検出面から床面までの深さは、約0.1～0.2mと浅い。近年の圃場整備により削平を受けたものと考えられる。床面積は約27m²である。床の一部分で、霧島御池軽石が混じる暗褐色系粘質土による、厚さ約3～6cmの貼床を検出した。

床面では、39基の小穴を検出した。主柱穴はP 1～P 4の4本で、P 1-P 2間が約2.5m、P 2-P 4間が約3.8m、P 3-P 4間が約2.4m、P 1-P 3間が3.4mである。規模は、P 1が径約0.28m、深さ約0.56m、P 2が径約0.28m、深さ約0.06m、P 3が径約0.4m、深さ約0.52m、P 4が径約0.42m、深さ約0.44mである。P 2の周辺床面は、擾乱を受けており、掘込の大部分を破壊されていた。位置や径の規模が共通することから、主柱穴の一つであると判断した。

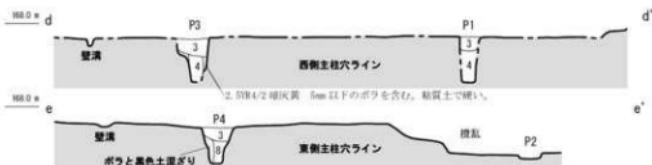
中央付近のP 25は、内部と周辺で硬化した箇所を検出した。炭化物が集中して検出され、赤化していることから、地床炉と判断した。規模は径約0.3m～0.36m、深さ約0.04m～0.1mの不整規円形を呈していて、埋土中には炭化物が多く含まれていた。南辺の一部を除き、幅10cm～14cm、深さ約14cmの壁溝が巡る。埋土は、黒色及び黒褐色系の粘質土からなり、10層に分けられる。そのうち、3～10層は住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺構北西部では、角がとれた直方体様の礫の一群（13個）が確認できた。長さ約15～19cm前後、重量約635～1140g前後で、石材はすべて砂岩で一貫性がみられる。大きさが近似した礫で構成されている。これら礫の直下は、床面の他の箇所と比べしまりのない埋土で、掘り下げたところ、南北約1m、東西0.8mの範囲で、周囲より10cm低くなつた。また、小さな炭化物の出土が目立つことから、中央付近の小穴から検出した炭化物と土器に付着していた炭化物など、計3点の放射性炭素年代測定を行つた。（第IV章参照）

遺物は32点を図化掲載した。157～160は甕である。157・158は口縁部から胴部である。157は、頸部から口縁部にかけてわずかに膨らみ、胴部はやや丸みを帯びる。外面の口縁部から頸部かけて、ふきこぼれの痕を残す。近沢編年（近沢 2016）甕2d・2e期に該当する。158は、外面頭部にススの付着、内面口縁部付近に黒斑が見られる。159は口縁部で、内外面とも斜方向のナデや工具ナデが見られる。160は胴部で、斜位の刻目を施した貼付突帯を1条もつ。刻み目には布痕を残す。161～164は壺である。161は頸部から胴部で、胴部はやや細長く、肩部で内側に内反する。形成時の指押さえの凹凸が全体的に残り、外面頭部に少しと肩部から下全体にススが付着している。内面は、7～8mmの幅の工具痕がはつきりと残り、外面同様の指押さえの凹凸が残る。162は口縁から頸部である。外面は、横ナデ後に縦方向のミガキが見られる。163・164は底部である。163は外面にスス付着、内面に黒斑を残す。164は、外面は工具ナデ、内面に指ナデを残す。165・166は台付鉢である。165は頸部から底部で、胴部は球状に丸みを帯び、胴部内面にはミガキ、外面には縦方向の工具ナデが残る。166は脚部で、外面は多方向のミガキ、内面は横方向のナデ、脚端部に黒斑が見られる。167～173は高壺である。167は、ほぼ完形である。全体的にいびつな形で大きく傾く。壺底部は皿状に広がるが狭い。壺底部と胴部の境の屈曲は



- 1 10TR4/3 にぶい黄褐色 粘質土 黄色ボラ混じり しまりなし 別造構か?
- 2 10TR4/3 にぶい黄褐色 粘質土 黄色ボラ混じり多い。
- 3 10TR2/2 黒褐色 /粘質土 黄色ボラ混じり 炭混ざる。
- 4 10TR3/3 黑褐色 粘質土 黄色ボラ混じり。硬くしまる。貼り床。
- 5 10TR2/2 黒褐色 黏質土 ブロック状のボラ(3cm程度)が混ざる。
- 6 10TR2/3 黑褐色 粘質土 やわらかい。黄色ボラ混じり。固構造土。
- 7 10TR3/2 黑褐色 強粘質土 4cm以下の御池風化層ブロックを含む。
- 8 10TR2/1 黒 粘質土 細繊など含む。
- 9 10TR3/3 喀斯特 粘質土 全体的に赤化して硬化している。
- 10 10TR3/2 黑褐色 粘質土 5mm以下のボラを多く含む。炭も多い。
- 11 7.5YR2/2 黑褐色 粘性砂質土 5mm以下のボラを含む。



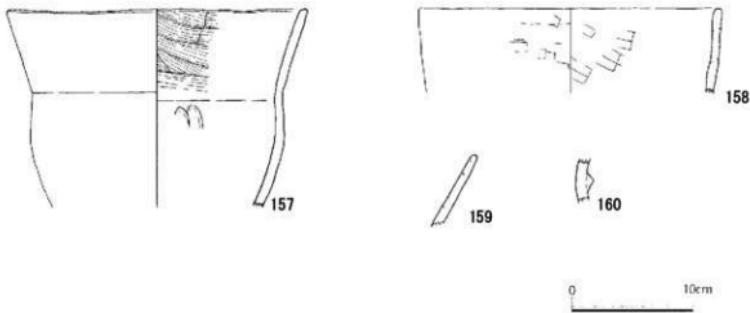
第30図 SA 5 平面図・断面図・土層断面図



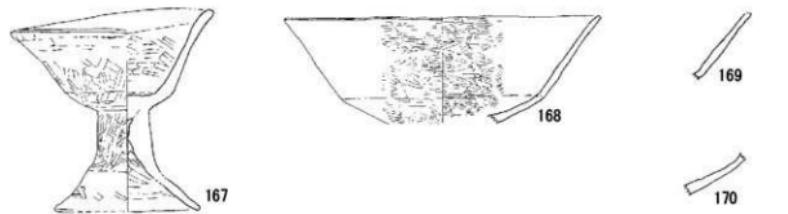
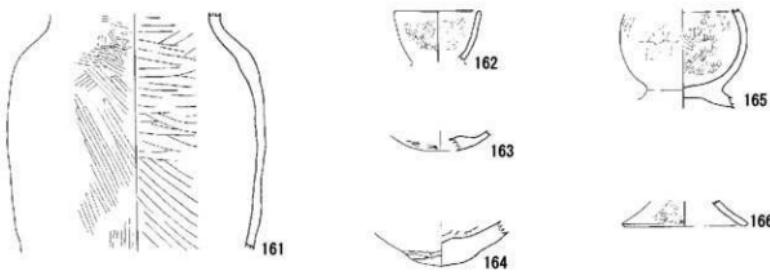
第31図 S A 5 小穴土層断面図

明瞭である。口縁部はわずかに外反する。脚裾部は丸みを帯びている箇所と、なだらかに傾斜している箇所がある。脚底部に一部欠損がある。近沢編年（近沢 2016）甕 2d・2e 期に該当する。168 は坏部で、坏底部と胸部の境の屈曲は明瞭で、口縁部はわずかに外反する。近沢編年（近沢 2016）甕 2d・2e 期に該当する。169～171 は坏部の口縁と胸部、脚柱部の一部である。同一個体と考えられるが接合できなかった。坏部については、胸部から口縁部にかけての屈曲が、明瞭に見られる器形と考えられる。172・173 は脚部である。172 は、脚柱部はやや丸みを帯び、脚裾部は伏せた皿状の形をもつ。外面全体と内面底部に黒斑を残す。173 は 172 の脚裾部同様で伏せた皿状の形をもつ。外面は、ナデ後多方向のミガキが見られる。近沢編年（近沢 2016）甕 2d・2e 期に該当する。174 は、古代の坏の体部である。粘土雜目で割れ、内外面とも風化著しい。

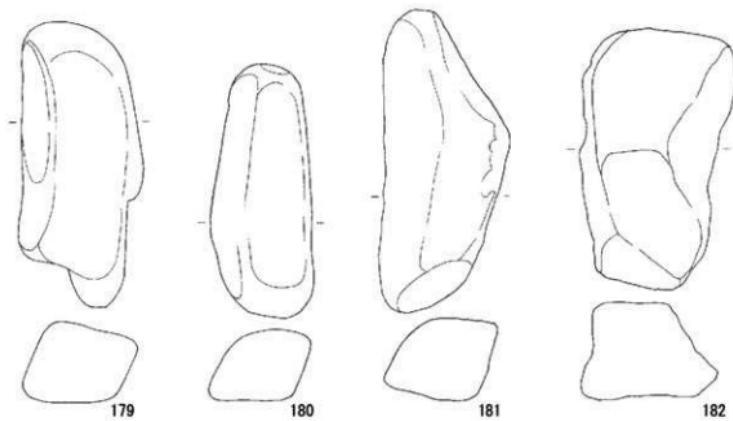
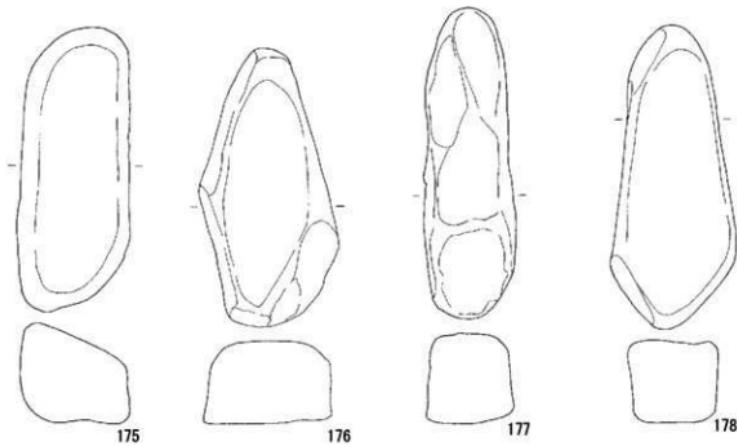
175～187 は砂岩製のたも石である。本遺構床付近で 13 個がまとまって出土した。用途は不明で、重さに偏りがあったが、長さや幅、厚さは似通っている。全てのたも石が敲打痕などもなく自然面を残し、全体的に丸みを帯びる傾向にある。編み物をする際に使用された可能性を考えておきたい。188 は砂岩製の台石で、元々意図的に打ち割って整形したものと考えられる。



第32図 S A 5 出土遺物①

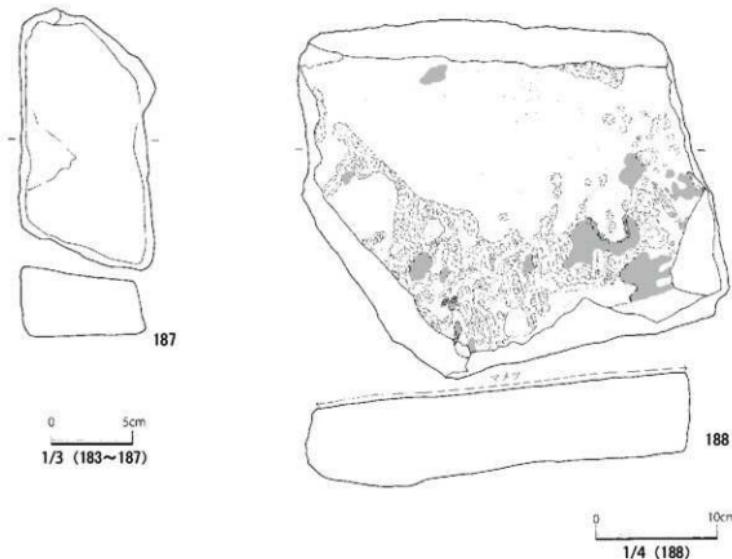
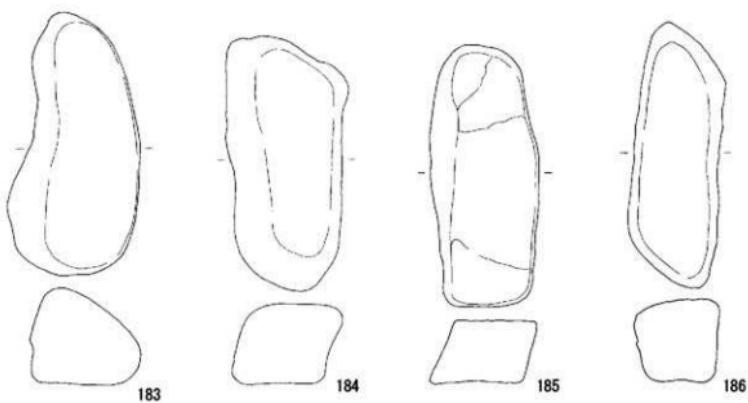


第33図 S A 5 出土遺物②



0 5cm
1/3

第34図 S A 5 出土遺物③



第35図 S A 5 出土遺物④

6号竪穴建物跡（S A 6）（第36・37図）

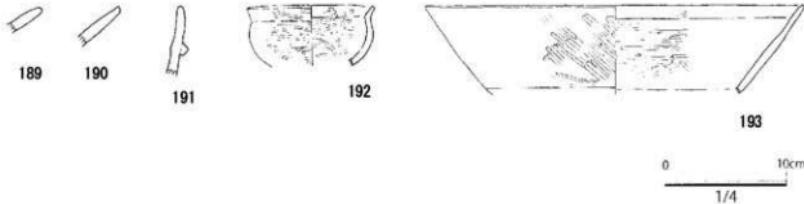
H 11 グリッドの表土除去後に検出した方形の竪穴建物跡である。霧島御池軽石層自体が、圃場整備によって削平を受け、遺構南側については壁面が確認できなかった。遺構の北から東にかけて広範囲に擾乱を受けている。同区内で検出した他の S A 3～5 とはやや距離が離れる。

床面までの深さや埋土、床面下の掘形の有無を確認するための先行トレンチで、竪穴建物跡の壁面をわずかに確認することができた。その後、上位層から各層の形成過程を検討しながら順に掘削した。

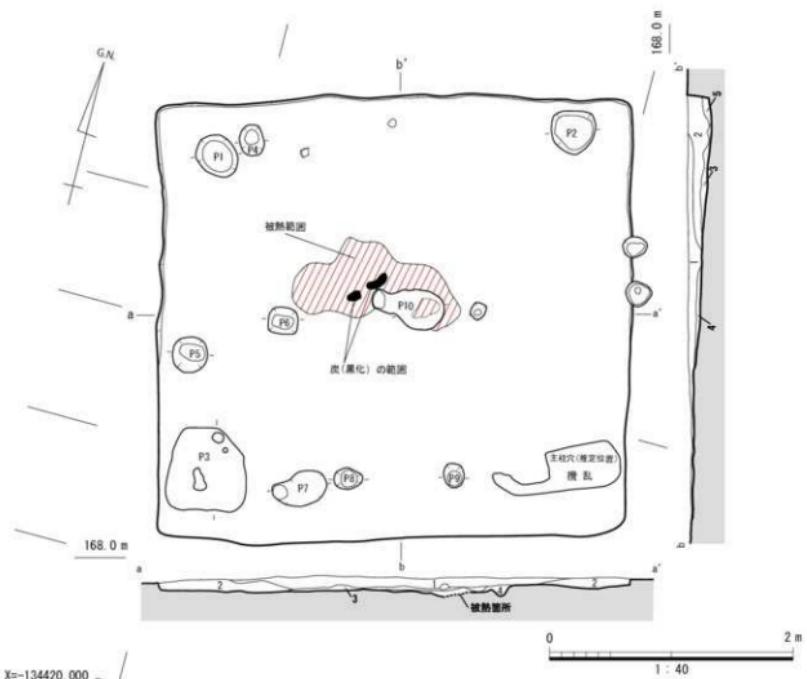
S A 6 の平面形は、長軸約 3.9 m、短軸約 3.7 m の方形を基調とする竪穴建物跡で、建物の主軸は N - 15° - W をとる。遺構検出面から床面までの深さは、約 0.2 m と浅い。床面積は約 14.5 m² である。

床面では、9 基の小穴を検出した。いずれの小穴も掘り込みが非常に浅く、主柱を成すと考えられるものは確認できなかったため、建物内に主柱を伴わない構造であった可能性がある。中央付近の P10 は、短径 0.3 m、長径 1.3 m の不整梢円形で、竪穴建物跡の床面から 0.04 m ~ 0.06 m 掘り込まれている。P10 の床面の一部とその周囲の広い範囲の建物床面が、被熱により赤化しており、炭化物も集中してみられる事から地床炉と判断した。床の一部分では、霧島御池軽石が混じる暗褐色系粘質土による、厚さ約 2 ~ 6 cm の貼床を検出した。竪穴建物跡の埋土は、黒色及び暗褐色系の粘質土からなり、5 層に分けられる。全層が住居廃絶後の自然堆積と考えられ、遺構南側になるほど掘込みが浅くなる。その他の小穴については用途不明である。なお、周辺では噴砂が確認されており、S A 6 はこれを掘り込んで構築されているので、古墳時代以前に液状化を伴うような地震があったと想定される。

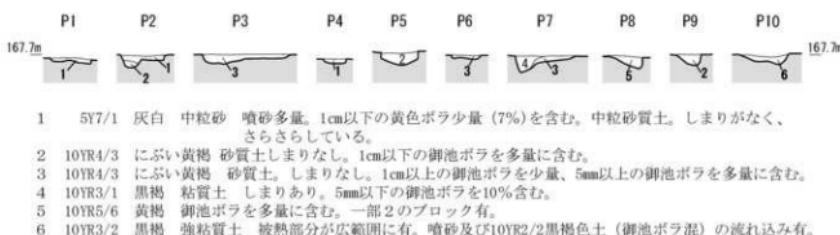
遺物は 5 点を図化した。189 ~ 191 は甕で口縁部から胴部である。189 は細片で、外面にススが付着している。内外面とも横方向のナデが見られる。傾き不明である。190 は、内外面ともナデ調整が見られ、外面にススが付着している。191 は、頸部に三角状の貼付突帯後に、深い刻み目を施している。内面は指ナデ後、斜方向のナデが見られる。192 は壺で口縁から胴部である。内外面ともに赤色顔料が付着する。胴部の最大径と口径が同じ大きさで、頸部はくの字状に曲がり口縁部にかけて外反する。193 は高壺の坏部である。胴部から口縁部に向かって直線的に延び、口唇部は丸みを帯びる。外面に黒斑が残る。



第36図 S A 6 出土遺物



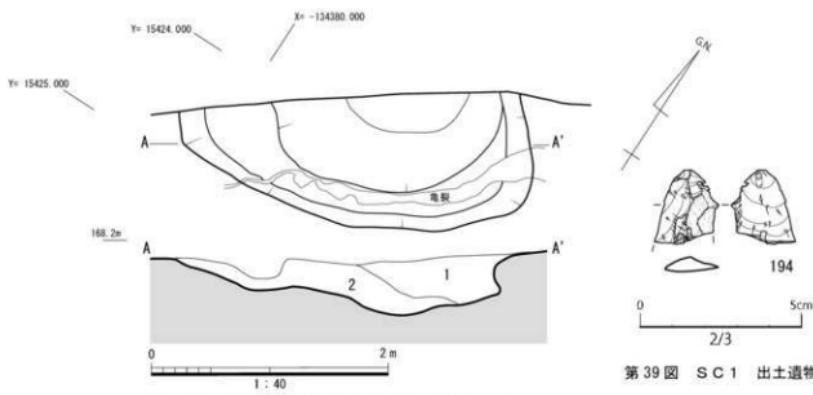
- 1 2. 5Y3/3 暗オリーブ褐 粘質土 黄色ボラを含む。5cm程度のブロック有
 2 10YR3/3 暗褐色 粘質土 御池ボラを多量に含む
 3 10YR3/3 暗褐色 強粘質土 やや御池ボラ混じり やや炭を含む。貼り床の可能性有
 4 10YR2/2 黒褐 強粘質土 しまりあり。御池ボラ混じる 炭・焼土粒を含む
 5 2. 5Y6/4 にぶい黄色 粗砂 御池ボラを含む 2層の細かいブロックを含む



第37図 S A 6 平面図・断面図・土層断面図

(3) 土坑 (SC 1) (第38・39図)

調査C区の調査区境界となる西端付近で、霧島御池軽石層上面で検出した土坑である。平面形は調査区外に続くため、全容は不明である。長軸約3m、短軸については調査区境界まで1.1mを計り、不整橢円形と考えられる。埋土は、土坑の底面をなす霧島御池軽石層に亀裂が入っており、亀裂の隙間に入る埋土は、本土坑の埋土と同一であった。埋土は、他の古墳時代の遺構のものと共通するため、古墳時代のものと判断した。亀裂は、地震等の自然災害によって生じたものと考えられ、霧島御池軽石層が最大で27cm程度西側へ離れて下がっている。遺物は、腰岳産黒曜石製の剥片が1点出土した。194は、点状の打点から剝離された縦長剥片で、下端を欠損している。鈴桶技法の可能性がある。



第39図 SC 1 出土遺物

第38図 SC 1 平面図・土層断面図

(4) 溝状遺構 (SE 1)

1号溝状遺構 (第40～47図)

調査A区西側D 2～4、B・C 3～4グリッドのI～II層表土除去後に検出した遺構である。A区北端D 2グリッド付近から南西方向へ延び、C 3グリッド付近から、調査区西側へ延伸すると自然流路へと接続する。遺構底面の標高は北側で約168.5m、南側で約167.4mと北から南に向かい緩やかに傾斜する。検出長は南北約32m、東西約25m、幅約1.8m～4.2mを測る。断面形状は、逆台形状を呈していて、底面幅約0.9m、深さは検出面から約1.3mを測る。

埋土は、主に褐色系の粘質土からなり、霧島御池軽石を含む。下位の6～7層までは、上位層には含まれていない入戸火碎流堆積物(シラス)を多く含む土壤が堆積している。a-a'の土層断面から、古墳時代以前に8層までが堆積した自然流路が存在し、その埋没過程で古墳時代になったと考えられる。1～3層及び5層には、砂粒を多く含む。断面b-b'付近の半径50cm程度の範囲で、土器片や炭化物が集中する箇所があり、溝の両岸で検出した。出土した土器は、古墳時代後期の土師器甕と壺であった。

他の遺物についても5～6層で多くが出土している。

自然流路の詳細については、第5節で触れる。

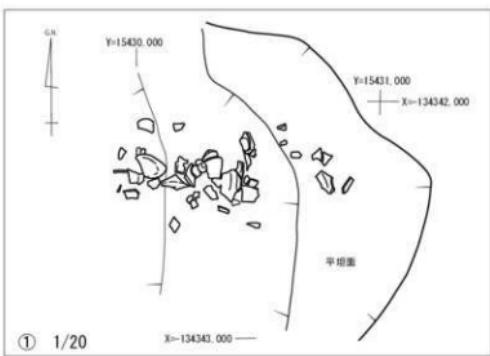
遺物は、32点を図化掲載した。195～203は甕である。195は口縁部から底部にかけて残存し、頸部に刻目貼付突帯が一条巡る。肩部で逆くの字状に屈曲し、頸部から口縁部にかけては、直線的に延びた後に内反する。最大口径と最大胴径はほぼ同じである。内外面とも工具ナデが見られ、外面の肩部から胴部にスス、内面の所々に指頭痕が残る。近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に属する。196は口縁から胴部で、頸部から口縁部へ緩やかに外反する。頸部に刻目貼付突帯が一条巡り、刻目部分に布状の圧痕を残す。胴部にはススが付着し、若干の指押さえによる凹凸がみられる。推定口径30cmである。近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に属する。197はほぼ完形で、底部から体部にかけてゆるやかに内湾する。内面の所々に粘土雜目を残し、口唇部はつまみ上げられ、指頭圧痕が残る。内外面とも幅の狭い工具を用い、やや強めのナデを施している。198と199は口縁部から頸部である。198は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁部付近にススが付着する。199は内外面とも横ナデで、内面にススが付着している。近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に属する。200は胴部の細片で、斜位の刻目貼付突帯をもつ。201は胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。外面は一部に斜方向の強い工具痕がみられ、口縁部にススが付着している。近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に属する。口縁の形状と口径のサイズから、鉢の可能性も考えられる。202は甕の頸部から胴部で、外面は平行タタキ後横方向のナデ、内面は横・斜方向のナデがみられる。近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に属する。203は甕の底部で、外面に縦・斜・横方向のナデがみられる。

204～212は壺である。204は肩部から胴部である。胴部から肩部にかけてゆるやかに内反し、肩部で逆くの字状に屈曲する。全体的に粗い作りで、肩部から胴部にかけてススが集中して付着している。205は頸部から肩部で、外面に横・斜方向のミガキ、内面は横・斜方向のナデで、指頭圧痕を残す。206は胴部で、肩部で緩やかに内反する。外面は斜方向のミガキ、内面は斜・横方向の工具によるナデがみられる。207は胴部から底部付近で、一部欠損している。胴部中位は球形を呈する。底部付近から緩やかに内反し、肩部で屈曲する。208は胴部から底部で、一部欠損している。底部は平底で、風化著しく調整不明である。推定底径6.4cmである。209は胴部から底部で、外面は横方向のナデ後に縦・斜方向のミガキがあり、一部に黒斑がみられる。210は底部で、底部付近は丁寧なナデ、胴部に向かって斜方向のミガキがみられる。211・212は底部で、いずれも底部付近の器壁が厚くなる。

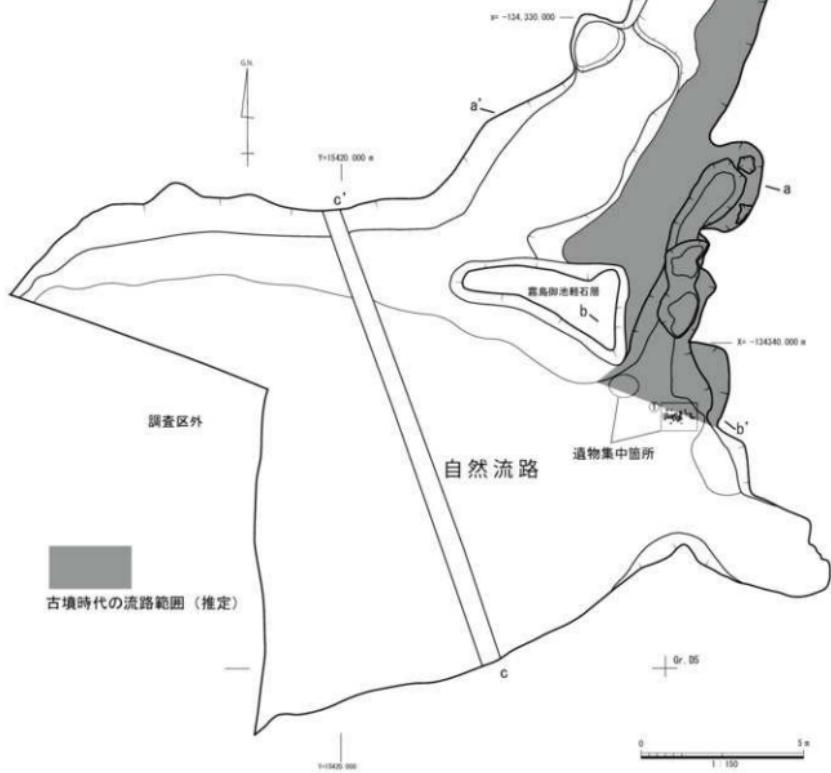
213～218は高壺である。213は壺部で、口縁部まで直線的に延びる。内外面ともミガキ調整で、外面に黒斑を残す。214・215は脚柱部で、壺部は欠損しているが、緩やかに外反してハの字状に広がると思われる。216はエンタシス状で、脚柱部上位の器壁が下位に比べて厚い。近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に属する。217は脚裾部で、長さ4mm程度の極細の刻みを5mm間隔で施す。透かしが外面から見て二等辺三角形状に入る。218は壺部で、内面に黒斑を残す。近沢編年（近沢2016）甕2d・2e期に属する。219は壺で、口縁から底部付近の破片である。体部で大きく開き、底部に向かい湾曲する。

220～224は古代の土師器である。220～223は壺である。220は口縁部で、内外面ともに回転ナデがみられる。傾き不明である。221～223は底部で、内外面とも回転ナデが施され、底面はヘラ切りである。224は布痕土器で、内面に布目痕をもち、口唇部の断面が三角形である。

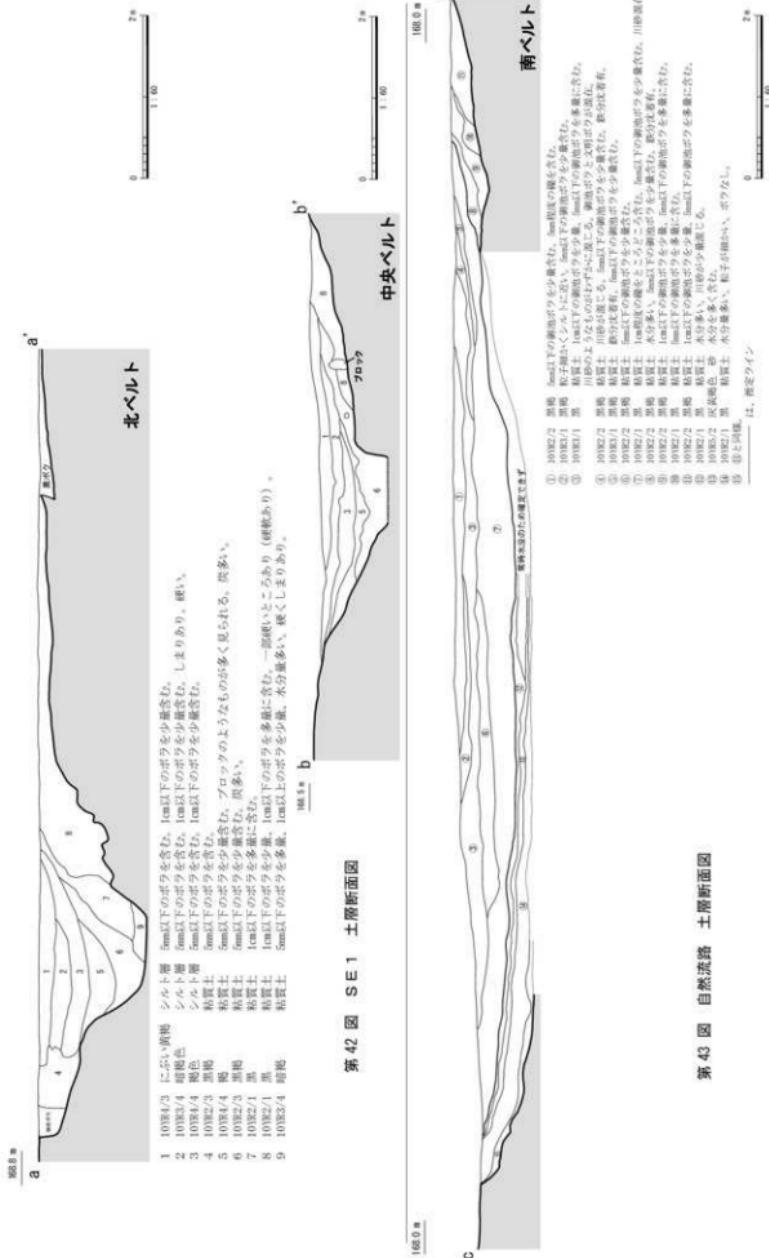
225～227は須恵器である。225は瓶の口縁部で、口縁端部に向かって外反する。内外面とも回転ナ



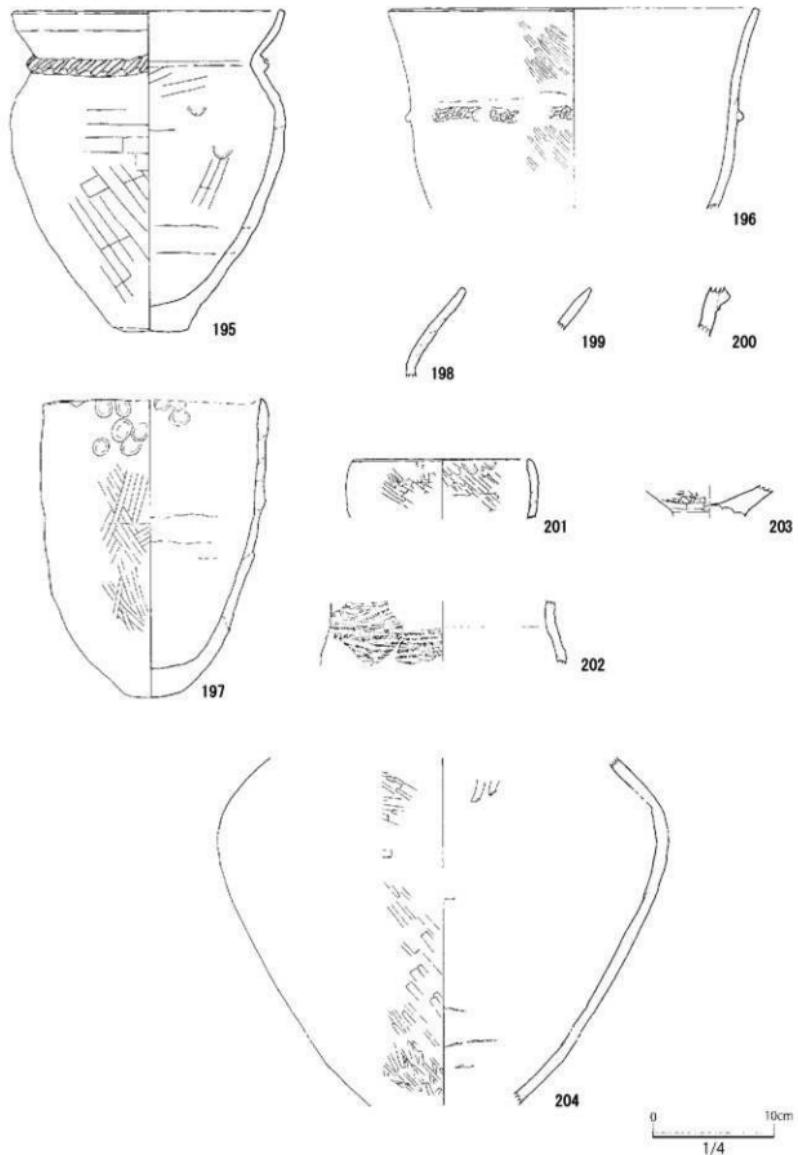
第41図 SE 1 遺物集中箇所拡大図



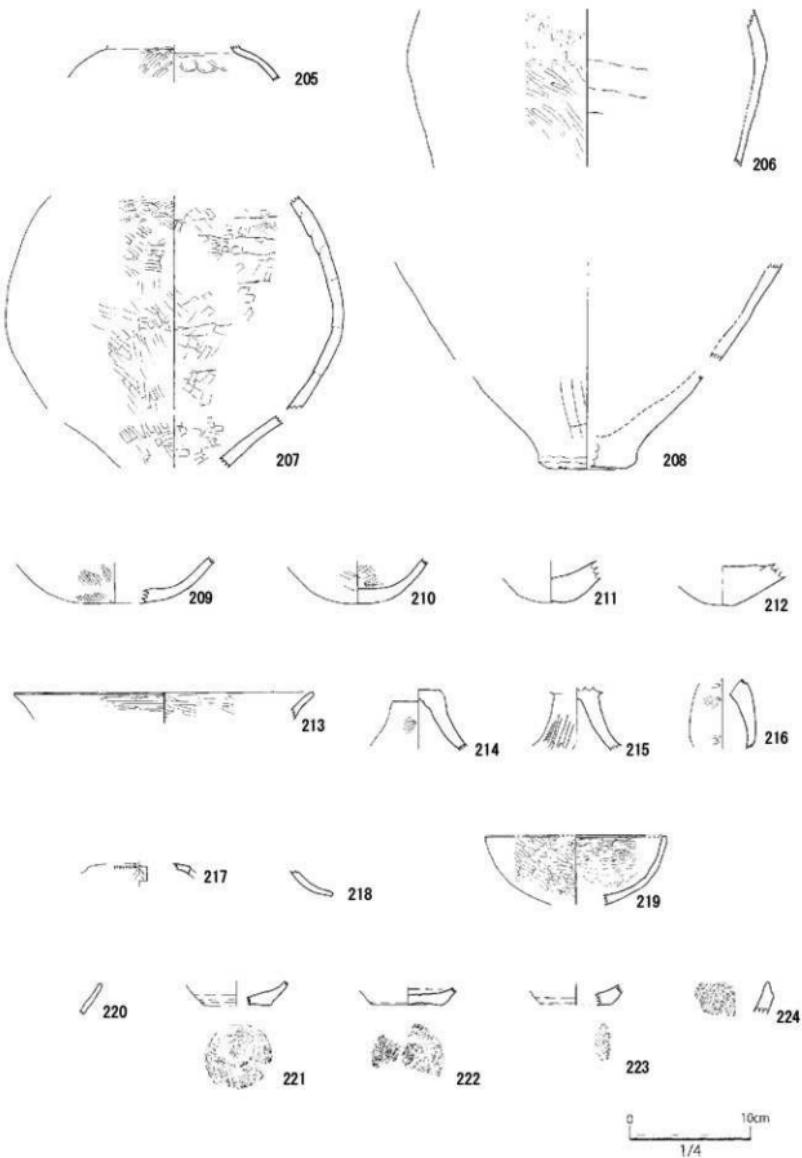
第40図 SE 1 平面図



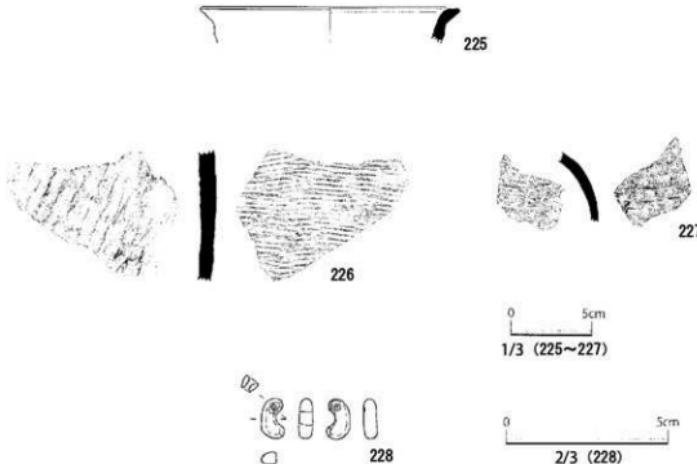
第43図 自然流路 土壌断面図



第44図 S E 1 出土遺物①



第45図 SE1 出土遺物②



第46図 S E 1 出土遺物③

デ調整を施す。226は甕の肩部である。外面は縦・横方向の平行タタキ、内面は当具痕がみられる。227は瓶の肩部で、内外面とも回転横ナデ調整を施す。外面の一部分に自然釉のようなものが付着している。

228はヒスイ製の勾玉である。長さ1.5cm程度、両面穿孔で、透明感のある緑色をしている。標準の半玦型よりややいびつな形態であることから、弥生時代中期中葉～後葉の典型ではなく、形態が形骸化する弥生時代後期も含めた範疇で捉えておく必要がある。北陸系勾玉の可能性が考えられる。

※ 岡山県古代吉備文化財センター米田克彦氏よりご教示いただいた。

第5節 縄文時代の遺構と遺物

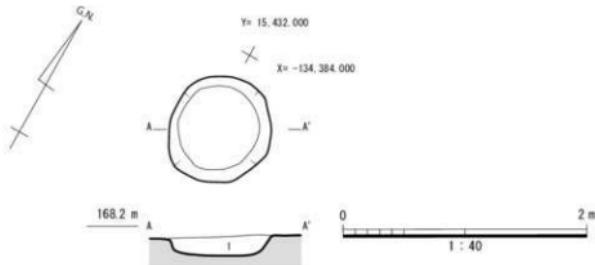
(1) 遺構の分布 (第48~53図)

縄文時代の遺構検出面は、霧島御池軽石層(X層)から下層で検出した。A~C区は、全体的に昭和50年代の圃場整備事業により霧島御池軽石層を含むIV層からX層までがほぼ削平されている。X層を検出できたのは、A区及びC区西側のみだった。A区では、第4節(4)で述べた古墳時代の溝状遺構(S E 1)の下層で自然流路を検出した。C区西側では、古墳時代の2号竪穴建物跡(S A 2)のすぐ南側で土坑(SC 2)1基を検出した。

(2) 土坑(SC 2)

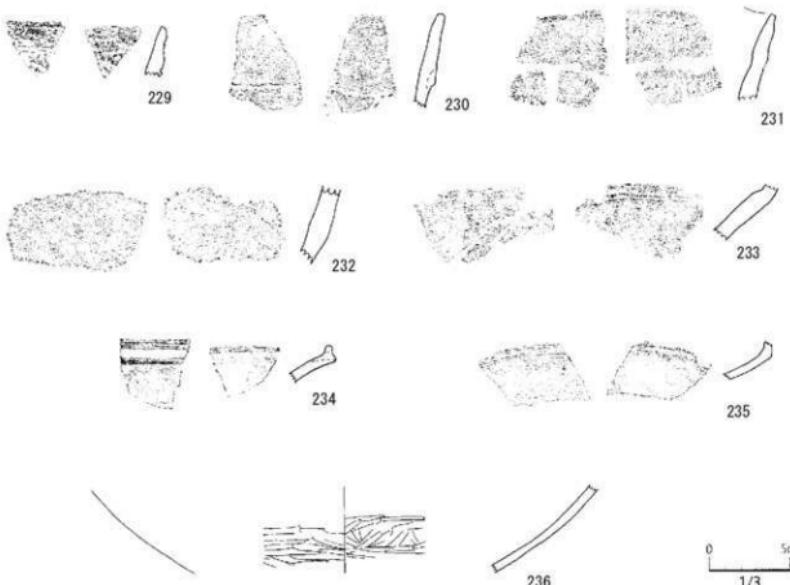
D 8グリッドに位置する。直径約86cmの円形を呈し、検出面から最大深度16cmを測る。遺構底部は平坦で、小穴等は見受けられなかった。埋土は、5mm以下の霧島御池軽石を多く含む粘性シルトである。遺構内から出土した縄文時代後期から晩期にかけての土器8点を全て図化掲載した。

遺物は主に、深鉢と浅鉢の口縁部や胴部で、内訳は丸尾式土器2点、中岳II式土器1点、黒川式土器2点、入佐式土器1点、松添式土器1点、不明1点である。229~232は、深鉢の口縁部から胴部である。229と230は口縁部で丸尾式土器である。波状口縁か平口縁かは不明である。229は外面に横方向の貝殻条痕後に貝殻腹縁刺突文を施している。口唇部から口縁部にいくにつれ肥厚し、傾きは不明である。230は外に開きながら直口する口縁部で、内面は口唇部以外が黒く変色していて、内外面ともに横方向のナデが施されている。231は波状口縁の口縁部から胴部で松添式土器である。口縁部は肥厚せず、逆「く」字形の屈曲が少し残る。内外面ともナデ調整である。232は胴部で、外面に斜方向の粗いナデ調整が見られ、内面はナデ調整である。233は胴部で、中岳II式土器である。外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整で、一部に強い工具痕が残る。234~236は浅鉢で、234は入佐式土器の口縁部で、黒色磨研土器である。口縁部に緩い凹みが施され、器面に光沢が見られる。235・236は黒川式土器の胴部で、235は胴部から口縁部の方へ屈曲し、外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整が見られる。236は内外面ともにミガキが見られ、口径が大きい浅鉢と考えられる。



1 10YR5/6 黄褐色 粗砂を含む霧島御池軽石の風化層

第47図 SC 2 平面図・土層断面図



第48図 S C 2 出土遺物

(3) 自然流路 (第49～52図)

A区西側D 2～4、B・C 3～4グリッドで、溝状遺構（SE 1）の土層断面を確認中、下層において西側から流れ込むような堆積が確認できたため掘り進めたところ、自然流路を検出した。検出した当初は、SE 1と重複した遺構の可能性があると考えていたが、人為的な掘削の痕跡が認められないことや、堆積状況等から、自然營力により形成された流路跡であると判断した。埋土は、黒～暗褐色の粘質土の北ベルト6～9層である（第42図）。水分量がいすれも多く、6～7層については、黒や黒褐色粘質土がブロック状に見られ、入戸火砕碎堆積物（シラス）と霧島御池軽石を含む。検出面から底面までの深さは約1.3mである。第4節（4）の記述のとおり、調査区北側から緩く下る地形となっており、北から南へ水が流れていたと考えられる。堆積状況は、土層断面の状況から、本遺構西側から流入している。ラミナや砂粒等は各層とも確認できず、埋土はレンズ状に堆積していることから、水の流れが止まった後に、埋没が始まったと考えられる。水が流れていた範囲は、第50図で示すように、途中に霧島御池軽石層が高く盛り上がるところがあることから、この地点を境に2方向に流れていたものと推察する。ベルトごとに、土層堆積の対応関係を把握しようとしたが、南ベルトでは古墳時代の溝との土層の対応関係を判別することは困難であったため、独立して注記している。

遺物は主に、縄文時代後期の深鉢や浅鉢、台付鉢、石器で28点を図化掲載した。

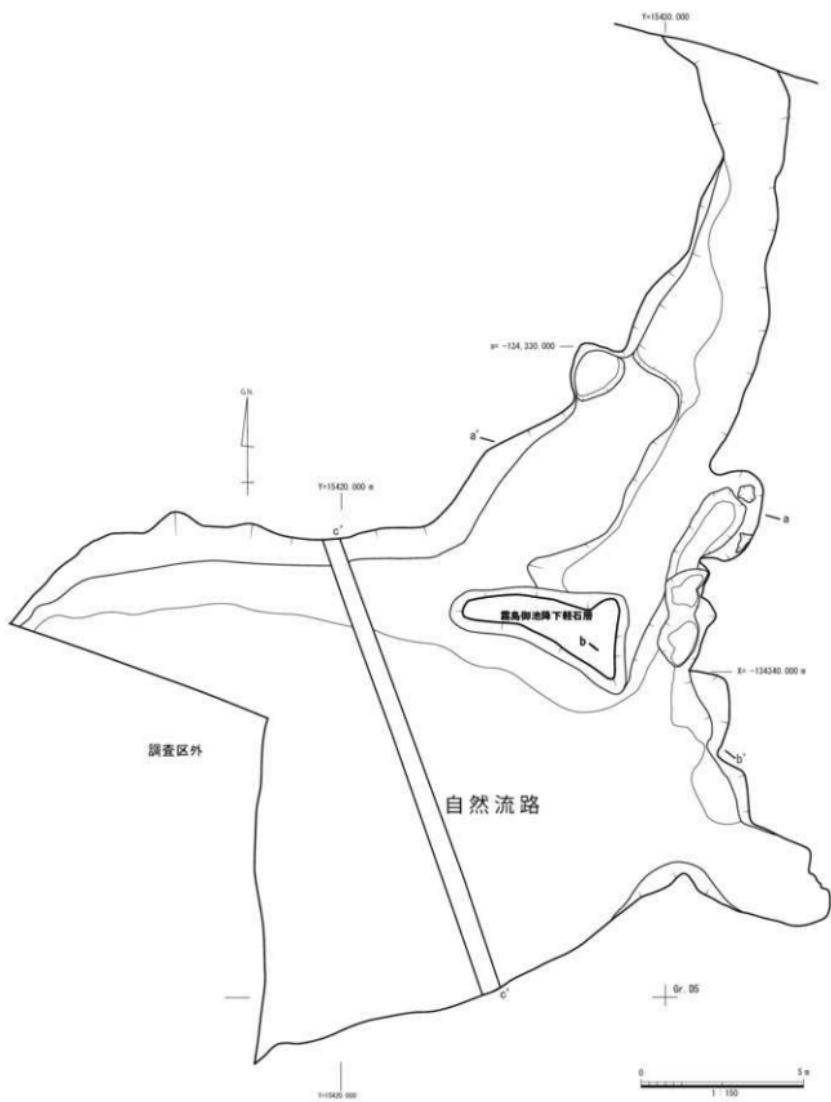
237～253は深鉢である。237～246は口縁部である。237は、口縁部外面屈曲部から頸部にかけて、斜位の貝殻腹縁刺突文を施す。頸部から胴部にかけては、斜方向の貝殻条痕形成時の指押え痕が残る。238は、口縁部外面に斜位の2条の貝殻条痕文を施され、そのうち1条は口唇部付近に施されている。口縁付近にはススが付着している。239は、口縁部外面上部に2条の貝殻腹縁刺突文を逆「く」字形で施す。240は、外面は横方向のナデ調整後に斜方向の貝殻腹縁刺突文を施す。内面は横方向の粗いナデ調整である。246は、黒川式土器で、外面はナデ調整、内面は貝殻条痕を施す。外面の一部にススが付着し、下部は欠損している。

241～245は波状口縁である。241は口縁上部外面は横方向の貝殻条痕、口縁下部に斜方向の貝殻条痕が施されている。全体的に黒変している。242は、口縁外面上部に横方向のナデ調整後、斜位の貝殻腹縁刺突文を施す。胎土に2mm以下の雲母を含み、全体的に黒変している。243は、口縁外面上部に、横方向のナデ後、斜位の2条の貝殻腹縁刺突文を施す。外面の所々にススが付着している。244は、工具によるナデ調整後、屈曲部を境に斜位の2条の貝殻腹縁刺突文を施す。245は、外面はナデ調整後に斜位の2条の貝殻腹縁刺突文を施す。内面は横・斜方向の貝殻条痕を施す。247～251は胴部である。247は、貝殻腹縁刺突文下部が残る。刺突文付近は黒変している。内面には所々に炭化物が付着している。傾き不明である。248は、外面に貝殻腹縁刺突文が、内面に指押え痕が残る。249は、工具による横・斜方向の強いナデ調整が見られ、一部剥離している。250は、内外面に多方向の貝殻条痕文を施している。外面の一部が黒変している。内面に一部指押え痕が残る。251は、内外面とも貝殻条痕文が施されている。252は底部で、底径約6.5cmと推定される。内面は黒変していて、底面には白色物質が付着している。253は胴部から底部のもので、底径約6.3cmと推定される。外面は斜方向の工具によるナデ調整が見られる。底部に白色物の付着があり、内面には圧痕が残る。

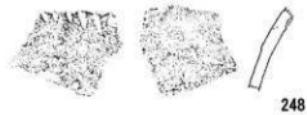
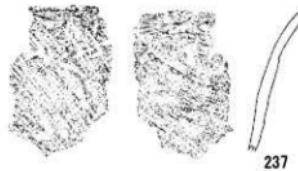
254・255は浅鉢である。254は、口縁から胴部にあたる黒色磨研土器で、口縁部に緩い凹みが施され、胴部で屈曲し口縁部が内傾する。内外面とも横・斜方向のミガキが見られる。255は、外面は組織痕、内面は丁寧なナデ調整が見られる。傾き不明である。

256・257は丸尾式土器の台付皿の脚部である。256は脚部で、外面の所々に黒色物が見られる。外面に多方向のミガキが見られるが、風化著しい。257は、皿部から脚部で、皿部内面一部と脚部内面に条痕を施す。

石器は6点を図化掲載した。258はホルンフェルス製の剥片で、一部が欠損している。正面に自然面を残す。259は頁岩製の二次加工剥片で、左下部にえぐり状の加工痕がみられる。260は、頁岩製の石核である。厚い剥片素材の石核である。左側面には自然面が残る。剥片の可能性もある。261は、ホルンフェルス製の石斧である。基部側は乳房状で、弱い研磨がかかり全面に敲打痕が認められる。刃部側は欠損している。262は、ホルンフェルス製の磨製石斧である。263は、砂岩製の敲石で、正面中央・裏面中央、側面各所にあばた状の敲打痕が残る。全体的に熱を受けているのか赤変している。

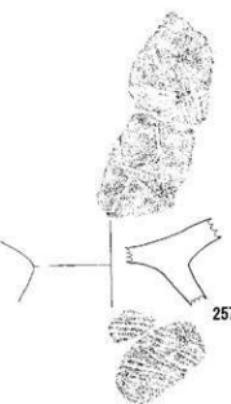
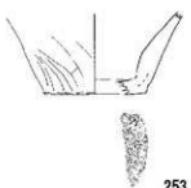


第49図 自然流路 平面図



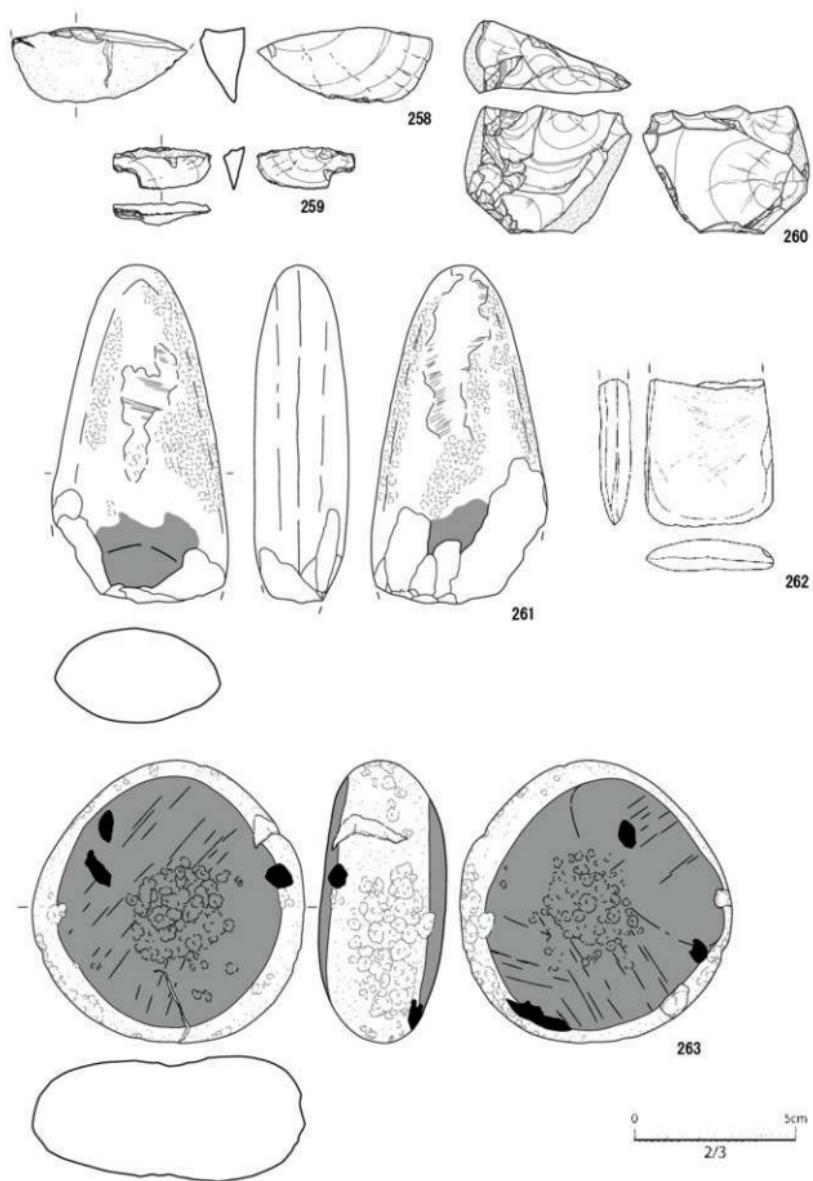
0
5cm
1/3

第 50 図 自然流路 出土遺物①



0 5cm
1/3

第 51 図 自然流路 出土遺物②



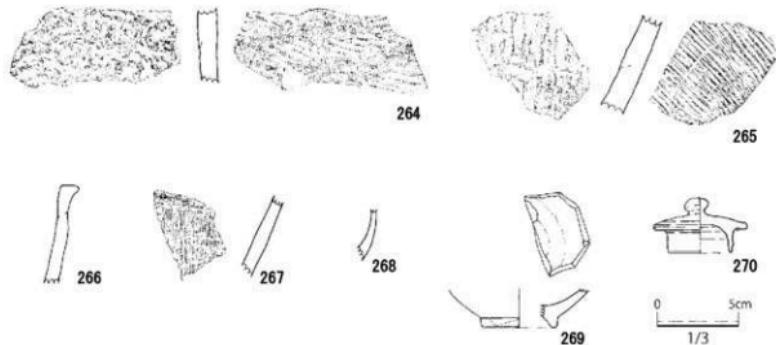
第 52 図 自然流路 出土遺物③

第6節 包含層出土遺物

包含層から出土した近世から縄文時代の遺物 165 点を図化した。出土地点は D 区が最も多く、次いで A 区の順であった。霧島御池軽石層まで掘削する際に、出土したものをグリッドごとに取り上げた遺物や、重機掘削の際に出土した遺物がほとんどである。内訳は、陶器 7 点、磁器 3 点、中世の陶器 2 点、古代の須恵器 30 点、古代の土師器 42 点、古代の緑釉陶器 1 点、古墳時代の須恵器 1 点、古墳時代の土師器 19 点、弥生土器 2 点、縄文土器 37 点、石器 21 点である。

(1) 近世の陶器 (第 53 図)

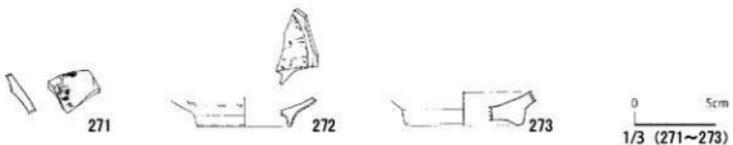
264～270 は近世の陶器である。264・265 は甕である。264 は甕の頸部付近で、外面は平行タタキ後ナデ、内面は同心円当て具痕がみられる。265 は甕の胴部で、外面は平行タタキ、内面は平行當て具痕がみられる。266 は鉢の口縁部で、口縁上部で内湾後にゆるやかに外反する。口縁部外面に浅い沈線が巡る。薩摩焼苗代川系である。267 は捕鉢の胴部で、内面に捕目を残す。薩摩焼苗代川系で 18～19 世紀頃の所産と考えられる。268 は、薩摩・龍門司系の碗で胴部にあたる。18 世紀後半から 19 世紀頃の所産と考えられる。269 は碗の底部で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。薩摩焼龍門司系で 18 世紀後半から 19 世紀頃の所産と考えられる。270 は、土瓶の蓋で、蓋の天王部が 5.8 cm、つまみが 1.5 cm を測る。薩摩焼苗代川系で 19 世紀頃の所産と考えられる。



第 53 図 近世の陶器 実測図

(2) 磁器 (第 54 図)

271～273 は磁器である。271 は、景德鎮の青花壺の胴部である。内面に回線を残す。16 世紀頃の所産で、花器と考えられる。272 は中国産の青花碗で 16 世紀から 17 世紀頃の所産と考えられる。推定底径 5.8 cm である。273 は白磁碗の底部で、推定高台径は 7 cm である。11 世紀後半から 12 世紀前半の所産と考えられる。



第 54 図 磁器 実測図

(3) 中世の陶器 (第 55 図)

274・275 は、播鉢の口縁部である。274 は、外面に沈線が 2 条巡り、内面に凹みを残す。275 は、胴部から口縁部かけて稜が明瞭で、口縁端部は外反する。



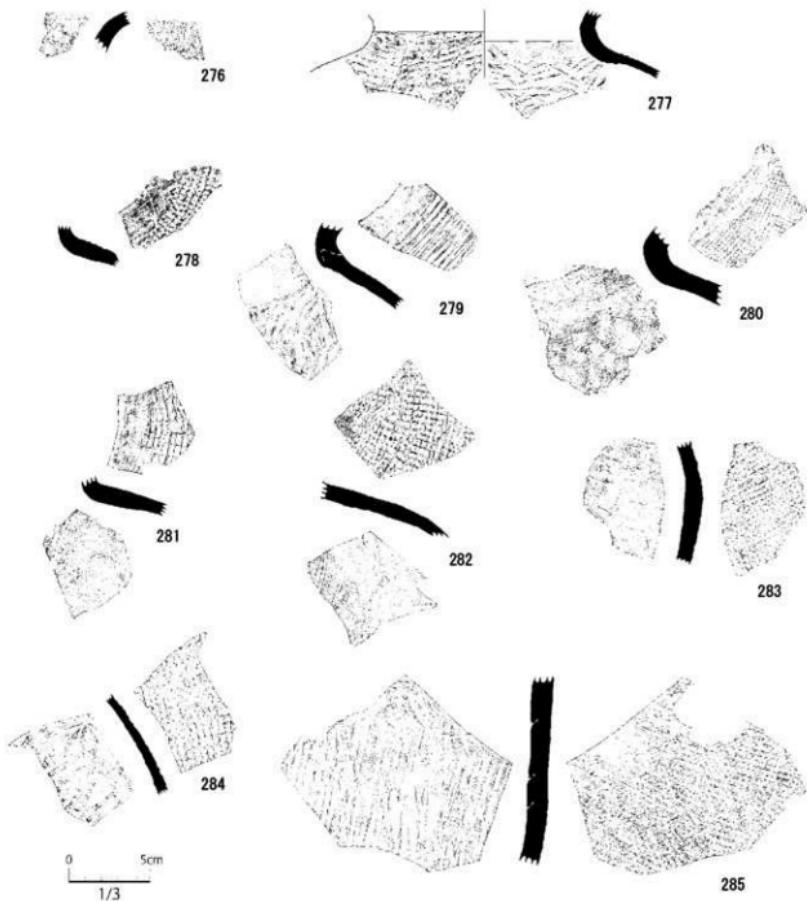
第 55 図 中世の陶器 実測図

(4) 古代の須恵器 (第 56・57 図)

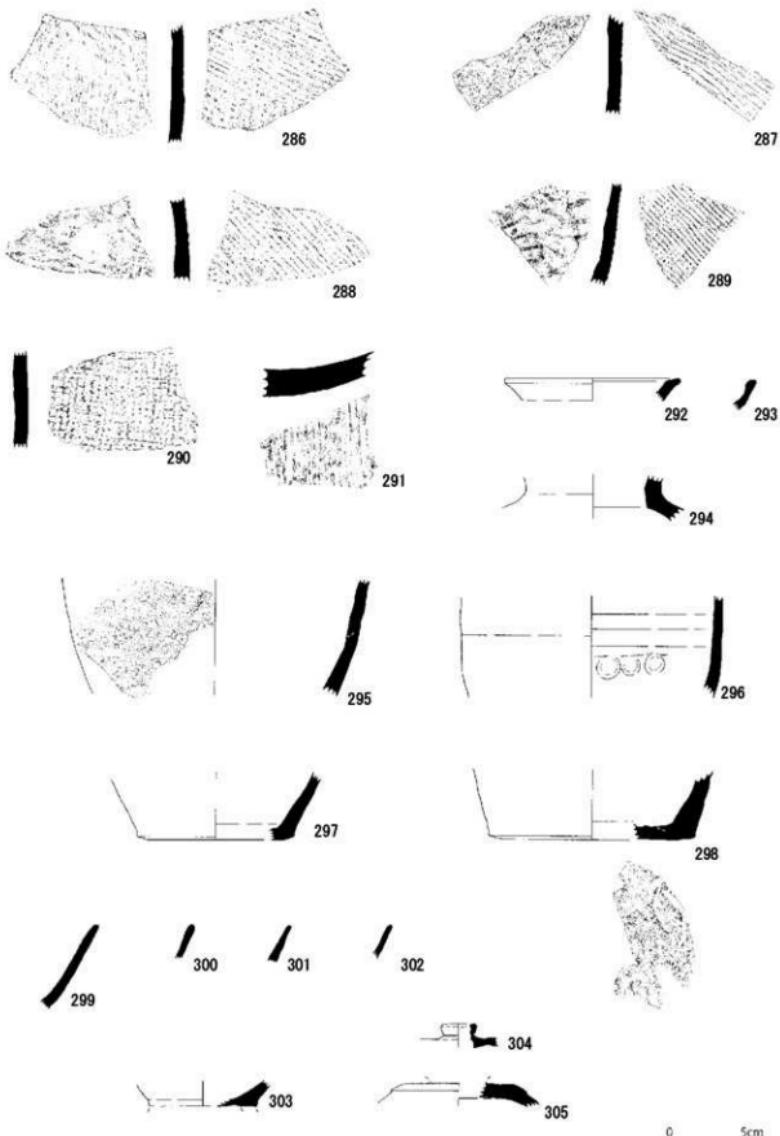
276～291 は甌である。276 は口縁部付近から胴部である。外面はナデ後に縦 2 cm 程の V 字の沈線を連続して施す。277～281 は頸部である。277 は回転ナデ後、格子目タタキを施す。内面は同心円當て具痕が残る。278 は、外面は横方向のタタキ後格子目タタキを施す。内面はナデ後に回転ナデがみられる。279 は、外面に平行タタキ後ナデ消しを施す。内面は同心円當て具痕半磨り消しがみられる。280 は横方向のタタキ後格子目タタキを施す。内面は指押さえの後工具による不定方向のナデがみられる。281 は、外面に横方向のナデ後に格子目タタキを施す。282 は肩部で内湾する。外面に格子目タタキを施す。283～290 は胴部である。283～285 は外面に格子目タタキを施す。284 は、内面に車輪状當て具痕がみられる。285 は、内面に平行當て具痕がみられる。286～289 は外面に平行タタキを施す。286・288 は内面に同心円當て具痕後ナデ消しがみられる。287 は内面に車輪状當て具痕、289 は、同心円當て具痕がみられる。290 は外面に擬格子目タタキを施し、上部を中心自然釉がかかる。291 は底部付近で、外面は平行タタキを施し、内面はナデがみられる。292 は高台付甌の口縁部である。内面に明瞭な稜を残し、ぐの字状に外反する。口唇部に自然釉の塊が付着している。内外面とも回転ナデ調整である。293・294 は壺である。293 は口縁部で、口縁端部に向かって内湾する。内外面とも回転横ナデ調整である。294 は頸部で、内面に明瞭な稜を残し、L 字状に屈曲する。内外面とも回転ナデ調整である。295～298 は瓶である。295・296 は胴部で、295 は、外面は格子目タタキ後ナデ消し、一部自然釉が付着する。内面は回転ナデ調整である。296 は、外面中央部に横ナデの工具痕が残る。自然釉が付着するが、全面風化気味である。内面は粘土垂ぎ目下に指頭圧痕がみられる。297・298 は胴部から底部で、297 は推定底径 9.6 cm、298 は外面に自然釉がかかり、推定底径 12.8 cm である。

299～302 は壺である。299 は口縁部から胴部で、緩やかに内湾し、口唇部は丸みを帯びる。内外面とも回転ナデ調整である。300～302 は口縁部で、口唇部は丸みを帯びる。301 は端部が先細る。303 は高

台付壺の底部である。推定底径 6.6 cm で、内外面とも回転ナデ調整である。304 は壺蓋のつまみで、推定つまみ径は 2.2 cm である。内外面とも回転横ナデ調整である。305 は壺蓋の肩部である。外面に明瞭な稜を残し、つまみは欠損する。内面に磨り面が残り、内外面とも回転横ナデ調整である。



第 56 図 古代の須恵器 実測図①



第 57 図 古代の須恵器 実測図②

0 5cm
1/3

(5) 古代の土師器・縄釉陶器 (第 58・59 図)

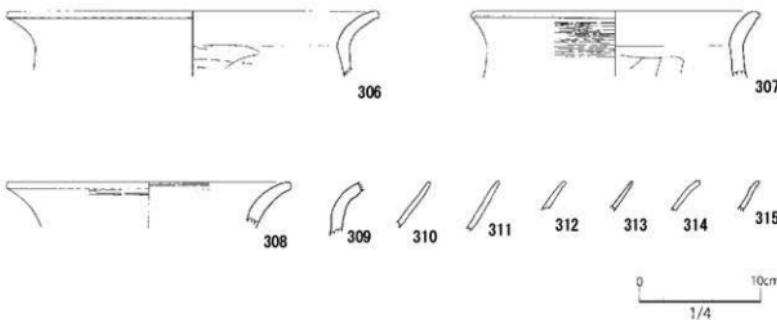
306～309 は甕である。306・307 は口縁部から頸部で、306 は推定口径 30.6 cm、頸部から口縁にかけてくの字形に外反する。外面は全体的に形成の指押さえ痕がみられる。307 は推定口径 23.8 cm で、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。308 は口縁部で、口縁端部にかけて緩やかに外反する。内外面は回転ナデ調整である。309 は頸部で、欠損する口縁へと緩やかに外反する。

310～336 は壺である。310・311 は口縁部から胴部で、312～315 は口縁部である。310～313・315 は口縁端部まで直線状に延び、310～313 の内外面は、回転ナデ調整である。314・315 は内黒の壺で、内面に光沢を残し、314 は口唇部にかけて緩やかに外反する。314・315 は内外面とも回転ナデ調整である。316・321・333・336 は胴部から底部である。底部は全てヘラ切りである。316・321 の内外面は、回転ナデ調整である。胴部にかけて緩やかに内湾する。333 は胴部にかけて外反する。336 は底部がくびれ、円盤状高台を有する。317～320・322～332・334・335 は底部で、全てヘラ切りである。326～330・332 は底部の形態が厚く、317～320・322・323・325 は薄い。いずれも内外面とも回転ナデ調整である。324・331・334・335 は、底部から体部への変換点付近に弱い屈曲を有し円盤状の底部を呈する。335 は、底部側面が外方に向かい明瞭に張り出した円盤状の底部を呈する。337・338 は高台付壺である。いずれも底面はヘラ切りである。337 は高台が外方に開くが、端部が欠損する。外面の一部に黒斑がみられる。338 は端部を欠損するが、外方に開く高台をもつと思われる。339 は高台付壺である。内面は内黒で、高台内外面とも回転ナデ調整である。

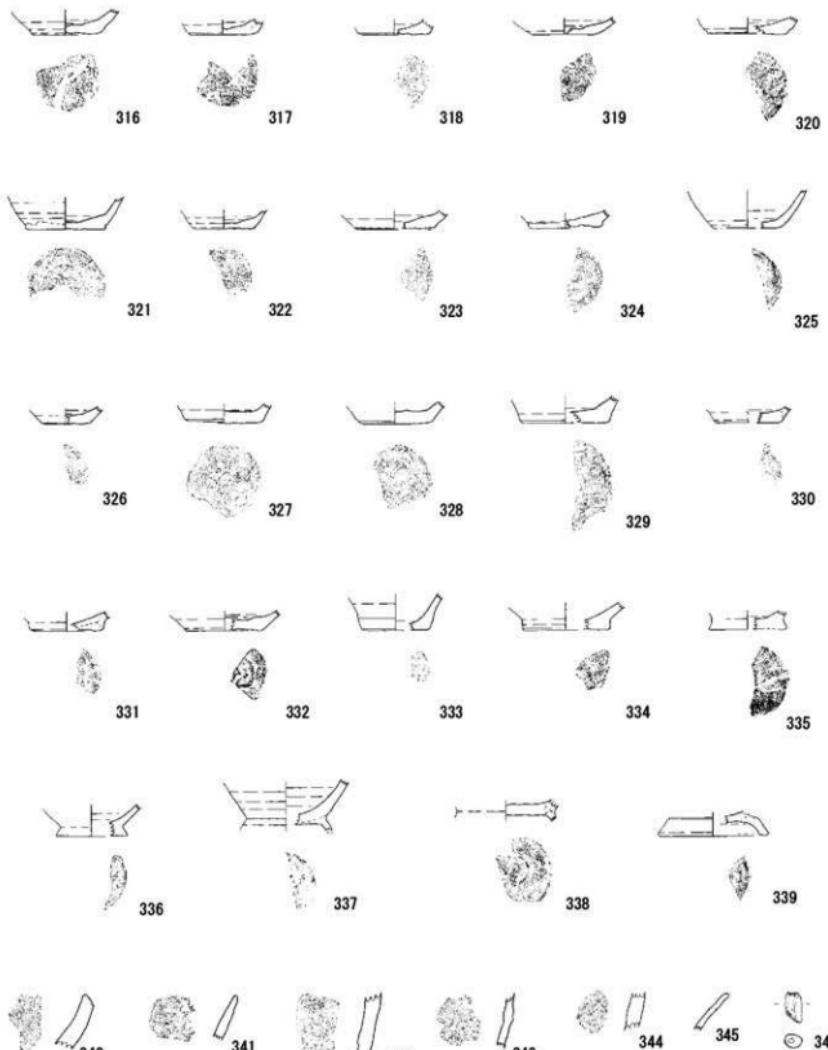
340～344 は布痕土器の口縁部と胴部である。いずれも内面に布目痕を有する。340・341 は口縁部で、厚さが異なり、口唇部の断面は 340 は三角形状、341 はつまみ上げた形態となる。

345 は古代の縄釉陶器の碗の口縁部である。内外面にオリーブ色の釉を施す。畿内産と考えられる。

346 は土錐で、両端部が欠損する。



第 58 図 古代の土師器実測図①

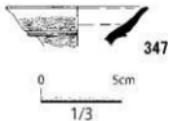


第59図 古代の土師器実測図②・縄文陶器実測図

0 10cm
1/4

(6) 古墳時代の須恵器 (第 60 図)

347 は腹の口縁部から頸部で、外面に櫛描文が施され、口縁部と頸部の境に凹帯が巡る。



第 60 図 古墳時代の須恵器実測図

(7) 古墳時代の土師器 (第 61 図)

348 ~ 350、352・354・355・360 は甕である。348 は口縁部から胴部である。口縁端部に向かって内湾し、口唇部は丸みを帯びる。外面の一部にススが付着する。349・350 は口縁部で、349 は直線状に延び、350 は外反する。口唇部はいずれも丸みを帯びる。354・355・360 は底部である。354 は平底で、内外面とも風化著しい。355 は平底で底面の形態は厚い。推定底径 5.4 cm で、内面に指頭痕を残す。

360 は丸底で、胎土の粒子が大きく、器面の凹凸が著しい。

351・353・356 ~ 359 は、壺である。351 は口縁部から頸部で、刻目突帯が巡る。内外面ともナデ調整である。353 は底部の平底である。底面の形態が厚く、外面の底部付近には指頭痕が残る。356 は口縁部で、口唇部を細くつまみあげている。357 は口縁部から頸部で、口縁端部へ外反する。内外面とも横ナデがみられるが風化著しい。358 は胴部から底部である。外面はケズリ後丁寧なナデがみられる。圧痕とススの付着痕、内面の一部に炭化物の付着痕を残す。359 は底部の丸底である。外面は斜方向のミガキ、内面は斜方向の工具ナデがみられる。

361・362 は高杯で脚据部である。361 は緩やかに内湾して脚端部は丸みを帯びる。362 は、SE 1 で出土した 217 と比べやや薄手で径が小さいため、別個体と判断した。外面は赤色塗彩がみられ、脚柱部との境に、長さ 3 ~ 4 mm の極細の刻みを 1 ~ 2 mm 間隔で施す。

363 は高台付杯の底部である。内外面とも回転ナデ調整で、底面はヘラ切りである。

364 は脚付鉢の脚部である。外面は、主に縦方向のヘラミガキ、内面はナデと横方向のミガキがみられる。推定底径は 10.9 cm である。

365 は台付甕と考えられる。内外面ともナデ調整である。高台内に指頭痕が残る。

366 はミニチュア土器の胴部から底部である。外面は指押さえ、内面は指ナデがみられる。

367 は器種不明の土器で底部と考えられる。焼成などから、古墳時代の土師器と判断した。

(8) 弥生土器 (第 61 図)

368 は底部付近の整形に乱れがみられる。369 は壺または鉢の口縁部である。推定口径 12.4 cm で、口縁部で大きく開く。口唇部及び内面は横ナデ、外面はヘラミガキがみられる。370 は壺または鉢の口縁付近から胴部の細片である。外面に多方向のミガキや横方向のミガキがみられる。

(9) 縄文土器 (第 62・63 図)

371 ~ 373・375・396 ~ 398 は松添式土器の深鉢である。371 ~ 373、396 ~ 398 は口縁部で、375 は胴部である。371 は口縁端部まで直線状にのび、外面は貝殻条痕後ナデ、内面はナデ調整である。372 は、口縁上部にむかって緩やかに内湾する。外面は横方向のナデ、内面はナデ調整である。373 は、口縁上部に凹みを残す。外面は貝殻条痕を施し、内面は横方向のナデ調整である。375 は胴部で、内外面

ともナデ調整である。396は口縁上部で明確な稜を残す。外面は横方向のナデ、内面はナデ調整である。397は口縁上部に貼付突帯を有し、貼付後に横方向のナデがみられる。突帯の一部に工具を押しつけた痕を残す。398は孔列文土器で、貼付突帯の下に棒状工具での刺突痕がある。内外面とも横方向のナデ調整である。

374は、外面に横・斜方向の貝殻条痕後ナデ、内面に横方向の貝殻条痕後ナデを施し、圧痕を残す。丸尾式土器より新しい型式に該当すると考えられる。

393は胸部で、外面はタタキ後にナデがみられるが、風化著しい。

376～392・395・407は丸尾式土器である。376～383は波状口縁である。376は、貝殻腹縁刺突文を施し、内外面ともにススが付着する。377は斜位の貝殻腹縁刺突文が施され、口縁上部は内外面とも貝殻条痕を残す。378は、斜位の貝殻腹縁刺突文を施し、口縁上部にススが付着する。379は、外面に貝殻条痕後ナデ消しが見られ、口唇部の断面が三角形状である。380・381は、斜位の貝殻腹縁刺突文を2条施す。382は波頂部で、貝殻条痕後に貝殻腹縁刺突文を施す。383は、斜位の貝殻腹縁刺突文を2条施し、口縁上位にかけて緩やかに内湾する。384～388は平口縁である。384は、斜位の貝殻腹縁刺突文の上部に、横方向の連続した刺突文をもつ。385は貝殻条痕後、貝殻腹縁刺突文を施し、刺突文と重なるように穿孔をもつ。386は斜位の貝殻腹縁刺突文を1条施し、口唇部は丸みを帯びる。387は、斜位の貝殻腹縁刺突文を施し、口唇部に連続する刻み目をもつ。外面にススが付着する。388は、外面は横方向の貝殻条痕後斜位の貝殻腹縁刺突文を施し、口唇部断面が三角形状を呈する。

389～392・395は胸部である。389は横位の貝殻腹縁刺突文を下位に、斜位の貝殻腹縁刺突文を上位にもつ。390は、外面に横方向の貝殻条痕後に斜方向の貝殻条痕を施す。補修孔をもつ。391は、横方向の貝殻条痕後に刺突文を下位に、貝殻腹縁刺突文を上位に施す。392は、斜方向の貝殻条痕後に斜位の貝殻腹縁刺突文を施す。395は、底部から胸部へ外反し、横方向の貝殻条痕後ナデを施す。推定底径13.4cmである。394・399～402・404・406は浅鉢である。394・399～402・404は黒川式土器である。394・399～402は口縁部で、394は、外面に貝殻条痕を施し、内面はナデ調整である。399は、外面は横方向の手持ちヘラミガキがみられる。口唇部に向かって逆くの字状に内湾する。400・401は、横方向の手持ちヘラミガキがみられ、口縁端部をつまみ出している。402は、内外面は丁寧なナデを施し、口縁端部に回線を残す。404は口縁付近から頸部である。頸部でくの字形に屈曲する。406は組織痕土器の底部付近で、外面に網代痕を残す。

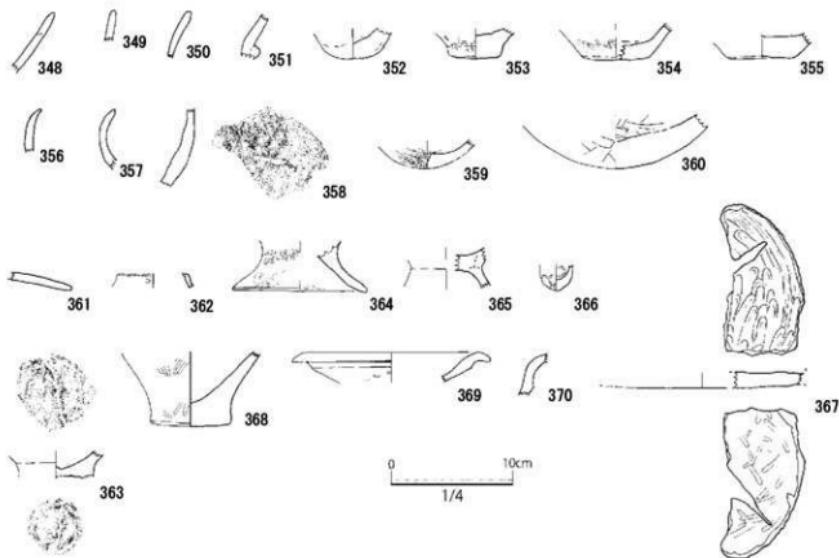
403は西平式土器の頸部である。肩部には3条の沈線があり、その間は磨消繩文や撲糸文、棒状工具による連続刺突文を施す。405は、土器型式不明の胸部である。風化著しく調整不明である。胸部から口縁部へと逆くの字形に屈曲する。後期から晩期前葉の所産と思われる。

407は台付鉢の底部である。推定底径10.9cmで、細い沈線で文様を施し、透かしを有する。

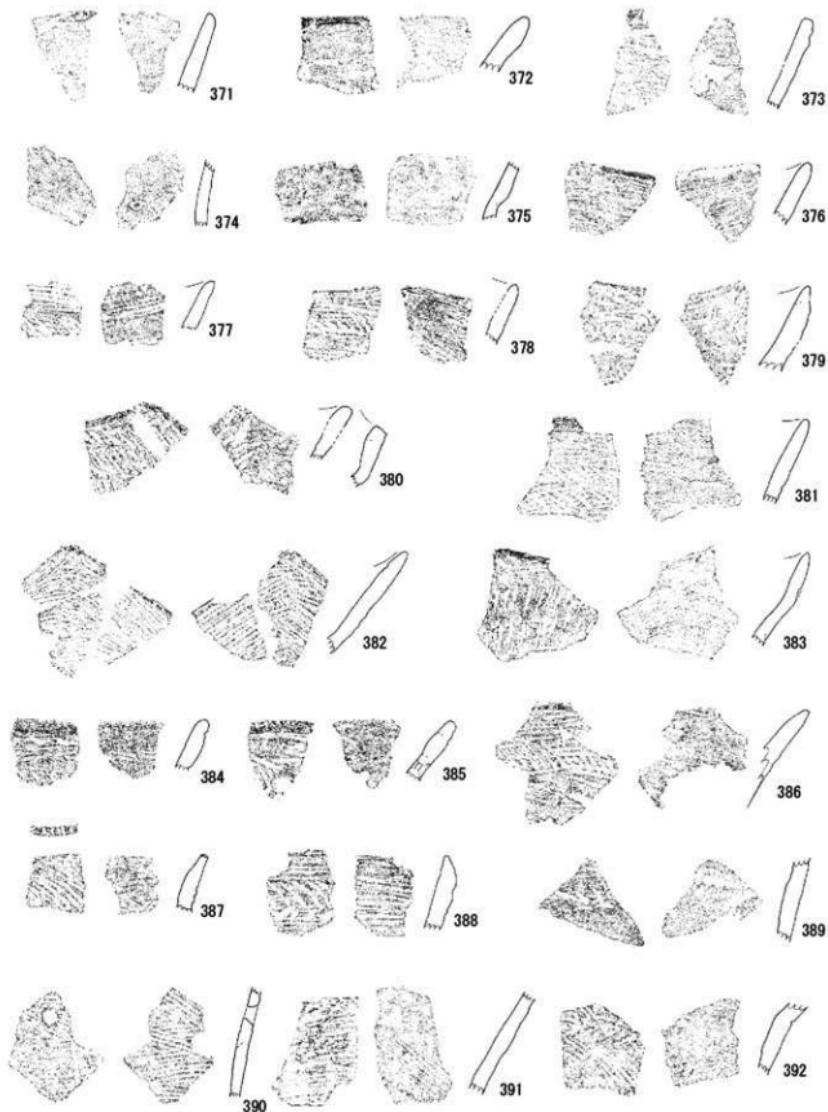
(10) 石器 (第64・65図)

408は、蛇紋岩製のおはじきである。409は砂岩製のおはじきである。最大長2.25cm、最大厚0.45cmを測る。410・411・412は、砂岩製の砥石で、表裏とも磨き面である。412は全体的に赤化し、剥落する箇所を一部有する。413～418は石鎚である。413はガラス質安山岩製でやや厚い。表面・裏面とも、素材剥片面を残す。414は桑木津留産黒曜石製で、両側面は弱い鋸歯状となる。415・416・417はチャ

一ト製で、415は縦に長い五角形の形をしている。416は全体的に弱い鋸歯状で、左右一ヶ所ずつとび出でていて、やや縦長の五角形の形をしている。両脚は内側を向くように加工してあり、特異な形をしている。415やS A 3で出土した143と似ている。417は右脚先端が欠損している。418は玉軸製の石鎌で、先端及び左脚を大きく欠損している。419は、腰岳産黒曜石製の石錐で、錐部の先端が欠損している。正面上面に自然面を残す。420は、チャート製の尖頭器の基部で、製作途中で折れた未製品の尖頭器と考えられる。421はチャート製のスクレイバーで、ややいびつな剥片を素材としている。正面右上の加工は、抉りを意識した加工の可能性がある。422は、頁岩製の剥片で、自然流路で出土した259とよく似た石材である。423は、ホルンフェルス製の二次加工剥片で、基部が欠損している。全体的に風化しており、使用痕が明瞭でない。424は頁岩製の石斧で、基部が欠損している。正面右側から裏面にかけて強く摩耗している。全体的に火を受けており赤変している。425は、砂岩製の石斧で、基部側が欠損している。刃部から基部側にかけて弱く抉って仕上げている。426は砂岩製の磨石である。表裏面とも磨き面である。427は、安山岩製の磨石で、裏面は顕著な磨き面で、敲打痕が側面を中心見られる。428は砂岩製の台石である。割れ口の稜線が、敲打により摩滅しており、欠損後に破損面の角を滑らかに成形している。

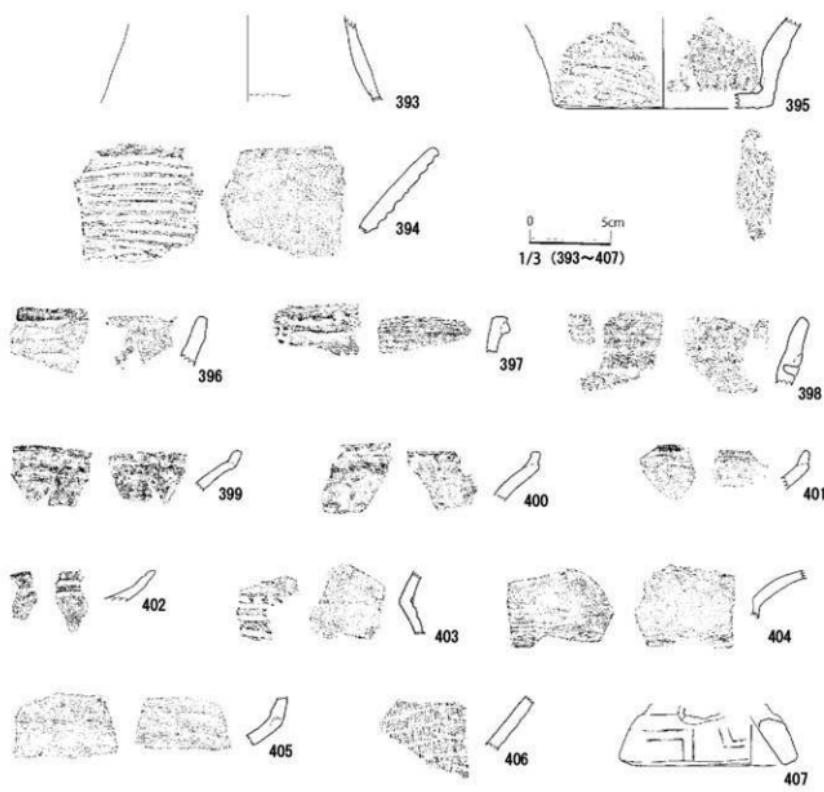


第61図 古墳時代の土師器・弥生土器実測図

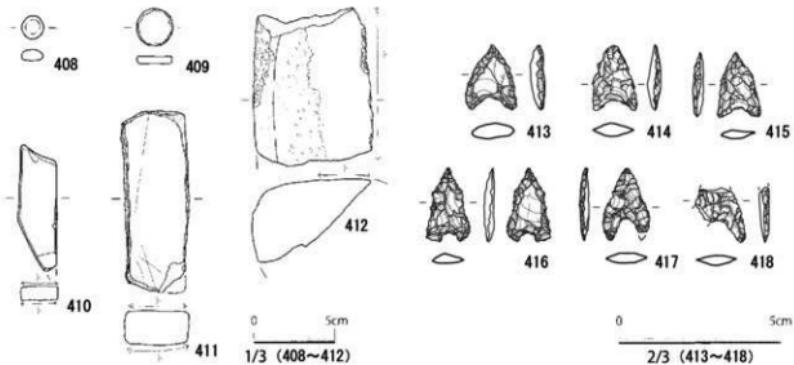


第 62 図 純文土器実測図①

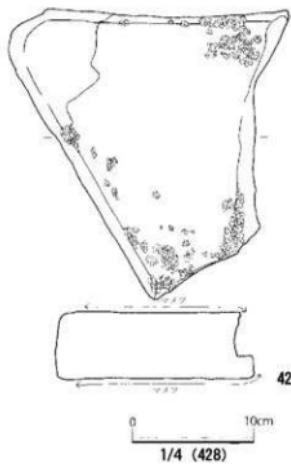
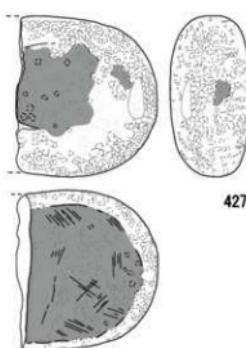
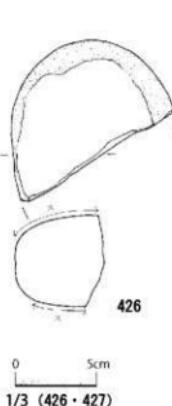
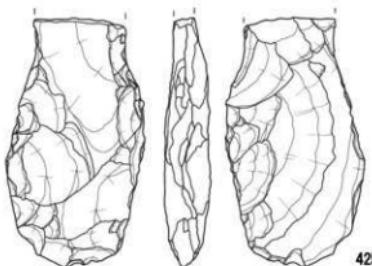
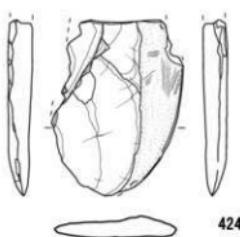
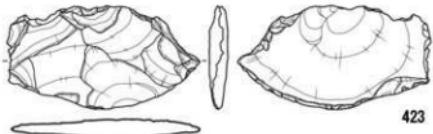
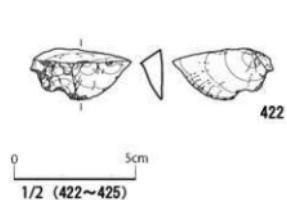
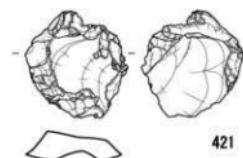
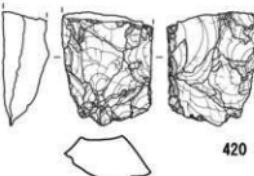
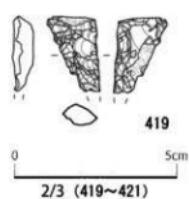
0 5cm
1/3



第63図 繩文土器実測図②



第64図 石器 実測図①



第 65 図 石器 実測図②

第1表 土器觀察表①

遺物 番号	種類	部位	法量		手法・調理・支拂ほか		色調		出土の特徴	備考	
			口径	底径	壁厚	外側	内面	外色	内色		
1 瓶器	罐	口縁～底部	3.2	2.6	(4.2)	薄輪	薄輪	白	白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 器體はもう少し高い? 外面に墨文、内面中央に墨文 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
2 瓶器	瓶	口縁～底部	10.4	(4.2)	4.9	薄輪	薄輪	明褐色	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
3 瓶器	瓶	口縁～底部	7.0	(4.2)	6.2	薄輪	薄輪	灰白	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
4 瓶器	鉢 or 瓶	底部	-	(3.2)	-	薄輪	薄輪	灰白	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
5 瓶器	甕	口縁部	-	-	-	薄輪	薄輪	灰白	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
6 瓶器	鉢	口縁部	-	-	-	薄輪	薄輪	灰白リープ	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
7 瓶器	鉢	口縁部	-	-	-	薄輪無孔、石突無孔?	白・自然色?	オリーブ裏	1cm以下白色粘土、無色透明釉、黒緑色粘土、褐色粘土、黒緑	縦目: 唐代 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文	
8 瓶器	罐体	口縁部	-	-	-	薄輪	薄輪	オリーブ裏	オリーブ裏	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
9 瓶器	罐体	口縁部	-	-	-	薄輪	薄輪	暗灰	暗灰	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
10 瓶器	罐	口縁～胴部	-	-	-	薄輪無孔	薄輪無孔	灰白	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
11 瓶器	罐	底部	-	(4.4)	-	薄輪	薄輪	灰白	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
12 瓶器	甕	底部	-	(4.4)	-	薄輪	薄輪	灰白	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
13 瓶器	仙臺器	底部～胴部	-	2.2	-	薄輪	薄輪	オリーブ裏	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
14 瓶器	甕	底部	-	(7.6)	-	薄輪	薄輪	灰白	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
15 瓶器	甕	底部	-	(5.9)	-	薄輪	薄輪	灰白リープ	灰白	縦目	縦目: 手掌型 (IC) 後から IC 前: 広島県 1878年 - 1900年 外: 草花文、内: 三葉文
16 漆器	二ね鉢	底部～底部	-	(11.5)	-	ナダ	ナダ	灰白	灰白	2mm以下白色粘土、2mm以下灰白色粘土、灰白色粘土	2mm以下白色粘土、2mm以下灰白色粘土、灰白色粘土 外: 色斑点有り、1cm以下灰白色粘土、灰白色粘土 内: 黄褐色、灰褐色、外層の底層 の一部に黑色の付着物
17 漆器	漆器	口縁部	-	-	-	漆粉無	漆粉無	灰白	灰白	2mm以下白色粘土	2mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
18 漆器	甕	口縁部	-	-	-	漆粉無	漆粉無	灰白	灰白	2mm以下白色粘土	2mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
19 土師器	甕	口縁	(27.2)	-	-	横方向のナナ子	横方向のナナ子	灰白	灰白	2mm以下白色粘土	2mm以下白色粘土 外: 部分的に縦の2ナナ子付着物 内: 部分的に縦の2ナナ子付着物
20 土師器	甕	口縁～胴部	(27.6)	-	-	横ナ子	横ナ子	灰白	灰白	2mm以下白色粘土、2mm以下灰白色粘土、1mm以下灰白色粘土	2mm以下白色粘土、2mm以下灰白色粘土、1mm以下灰白色粘土 外: 部分的に縦の2ナナ子付着物 内: 部分的に縦の2ナナ子付着物
21 土師器	甕	口縁	-	-	-	横ナ子	横ナ子	灰白	灰白	2~3mmの灰白色粘土、褐灰色粘土、 褐灰色粘土	2~3mmの灰白色粘土、褐灰色粘土、 褐灰色粘土 外: 一部に黑色付着物あり 内: 黄褐色
22 土師器	甕	蓋部分付近	-	-	-	ナナ子	ナナ子	漆表面	漆表面	5mm以下白色粘土	5mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
23 土師器	甕	底部	-	5.3	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	漆表面	漆表面	1mm以下灰白色粘土、黑色粘土、白色粘土少量	1mm以下灰白色粘土、黑色粘土、白色粘土少量 外: 一部に黑色付着物あり 内: 黄褐色
24 土師器	甕	底部	-	(6.6)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	灰白	灰白	2mm以下灰白色粘土、灰白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	2mm以下灰白色粘土、灰白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
25 土師器	甕	底部	-	6.6	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	灰白	灰白	1mm以下灰白色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下灰白色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
26 土師器	甕	底部	-	(6.7)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	褐	褐	1mm以下赤褐色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下赤褐色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
27 土師器	甕	底部	-	(6.8)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	漆表面	漆表面	1mm以下褐灰色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下褐灰色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
28 土師器	甕	底部	-	(6.9)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	灰白	灰白	微細な透明光沢粘土、1mm以下赤褐色粘土、黑色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	微細な透明光沢粘土、1mm以下赤褐色粘土、黑色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
29 土師器	甕	底部	-	(6.9)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	漆表面	漆表面	2mm以下赤褐色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	2mm以下赤褐色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
30 土師器	高台付	底部	-	(6.9)	-	横方向のナナ子	横ナナ子	黑色粘土表面	漆表面	2mm以下赤褐色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	2mm以下赤褐色粘土、褐灰色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
31 土師器	高台付	底部	-	(7.0)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	褐	褐	1.5mm以下白色粘土、白色粘土、白色粘土少量、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1.5mm以下白色粘土、白色粘土、白色粘土少量、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
32 土師器	瓶	底部	-	-	-	ナダ	ナダ	有目痕	有目痕	1mm以下白色粘土	1mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色
33 土師器	甕	底部	-	-	-	ナナ子、高さ等しい	ナナ子、高さ等しい	有目痕	有目痕	6mm以下白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	6mm以下白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
34 土師器	甕	底部	-	(6.6)	-	ナナ子、高さ等しい	ナナ子、高さ等しい	有目痕	有目痕	7mm以下白色粘土、4mm以下灰白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	7mm以下白色粘土、4mm以下灰白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
35 土師器	甕	底部	-	-	-	ナナ子	ナナ子	有目痕	有目痕	7mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	7mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
36 土師器	甕	底部	-	-	-	ナナ子	ナナ子	漆表面	漆表面	1mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
37 土師器	甕	ほぼ完形	12.3	5.5	4.6	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	漆表面	漆表面	1mm以下白色粘土、褐灰色粘土少量、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土、褐灰色粘土少量、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
38 土師器	甕	底部	(25.0)	-	-	横ナ子 ハケ目	ヨコナ子 カゼ目	有目痕	有目痕	5mm以下白色粘土、1個、微細な白色粘土多く、黒褐色 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	5mm以下白色粘土、1個、微細な白色粘土多く、黒褐色 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
39 土師器	甕	底部	-	-	-	ナナ子、高さ等しい	ナナ子、高さ等しい	有目痕	有目痕	6mm以下白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	6mm以下白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
40 土師器	甕	底部	-	(5.6)	-	横ナ子 カキ目	ヨコナ子 カキ目	漆表面	漆表面	7mm以下白色粘土、4mm以下灰白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	7mm以下白色粘土、4mm以下灰白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
41 土師器	甕	底部	(14.2)	-	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	褐	褐	1mm以下白色粘土、褐灰色粘土少量 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土、褐灰色粘土少量 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
42 土師器	甕	底部	(15.2)	-	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	褐	褐	微細な白色粘土粘土、少量、1mm以下白色粘土、2mm以下 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	微細な白色粘土粘土、少量、1mm以下白色粘土、2mm以下 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
43 土師器	甕	口縁部	-	-	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	有目痕	有目痕	微細な白色粘土粘土、1mm以下白色粘土、白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	微細な白色粘土粘土、1mm以下白色粘土、白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
44 土師器	甕	口縁部	-	-	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	漆表面	漆表面	2mm以下白色粘土粘土、1mm以下黑色粘土、白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	2mm以下白色粘土粘土、1mm以下黑色粘土、白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
45 土師器	甕	底部	-	-	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	黃褐色	黃褐色	1mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
46 土師器	甕	底部	-	5.2	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	有目痕	有目痕	微細な白色粘土粘土、1mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	微細な白色粘土粘土、1mm以下白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
47 土師器	甕	底部	-	(5.6)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	漆表面	漆表面	1mm以下黑色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下黑色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
48 土師器	甕	底部	-	(5.5)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	有目痕	有目痕	1mm以下黑色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下黑色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
49 土師器	甕	底部	-	(5.6)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	有目痕	有目痕	1mm以下白色粘土粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
50 土師器	甕	底部	-	(5.6)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	褐	褐	1mm以下白色粘土粘土、白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土粘土、白色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
51 土師器	甕	底部	-	(6.6)	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	有目痕	有目痕	1mm以下白色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色
52 土師器	甕	底部	-	5.7	-	圓輪ナナ子	圓輪ナナ子	褐	褐	1mm以下白色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色	1mm以下白色粘土粘土、白色粘土、褐灰色粘土 外: 黄褐色、灰褐色 内: 黄褐色、灰褐色

第1表 土器觀察表②

遺物 番号	種類	部位	法量			手法・調理・支拂ほか		色調		胎土の特徴	備考
			口径	底径	壁厚	外側	内側	外側	内側		
53 土師器 砕	底部	—	(6.1)	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	にない裏面	2 mm以下褐色。1 mm以下白・灰色。暗緑～1 cm以下透明光沢。	—	—
54 土師器 砕	底部	—	(6.0)	—	回転ナデ。へう切り	回転ナデ	緑	緑	1 mm以下褐色。暗緑～1 mm以下透明光沢。	底部と体部の焼が込み	—
55 土師器 砕	底部	—	(7.4)	—	回転ナデ	回転ナデ。一枚工法底	にない裏面	にない裏面	無色な白色と少墨	—	—
56 土師器 砕	底部	—	(4.6)	—	回転ナデ	ナデ	にない裏面	にない裏面	3 mmの褐色。浅緑色の縦を各1つ。 1 mm以下赤褐色。褐色。暗紅色。	底部は回転うつ、内底面に丁寧なナデかさがき、その中に2 mm×1 cmで反差。	—
57 土師器 砕	底部	—	(4.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	にない裏面	にない裏面	1 mm以下透明光沢。	—	—
58 土師器 砕	底部	—	(4.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	にない裏面	にない裏面	3 mmの褐色が1つ。 1 mm以下褐色。	—	—
59 土師器 砕	底部	—	(7.0)	—	楕円化しく、調理不明	ナデ?	にない裏面	浅黄緑	無色な白色の縦か	—	—
60 土師器 砕	底部	—	—	—	回転ナデ。へう切り	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	1 mm以下褐色と少墨。褐色の凹凸色。無色透明。	内部の組合せを少しつけて複数した? 褐色、光沢が美しい。	—
61 土師器 砕	底部	—	5.6	—	楕円化しい	楕円化しい	浅黄緑	暗	4 mm以下褐色。1 mm以下透明光沢・白・黒・黄緑	胎土の特徴。ヘラ引り模様	—
62 土師器 高台付环	底部	—	(7.0)	—	回転ナデ	回転ナデ	にない裏面	にない裏面	1 mm以下褐色縦か。無色透明光沢と少墨	—	—
63 土師器 高台付环	底部	—	(7.0)	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	1 mm以下赤褐色。白色縦か。無色透明光沢。	底部はへう切り	—
64 土師器 高台付环	底部	—	(6.6)	—	回転ナデ	ヘラトガリ	浅黄緑	浅黄緑	2 mm以下赤褐色。1 mm以下赤褐色縦か。褐色。	—	—
65 土師器 高台付环	底部	—	—	—	回転ナデ	工具ナデ	にない裏面	1 mm以下褐色。	褐色色と少墨	—	—
66 土師器 高台付环	底部	—	(7.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	にない裏面	黒	1 mm以下褐色。明褐色と少墨。無色透明光沢。	内裏・門面あり	—
67 土師器 高台付环	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にない裏面	黒	1.5 mm以下褐色と1 mm以下黑色。	内裏・褐色。	無色透明。
68 布底土器 口縁部	(14.2) —	—	ナデ? 色化なし	白目底	緑	緑	4 mm以下褐色縦か。1 mm以下赤褐色ごく縦か	—	—	—	—
69 漆器皿 直	口縁	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	1 mm以下褐色。	1 mm以下白・褐色と少墨。1 mm以下透明光沢縦か	—
70 漆器皿 直	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	漆器皿	漆器皿	1 mm以下黑色。	漆器皿推定 6.0 cm	—
71 漆器皿 直	底部	—	—	—	南子田タラキ	漆器皿	にない裏面	漆器皿	1 mm以下白色少量	—	—
72 漆器皿 直	底部	—	—	—	南子田タラキ	ナデ	灰	灰	2 mm以下黑色。無色の凹白色ごく縦か	外裏に一部焼成時に乳気が入ってふくらんでいるところがある	—
73 漆器皿 直	底部	—	—	—	南子田タラキ	漆器皿	漆器皿	漆器皿	1 mm以下黑色。	—	—
74 漆器皿 直	底部	—	—	—	南子田タラキ	漆器皿	漆器皿	漆器皿	無色の凹白色。	—	—
75 漆器皿 直	— —漆封付环	—	—	—	南子田タラキ	当て具底	黃	白	2 mm以下白色。	外裏に一部焼成時に乳気が入ってふくらんでいるところがある	—
76 漆器皿 直	底部	—	—	—	南子田タラキ	当て具底	漆器皿	漆器皿	2 mm以下黑色。1 mm以下黑色。	平行タラキの凹の部分の縫がやや歪め	—
77 漆器皿 直	底部	—	—	—	南子田タラキ	平行タラキ	白	白	1 mm～3 mmの凹白色。	1 mm以下黒褐色少墨	—
78 漆器皿 直	底部	—	—	—	平行タラキ	同心円内で具底	黃	黃	7 mmの大絞を1つ。	—	—
79 漆器皿 直	底部	—	—	—	平行タラキ	当て具底	白	白	2 mm以下白色。	2 mm以下白色。	—
80 漆器皿 直	底部	—	—	—	平行タラキ	当て具底	白	白	3 mm以下白色。	3 mm以下黑色。	—
81 漆器皿 直	底部	—	—	—	平行タラキ	部分的	漆器皿	漆器皿	にない裏面	1 mm以下白色。	漆成不良
82 漆器皿 直	口縁部	—	—	—	自然輪	自然輪	オフホワイト	オフホワイト	—	—	漆器皿 古代
83 漆器皿 直	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	白	白	無色な自然輪。	—	—
84 漆器皿 直	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	黒	黒	1 mm以下透明光沢縦か。	1 mm以下白色。	漆器皿少墨
85 漆器皿 線縁部	底部	—	—	—	回転ナデ	自然輪 9 横ナデ 横方向の凸 ナラウナタキ	黃	黒	1 mm以下白色。	1 mm以下黑色。	内部に一箇所斜めにナデ有。縫の工具で擦り抜いてある箇所有。
86 漆器皿 直	底部	—	—	—	施白	施白	白	白	1 mm以下白色。	1 mm以下白色。	外裏全体がにない光沢がある 白點跡か?
87 漆器皿 直	底部	—	—	—	回転ナデ	自然輪	白	白	1 mm以下白色。	1 mm以下白色。	—
88 漆器皿 直	— —漆封付环	底部	—	—	回転ナデ	自然輪	漆器皿	漆器皿	—	—	最大径後付 6.6 cm
89 鎌形器 水注?	底部	—	—	—	施白	施白	オーライト	オーライト	—	—	越前 長江の口山の塚 (6.7)
90 開闢器 直	口縁部	—	—	—	施白	施白	オーライト	オーライト	—	—	絹糸 織物 古代
91 開闢器 直	底部	—	—	—	施白	施白	白	白	—	—	白磁 豊後國? 16C
92 開闢器 直	口縁部	—	—	—	施白	施白	白	白	ローラー型にかけて楕円化	—	—
93 開闢器 直	底部	—	—	—	施白	施白	白	白	—	—	白磁 時期不明 16C
94 土師器 簋	口縁部	(14.0) —	—	—	横方凹のナデ	横方凹のナデ	にない裏面	にない裏面	1～4 mmの褐色。1～3 mmの白色。	1 mm以下の裏面	外裏全体にスリ付材
95 土師器 簋	口縁部	—	—	—	ヘラトガリ	ナデ	にない裏面	漆器皿	2 mm以下白色。	2 mm以下白色。	—
96 土師器 簋	底部	—	(6.6)	—	ナデ	ナデ	にない裏面	にない裏面	以下透明光沢・基色がごく僅か。1 mm以下褐色。	—	—
97 土師器 簋	口縁部	(14.0) —	—	—	工具による鋸歯削ナデ	工具による鋸歯削ナデ	緑	緑	2 mm以下白色。	2 mm以下白色。	外裏に基物付着痕あり
98 土師器 簋	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	2 mm以下白色。	—	割目付材 斧 カス有 SC後半
99 延文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	白	白	1 mm以下白色。	1 mm以下白色。	丸足式

第1表 土器觀察表(3)

遺物 番号	種類	部位	法量			手法・調理・支拂ほか		色調		出土の特徴	備考
			口径	底径	壁厚	外側	内側	外側	内側		
100	埴生土器	深鉢	—	—	—	横方向のえがき	横方向のえがき	黄灰	黒灰	強烈な先兆焼多く	強烈な先兆焼多く
102	埴生土器	縦部	—	—	—	横方向のナデ	ナデ	青白	にない	5mm以下灰色系。	褐色斑点あり
103	土師器	縦	—	—	—	斜方向の工具ナデ	—	—	—	2mm以下白色系	2mm以下黑色光沢。
104	土師器	縦	—	—	—	斜方向の工具ナデ	—	—	—	褐色斑点あり	褐色斑点あり
105	土師器	主ニ子	ほぼ完形	4.7	4	3.1	ナデ	黒化しない	青白	ナデ後、二工具	2mm以下角閃石から1mm以下透明光沢。灰白色。
106	土師器	周	底部	—	—	—	ナデ	黒化しない	青白	多	多
107	土師器	縦	口縁部	—	—	—	回転ナデ	—	—	にない	2mm以下灰白色
108	土師器	縦	縦部	—	—	—	ナデ	多方向の工具	青白	1mm以下の白色系と僅か。1mm以下灰白色。1mm以下黑色光沢。	1mm以下の白色系と僅か。1mm以下黑色光沢。
109	須恵器	縦	縦部	—	—	—	平行ナデ	—	—	にない	2mm以下灰白色
110	土師器	縦	口縁～縦部	(2.1)	—	—	ナデ	工具によるナデ	青白	工具後が紅褐色に	外側に一部スズ材層
111	土師器	縦	口縁～縦部	31.3	—	—	ナデ	横・斜方向のナデ	青白	2mm以下白色系と少	2mm以下白色系。
112	土師器	縦	縦部	—	—	—	ナデ	横・斜方向のナデ	青白	2mm以下白色系。	2mm以下白色系。
113	土師器	縦	底部	—	5.6	—	工具ナデ箇箇なしナデ	工具ナデ	青白	にない	1mm以下白色系。
114	土師器	縦	口縁～縦部	(3.6)	—	—	ナデ	横・斜方向のナデ	青白	工具後ナデ	工具後が紅褐色に
115	土師器	高杯	口縁部	—	—	—	ナデ	—	青白	2mm以下白色系と少	2mm以下黑色光沢。
116	土師器	高杯	口縁部	—	—	—	横・斜方向のえがき	ナデ	青白	2mm以下白色系。	2mm以下白色系。
117	土師器	高杯	縦部	—	(11.1)	—	横・斜方向のえがき	ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
118	土師器	高杯	縦部	—	—	—	横・斜方向のえがき	ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
119	土師器	高杯	縦部	—	—	—	横・斜方向のえがき	ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
120	土師器	高杯	縦部	—	—	—	斜・横方向のえがき	ナデ	青白	3mm以下白色系。	3mm以下白色系。
121	土師器	高杯	縦部	—	(18.6)	—	回転ナデ	部分的にナデ	青白	1mm以下白色系。	強烈な先兆焼多く
122	土師器	高杯	縦部	—	—	—	エガキ	—	青白	2mm以下白色系。	2mm以下白色系。
123	土師器	高杯	縦部	—	—	—	横回転のナデ	—	青白	にない	2mm以下白色系。
124	土師器	片	ほぼ完形	(15.5)	—	—	工具ナデ	横方向のナデ	青白	にない	4mm以下白色系多く。
125	土師器	片	口縁部	—	—	—	ナデ	黒化しない	青白	強烈な白色系。	強烈な白色系。
126	土師器	片	口縁部	(23.6)	—	—	回転ナデ	カキナ	青白	にない	3mm以下白色系。
127	土師器	片	口縁～縦部	(16.0)	—	—	カキナ	ナデ	青白	にない	回転ナデ。
128	土師器	片	口縁～縦部	(34.0)	—	—	横・斜方向のナデ	ナデ	青白	にない	4mm以下白色系。
129	土師器	高台付杯	底部	—	(7.7)	—	回転ナデ	回転ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
130	土師器	高台付杯	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	青白	にない	3mm以下白色系。
131	土師器	片	口縁～底部	(12.6)	6.0	5.0	回転ナデ	回転ナデ	青白	にない	回転ナデ。
132	土師器	片	底部	—	(5.6)	—	回転ナデ	—	青白	にない	4mm以下白色系。
133	土師器	片	底部	—	(8.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
134	土師器	片	底部	—	(8.6)	—	回転ナデ	回転ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
135	土師器	片	底部	—	—	—	回転ナデ	—	青白	にない	2mm以下白色系。
136	土師器	片	底部	—	—	—	回転ナデ	—	青白	にない	2mm以下白色系。
137	土師器	片	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
138	土師器	片	口縁～縦部	—	—	—	回転ナデ	—	青白	にない	2mm以下白色系。
139	埴生土器	口縁～縦部	—	—	—	横方向ひびき横方向のナデ	ナデ	青白	にない	1mm以下白色系。	1mm以下白色系。
140	埴生土器	口縁～縦部	—	—	—	横・斜方向のナデ	ナデ	青白	にない	1mm以下白色系。	1mm以下白色系。
141	須恵器	縦	縦部	—	—	—	平行ナデ	黒化しない	青白	にない	2mm以下白色系。
142	須恵器	縦	縦部	—	—	—	工具によるナデ	—	青白	にない	2mm以下白色系。
143	土師器	縦	ほぼ完形	23.2	26.2	(4.6)	工具によるナデ	横方向の工具ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
144	土師器	縦	口縁～縦部	—	—	—	斜方向のナデ	工具ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。
145	土師器	縦	口縁～縦部	—	—	—	横方向の工具ナデ	工具ナデ	青白	にない	2mm以下白色系。

第1表 土器觀察表④

造物 番号	種類	部位	法量			手法・調理・支拂ほか		色調		胎土の特徴	備考
			口径	底径	壁厚	外面	内面	外面	内面		
149 土師器 高杯 斧部 (21.6) -	-	-	横・斜方向のナデ強め	横・斜方向のナギ	向のナギ	濃黒褐色	にない裏地	1m以下白色系、1m以下黑色系、白色輪僅か			
150 土師器 高杯 口縁 - -	-	-	横方向の弱いナデ	横方向のナギ	にない裏地	濃黒褐色	にない裏地	強度な透明白色輪多く	1m以下白地と、赤褐色と少量		全体にナデの後にナギか
151 土師器 斧 鋸部 - -	-	-	横方向のナギ	一側にナギ	向のナギ強め、高脚あ	濃黒褐色	濃黒褐色	2m以下白色系、1m以下各褐色系、灰色輪僅か			粘土層有り、輪開閉に弱めの溝を掘り立んでいる
152 土師器 高杯 斧部 - -	-	-	横・斜方向のナギ強め	多方向のナギ後々ナギ	ナギ	にない裏地	にない裏地	1m以下反白色、白色光沢僅か			
153 土師器 高杯 斧部～鋸部 - -	-	-	横・斜方向のナギ後々ナギ	土のナギからも	濃黒褐色	無	無	2m以下反白色、赤褐色輪僅か			
154 土師器 高杯 斧部 - -	-	-	横方向のナギ	横方向の二工ナギ	横方向の二工ナギ	にない裏地	河原多く	2m以下赤褐色、1m以下白色系、強度な透明白			
157 土師器 豪 口縁～鋸部 (24.6) -	-	-	斜方向のナギ	斜方向のナギ	斜方向のナギ	濃黒褐色	にない裏地	2m以下無透明白色輪多く	1m以下赤褐色光沢		
158 土師器 豪 口縁～鋸部 (24.9) -	-	-	横方向の工具ナギ	斜方向の工具ナギ	斜方向の工具ナギ	無	無	2m以下赤褐色、1m以下白地、反白色系、1m以下赤褐色	外面にスス付有り、内面に部分的に黒斑		
159 土師器 豪 口縁～鋸部 - -	-	-	横・斜方向のナギ強め	斜方向の工具ナギ	斜方向の工具ナギ	にない裏地	無	2m以下赤褐色	内面全体にススが多く付有り、内面に黒斑が有る		(透明白がされた跡か?)
160 土師器 豪 斧部 - -	-	-	横方向のナギ	ナギ	にない裏地	無	無	2m以下反白色	外表面の一部にスス付有り		
161 土師器 豪 斧部～鋸部 - -	-	-	横方向のナギ	方角のナギ	方角のナギ	にない裏地	無	2m以下反白色、赤褐色	内面の一部にスス付有り、口縁及び底部火文		
162 土師器 豪 口縁～鋸部 (7.7) -	-	-	横・斜方向のナギ	斜方ナギ後斜方ナギ	斜方ナギ後斜方ナギ	無	無	強度な透明白色	最大胴幅径 1.2 cm		
163 土師器 豪 産部 - -	-	-	横・斜方向のナギ	工具ナギ	工具ナギ	濃黒	濃黒	強度な透明白色	肩部から下全周にスス付有り		
164 土師器 豪 産部 - -	-	-	横方向の工具ナギ	斜方方向の工具ナギ	斜方方向の工具ナギ	にない裏地	無	1m以下反白色	口縁及び底部火文		
165 土師器 台付鉢 鋸部～底部 - -	-	-	横方向のナギ	ナギ	にない裏地	無	無	2m以下反白色	内面の部分的、内面の下部に黒斑あり		
166 土師器 台付鉢 鋸部 - (10.4) -	-	-	多方向のナギ	横方向のナギ	横方向のナギ	無	無	2m以下反白色	強度な透明白色多く		
167 土師器 高杯 ほぼ完形 16.2 11.9 17.0	工房による模倣または斜方	斜方	斜方	斜方	斜方	1m以下反白色系、褐色系	1m以下反白色系、褐色系	1m以下反白色系、褐色系	1m以下反白色系、褐色系	全体に強めに透明白で大きく僅く成形の跡の後の擦りガタの跡と並んで見える	
168 土師器 高杯 斧部 (25.5) -	-	-	横・斜方向のナギ	横方向のナギ	横方向のナギ	にない裏地	無	1m以下反白色系、褐色系			外表面に黒斑有り
169 土師器 高杯 口縁 (25.2) -	-	-	ナギ後工ナギ	ナギ後工ナギ	ナギ後工ナギ	無	無	2m以下反白色系			1m, 17, 17 同一
170 土師器 高杯 斧部 - -	-	-	ナギ後工ナギ	ナギ後工ナギ	ナギ後工ナギ	無	無	2m以下反白色系の少			169, 171 同一
171 土師器 高杯 斧部 - -	-	-	ナギ後工ナギ	ナギ後工ナギ	ナギ後工ナギ	無	無	2m以下反白色系の少			169, 170 同一
172 土師器 高杯 斧部 - (15.4) -	-	-	斜方ナギ強め、斜方の向のナギ	斜方の向のナギ	斜方の向のナギ	にない裏地	無	1m以下反白色系、褐色系			
173 土師器 高杯 斧部 - (16.8) -	-	-	ナギ後多方向のナギ	ナギ後多方向のナギ	ナギ後多方向のナギ	にない裏地	無	2m以下赤褐色			外表面に黒斑有り
174 土師器 斧 口縁～休部 (8.5) -	-	-	黒化しない	黒化しない	黒化しない	濃黒褐色	無	1m以下反白色系			
189 土師器 豪 口縁部 - -	-	-	横方向のナギ	横方向のナギ	横方向のナギ	にない裏地	無	2m以下反白色系			焼き不明
190 土師器 豪 口縁部 - -	-	-	ナギ強め	ナギ強め	ナギ強め	にない裏地	無	強度な透明白色			
191 土師器 豪 口縁～鋸部 - -	-	-	横方向のナギ	ナギ後斜方方向のナギ	ナギ後斜方方向のナギ	にない裏地	無	2m以下反白色系、褐色系			外表面に黒斑から局部的にかび、ヌメリ有り
192 土師器 豪 口縁～鋸部 (10.0) -	-	-	横・斜方向のナギ	横・斜方向のナギ	横・斜方向のナギ	無	無	1m以下赤褐色			外表面に赤褐色透明白
193 土師器 高杯 斧部 (31.0) -	-	-	ナギナギ	高脚あり	ナギナギ	にない裏地	無	強度な透明白色			
195 土師器 豪 口縁～底部 (21.6) 6.2	6.2	26.4	横方向の工具ナギ後斜方の工具ナギ	横方向の工具ナギ	横方向の工具ナギ	無	無	3m以下赤褐色			斜方の貼付裏側等に深い凹み有り
196 土師器 豪 口縁～鋸部 (30.0) -	-	-	斜方のナギ	斜方のナギ	斜方のナギ	にない裏地	無	1m以下赤褐色			斜方の裏側等に凹み有り
197 土師器 豪 ほぼ完形 17.9 4.7 24.5	4.7	24.5	全面の斜方押出し、横・斜方のナギ	多方向のナギ	中矢	濃黒褐色	にない裏地	4m以下赤褐色			4C後半 長財の裏
198 土師器 豪 口縁～鋸部 - -	-	-	横・斜方向の弱い工具ナギ	ナギ	ナギ	にない裏地	無	5m以下反白色系			全面の口縁～口縁付近にスス付有り
199 土師器 豪 口縁部 - -	-	-	横ナギナギ	スス付有り	ナギナギ	にない裏地	無	2m以下反白色系			裏面あり

第1表 土器觀察表(5)

遺物 番号	種別	部位	法量			手法・調理・支拂ほか		色調		胎土の特徴	備考
			口径	底径	壁厚	外面	内面	外面	内面		
200 土師器 瓢	瓶	瓶部	—	—	—	強い横方向のナギナ	横方 向のナギ	にない	黒	5 mm以下白色地多く 5 mm以下赤褐色地多く 4 mm以下褐色地	外面に朱ス付帯あり
201 土師器 壺	壺	口縁～瓶部 (14.2)	—	—	—	ナギ 一部に斜方向の工 作方向のナギ	斜方 向	にない	黒	3 mm以下黑色地多く 3 mm以下黑色地多く 2 mm以下に赤褐色地多く 強烈な火光斑	外面の口縁部にスス付帯
202 土師器 壺	壺	瓶部～瓶部	—	—	—	平行タキシ後復方向のナ ギ	斜方 向	にない	黒	3 mm以下赤褐色地 3 mm以下褐色地	瓶部内径既定 5.5 cm
203 土師器 壺	壺	瓶部付近	—	—	—	横・斜・横方向のナギ	ナギ	にない	黒	3 mm以下赤褐色地多く 1 mm以下黑色地少	
204 土師器 壺	壺	瓶部～瓶部	—	—	—	横方向の工具ナギと方 向	斜方 向	にない	黒	2 mm～4 mm赤褐色地、褐色地 1 mm以下赤褐色地	最大直径 備定 27.0 cm
205 土師器 壺	壺	瓶部～瓶部	—	—	—	横方向のナギと後復方向の 工具ナギ	斜方 向	にない	黒	2 mm以下赤褐色地、白色地多く 1 mm以下白色地	194と同一体の可能性有
206 土師器 壺	壺	瓶部 (29.6)	—	—	—	横方向のナギと斜方 向、斜方方向の工具に あるナギ	斜方 向	にない	黒	2 mm以下白色地、1 mm以下白色地、白色地多く 1 mm以下白色地	No.190と同様 5 cm後
207 土師器 壺	壺	瓶部～壺部 付近	—	—	—	横方向のナギと斜方 向、多方向のナギ	斜方 向	にない	黒	4 mm以下黑色地少 2 mm以下赤褐色地	瓶部最大径既定 27.0 cm 一部火痕
208 土師器 壺	壺	瓶部～壺部 — (6.4)	—	—	—	工具ナギ	斜方 向	にない	黒	2 mm以下白色地多く 強烈な火光斑少	一部火痕
209 土師器 壺	壺	瓶部～壺部	—	—	—	横方向のナギと 斜方方向のナギ	斜方 向	にない	黒	2 mm以下赤褐色地、白色地多く 1 mm以下白色地	193と同一体の可能性有
210 土師器 壺	壺	壺部	—	—	—	斜方方向のナギと ナギ	斜方 向	にない	黒	2 mm以下白色地、褐色地少、1 mm以下黑色火光斑。強 烈な火光斑少多く	
211 土師器 壺	壺	壺部	—	—	—	ナギ 萬字に斜方方向のナギ	黑色地	にない	黒	3 mm以下黑色地、白色地少	丸窓
212 土師器 壺	壺	壺部	—	—	—	横・斜方方向のナギ、萬字 多方向のナギ	斜方 向	にない	黒	5 mm以下赤褐色地少、5 mm以下黑色地、1 mm以下白色地。	蓋部のかじり痕有
213 土師器 高杯	杯	—	—	—	—	2.5 cm	斜方 向	にない	黒	強烈な火光斑少	
214 土師器 高杯	杯	瓶部	—	—	—	斜方方向のナギと斜方 向	斜方 向	にない	黒	2 mm以下白色地、1 mm以下赤褐色地、黑色火光斑。 白火痕少	
215 土師器 高杯	杯	瓶部	—	—	—	横方向のナギと 黑 萬字	斜方 向	にない	黒	2 mm以下白色地、1 mm以下白色地、黑色火光斑少	
216 土師器 高杯	杯	瓶部	—	—	—	向のナギと 斜方 向	斜方 向	にない	黒	3 mm以下赤褐色地、黑色火光斑少 1 mm以下白色地、白色地少	エンタシス状 痕、黑色火光斑少
217 土師器 高杯	杯	瓶部	—	—	—	横方向のナギと斜方 向	斜方 向	にない	黒	2 mm以下白色地、1 mm以下赤褐色地	
218 土師器 高杯	杯	瓶部	—	—	—	横方向のナギと斜方 向	斜方 向	にない	黒	1 mm以下白色地、白色地	
219 土師器 壺	壺	— (14.7)	—	—	—	横・斜方方向のナギと 斜方方向のナギ	斜方 向	にない	黒	3 mm以下赤褐色地少	
220 土師器 瓶	口縁	—	—	—	—	匂着しい	匂着 い	—	黒	強烈な火光斑少	
221 土師器 瓶	口縁	— (5.6)	—	—	—	匂着ナギ	匂着 い	—	黒	強烈な火光斑少	底部へ向
222 土師器 瓶	口縁	— (5.0)	—	—	—	匂着ナギ	匂着 い	—	黒	1 mm以下白色地、強烈な火光斑少	
223 土師器 瓶	瓶部	— (5.6)	—	—	—	匂着ナギ	匂着 い	—	黒	1 mm以下白色地、強烈な火光斑少	
224 布紋土器	口縁部	—	—	—	—	工具ナギとナギ	斜方 向	にない	黒	5 mm以下白色地 (黒) 粘土少 5 cm以下青紫色地	
225 漆素器 瓶	瓶	—	—	—	—	匂着ナギ	匂着 い	—	灰	漆	
226 漆素器 瓶	瓶	—	—	—	—	平行ナギ 一部に匂着	匂着 い	—	灰	5 mm以下褐色地	当て具足
227 漆素器 瓶	瓶	瓶部	—	—	—	匂着	匂着 い	—	灰	5 mm以下褐色地、強烈な 黑色火光斑少	当て具足部分、匂着點少?
228 漆素器 瓶	瓶	瓶部	—	—	—	部分的に自然剥離 剥離ナギ	剥離 ナギ	—	灰	1 mm以下白色地、白色火光斑、強烈な火光斑少	
229 楔文土器 滝鉢	口縁部	—	—	—	—	横方向の工具後復工具 剥離強大	ナギ	にない	黒	1 mm以下白色地、黑色火光斑、強烈な火光斑少	丸窓
230 楔文土器 滝鉢	口縁部	—	—	—	—	横方向のナギ	横方 向	にない	黒	強烈な白色地、黑色火光斑少	
231 楔文土器 滝鉢	口縁部	—	—	—	—	ナギ	ナギ	にない	黒	1 mm以下白色地、黑色火光斑少	付口 松脂式
232 楔文土器 滝鉢	瓶部	—	—	—	—	斜方方向の細いナギ	ナギ	にない	黒	2 mm以下白色地	詳細不明、細胞か
233 楔文土器 滝鉢	瓶部	—	—	—	—	横方向のナギ	ナギ	にない	黒	2 mm以下褐色地、1 mm以下褐色地、白色地少 1 mm以下褐色地、白色地少	
234 楔文土器 滝鉢	口縁部	—	—	—	—	横方向のナギ	ナギ	にない	黒	1 mm以下白色地、強烈な火光斑少 1 mm以下白色地	人形、直線しきり
235 楔文土器 瓶	瓶部	—	—	—	—	匂着ナギ	匂着 い	—	灰	2 mm以下白色地多く	匂着火、黒口式
236 楔文土器 瓶	瓶部	—	—	—	—	匂着ナギ	匂着 い	—	灰	2 mm以下白色地多く	黒口式

第1表 土器觀察表⑥

遺物 番号	種別	部位	法量			手法・調理・支拂ほか		色調		胎土の特徴	備考	
			口径	底径	壁厚	外面	内面	外面	内面			
被り付けるもの												
237	城文土器 深鉢	口縁～脚部	—	—	—	斜方向の底盤余隙痕 斜方向の工具ナデ	にない時	黒灰	2mm以下白色系。白灰色和僅か丸窓式			
238	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	横方向の底盤余隙痕	有	白	3mm以下赤褐色系。灰白色系。微細な淡黃褐色系。	丸窓式		
239	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	ナデ有無なし 斜方向の底盤余隙痕突起	ナデ	灰黒系	5mm以下明褐色多く、1mm以下白、黒灰色。信	丸窓式		
240	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	横方向の底盤余隙痕	有	白	微細な淡黃褐色系。2mm以下白色系少々 1mm以下	丸窓式		
241	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	横方向の底盤余隙痕 斜方向の底盤余隙痕	有	黄灰	4mm以下明褐色系。1mm以下白色系少々 明るい酒	丸窓式 全体的に黒灰		
242	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	斜方向の底盤余隙痕 斜方向の底盤余隙痕	有	白	3mm以下各褐色系僅か 2mm以下淡黃褐色系 2mm以下藍色	外縁の口縁付近にスズ付着、黒変 もたられ		
243	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	横方向のナデの斜傾性 二重の底盤余隙痕	有	白	1mm以下白色系多く僅か 黑細な透明白光沢和僅か	丸窓式 酒波紋	外縁の口縁付近にスズ付着 内縁の口縁付近に透明白光沢	
244	城文土器 深鉢	底部付近	—	—	—	工具によるナデ直接痕 斜・横方向の底盤余隙痕	にない時	白	1mm以下白色系。暗褐色系。無色透明和	丸窓式		
245	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	斜方向の底盤余隙痕 斜・横方向の底盤余隙痕	有	白	1mm以下褐色系僅か 1mm以下透明白光沢少々	内縁はにない場合 (T595/4) の部 分も有 内面にスズ付着		
246	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	底盤余隙痕	白	2mm以下褐色系多く 2mm以下白色系 8mm以下黄色系僅か	黒川式		
247	城文土器 深鉢	口縁部付近	—	—	—	横方向の底盤余隙痕 斜・横方向の底盤余隙痕	有	白	1mm以下白色系 1mm以下褐色系僅か 内縁に凸凹物付着 塗き不規	丸窓式		
248	城文土器 深鉢	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ有無付近 2mm以下	白	2mm以下褐色系多く 1mm以下白色系	丸窓式		
249	城文土器 深鉢	脚部	—	—	—	工具によるナデ・斜方向の工具ナデ	有	白	1mm以下褐色系透明白光沢が多く、1mm以下白色系	丸窓式		
250	城文土器 深鉢	脚部	—	—	—	多方向の底盤余隙痕 多方向の底盤余隙痕	有	白	1mm以下褐色系透明白光沢多く 3mm以下明褐色系 1mm以下灰色系僅か	内面の一部に揮発性有元 内面 に黒変か?		
251	城文土器 深鉢	脚部	—	—	—	底盤余隙痕ナデ	灰黒	白	2mm以下透明白光沢多く 1mm以下白色系多く 1mm以下灰色系僅か	丸窓式		
252	城文土器 深鉢	底部	—	(8.5)	—	ナデ	灰黒	白	6mm以下黑色系、5mm以下にない褐色系、4mm以下褐色系付着 下灰褐色系、1mm以下黑色光沢系、黑色和僅か 褐色など透明白光沢少々	内面に凸凹物付着 底部に白色和僅か		
253	城文土器 深鉢	脚部～底部	—	(8.2)	—	斜方向の工具ナデ	ナデ	白	無 1mm以下褐色系僅か 4mm以下反白色系 底部に白色物付着	丸窓式	内面の一部に揮発性有元 内面 に黒変か?	
254	城文土器 深鉢	脚部	—	—	—	横・斜方向の工具ナデ	有	白	1mm以下反白色系僅か 1mm以下褐色系 底部に白色物付着	丸窓式		
255	城文土器 深鉢	脚部	—	—	—	底盤余隙痕	ナデ	白	1mm以下褐色系 色多く	経年土器		
256	城文土器 台付皿	脚部	—	(14.7)	—	多方向のミガキ	ナゼリ後生毛	白	2mm以下透明白光沢で 2mm以下白色 2mm以下白色系付着	内面に黑色物付着 外縁に黑色物付着		
257	城文土器 台付皿	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ・一部擦痕	白	2mm以下白色系 1mm以下褐色系	丸窓式 絶対用		
264	陶器 豆	脚部付近	—	—	—	ナデタラキ後ナデ 一 白苔跡	ナデ	白	1mm以下白色系 1mm以下褐色系 1mm以下白色系	丸窓式 絶対用		
265	陶器 豆	脚部	—	—	—	平ナタキ	当面底	オーブ系	白	1mm以下白色系	丸窓式	
266	陶器 豆	口縁部	—	—	—	ナデ	当面底	白	1mm以下白色系	丸窓式		
267	陶器 豆	底部	—	—	—	脚輪 (底)	底	白	1mm以下白色系 1mm以下褐色系 1mm以下白色系	丸窓式 白化け系 10C~15C		
268	陶器 豆	脚部	—	—	—	ナデ	底	白	1mm以下白色系	丸窓式 白化け系 10C後半~15C		
269	陶器 豆	底部	—	(4.4)	—	ナデ	底	白	1mm以下白色系	丸窓式 白化け系 10C後半~15C		
270	陶器 土瓶	蓋	—	—	—	3.40 (底付) (底付)	底	白	1mm以下白色系、褐色色の範囲多く、無色透明 1mm以下白色系少々	天井下5.5cm つまり1.5cm 左右 色多く		
271	磁器 豆	脚部	—	—	—	底	底	白	白	底付 青花、唐草文、16C		
272	磁器 豆	底部	—	(5.5)	—	底	底	白	白	青花、中国産 16C~17C		
273	磁器 豆	底部	—	(7.0)	—	底	底	白	白	白花、高麗 11C後半~12C前半		
274	陶器 豆	口縁部	—	—	—	沈付ぐら	ナデ	白	微細な白色和僅か			
275	陶器 豆	口縁部	—	—	—	田植ナデ	田植ナデ	白	2mm以下黑色系和僅か 他細な反白色多く			
276	須恵器 豆	口縁付近	—	—	—	横方向のナデ	にない時	白	2mm以下褐色系、灰白色、灰白色和僅か	ナ子付にV字の辺縁が連続して現 されている 一筆書きか		
277	須恵器 豆	脚部	—	—	—	脚子口タラキ	空心内面と具眞	黄灰	黄灰	建設		
278	須恵器 豆	脚部	—	—	—	脚子口タラキ ナデ	ナデ 脚子口ナデ	地底	2mm以下褐色系和僅か 微細な反白色少々			
279	須恵器 豆	脚部	—	—	—	平行タラキと後ナデ消し ナシ	空心内面と具眞	黄灰	微細な黑色系、白色和僅か			
280	須恵器 豆	脚部	—	—	—	横方向のタラキ 残子	空心内面に上る 手	黄灰	1mm以下白色系、黑色和僅か			
281	須恵器 豆	脚部	—	—	—	横方向のナデ 残子 手	横方向のナデ	白	2mm以下白色系。微細な透明白光沢、1mm以下黑 褐色			
282	須恵器 豆	脚部	—	—	—	残子	残子	白	2mm以下白色系少々			
283	須恵器 豆	脚部	—	—	—	残子口タラキ	横方向の工具ナデ	白	1mm以下白色系和僅か			
284	須恵器 豆	脚部	—	—	—	残子口タラキ	横方向にナデ消し	白	無			

第1表 土器觀察表⑦

遺物 番号	種類	部位	法量				手法・調理・支拂ほか		色調		胎土の特徴	備考
			口径	底径	壁厚	外形	内面	内面	内面	内面		
285 漢瓦器 瓢	瓢	瓢部	-	-	-	哨子田タクキ	タクキ	灰白	灰白	2 mm以下白色。1 mm以下暗灰色や少量、黒褐色など		
286 漢瓦器 瓢	瓢	瓢部	-	-	-	平行田タクキ	同心円並て具眞珠	陶白	陶白	明光沢感僅か		
287 漢瓦器 瓢	瓢	瓢部	-	-	-	一回ナメラシ	ナメ			2 mm以下灰白色。1 mm以下青褐色や少量		
288 漢瓦器 瓢	瓢	瓢部	-	-	-	平行田タクキ	同心円並て具眞珠子	灰	灰	1 mm以下灰白色。暗褐色	灰白色の胎土とよく混ざっている。断面は閉になって見える	
289 漢瓦器 瓢	瓢	瓢部	-	-	-	平行田タクキ	同心円並て具眞珠	灰白	灰	暗褐色		
290 漢瓦器 瓢	瓢	瓢部	-	-	-	船形子田タクキ	同心円並て具眞珠	灰	灰	4 mm以下白色。1 mm以下赤褐色や少量		
291 漢瓦器 瓢	瓢	瓢部付近	-	-	-	平行田タクキ	ナメ	灰	灰	1 mm以下白色。褐色や少量、無色透明感少量	内部に麻痺有。軋用感か?	
292 漢瓦器 高台付舟 口縁部	口縁部	(10.9)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰白	灰	桃色	自然端の底が舟形	
293 漢瓦器 瓢	口縁部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	黄灰	灰	3 mm以下墨色地脚部僅か		
294 漢瓦器 瓢	瓢部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰	灰	1 mm以下灰白色。暗褐色	推定腹径幅 7.2 cm	
295 漢瓦器 瓢	瓢部	-	-	-	-	哨子田タクキ(清) 桶舟	桶舟	灰	灰	1 mm以下白色。		
296 漢瓦器 瓢	瓢部	-	-	-	-	全周墨七點絞、此其舟	桶舟ナメ 舟方向のナメ	灰白	黄灰	2 mm以下黑色光沢。微細な墨色粒。白色斑僅か	鉛徑測定 16.2 cm	
297 漢瓦器 瓢	瓢部～底部	(9.6)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰黑	暗灰	2 mm以下灰白色和少量		
298 漢瓦器 瓢	瓢部～底部	(12.8)	-	-	-	横方舟のナメ 多方	横方舟のナメ	灰	灰	2 mm以下灰白色和僅か 微細な光沢感	表面に自然端がかかっている。表面僅か?	
299 漢瓦器 瓢	口縁～瓢部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰	灰	1 mm以下墨色地脚部ごく僅か、微細な白色地ごく僅か。微細な透明白沢感ごく僅か		
300 漢瓦器 瓢	口縁部	(12.8)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰白	暗灰	微細な白色地脚部僅か		
301 漢瓦器 瓢	口縁部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰白	灰	1 mm以下灰白色地脚部ごく僅か、1 mm以下暗灰色地ごく僅か	内に灰斑	
302 漢瓦器 瓢	口縁部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰黑	灰	1 mm以下灰白色地脚部		
303 漢瓦器 高台付舟 底部	底部	(8.6)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰白	灰白	1 mm以下灰白色。褐色地。1 mm以下白色地僅か	焼成不良	
304 漢瓦器 瓢	口縁部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰	灰	1 mm以下灰白色。褐色地。無色透明感僅か	つまり徑推定 2.2 cm	
305 漢瓦器 瓢	底部	-	(8.5)	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	灰黑	灰	微細な白色地。光沢和少量		
306 土師器 瓢	口縁～底部 (10.6)	-	-	-	-	横方舟のナメ ナメ	横方舟のナメ ナメ	ヘラ	ヘラ	1~2 mmの褐色斑。灰白色。1~2 mmの白色地。		
307 土師器 瓢	口縁～底部 (23.0)	-	-	-	-	カヌナ ナメ	カヌナ ナメ	ヘラ	ヘラ	1 mm以下赤褐色地。1 mm以下白色地僅か		
308 土師器 瓢	口縁部	(23.2)	-	-	-	田輪舟ナメ カヌナ	田輪舟ナメ	ヘラ	ヘラ	微細な白色地脚部少々か 3 mm以下白色地僅か		
309 土師器 瓢	底部	-	-	-	-	横方舟のナメ	横方舟のナメ	ヘラ	ヘラ	微細な透明白沢感多く 1 mm以下透明光沢感。褐、白、灰地和少量		
310 土師器 瓢	口縁～瓢部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	浅黄褐	浅黄褐	微細な透明白沢感少量 1 mm以下墨色地脚部。白、赤褐色地僅か		
311 土師器 瓢	口縁～底部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	褐	褐	1~2 mmの白、灰、褐色地少量		
312 土師器 瓢	口縁～底部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	褐	褐	微細な透明白沢感和少量 1 mm以下白色地少量		
313 土師器 瓢	口縁部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	浅黄褐	浅黄褐	1 mm以下褐色地。微灰色地和少量。微細な透明白沢感僅か		
314 土師器 瓢	口縁部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	真	真	微細な透明白沢感。白色地	内黑	
315 土師器 瓢	口縁部	-	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	真	真	1 mm以下褐色地。褐色地少量	内黑	
316 土師器 瓢	瓢部～底部	(5.2)	-	-	-	田輪舟ナメ ハウ切り工具	田輪舟ナメ	褐	褐	1 mm以下褐色地。白色地。1 mm以下墨色地脚部。微細な透明白沢感僅か		
317 土師器 瓢	底部	(5.6)	-	-	-	田輪舟ナメ ハウ切り 工	田輪舟ナメ	浅黄褐	浅黄褐	1~2 mmの褐色地少量。微細な透明白沢感僅か		
318 土師器 瓢	底部	(5.8)	-	-	-	看あお	看あお	褐	褐	2 mm以下赤褐色地僅か 微細な褐色地。墨褐色地和少量		
319 土師器 瓢	底部	(5.8)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	ヘラ	ヘラ	1~2 mmの白、褐、褐色地少量		
320 土師器 瓢	底部	(5.8)	-	-	-	田輪舟ナメ ヘラ	田輪舟ナメ ヘラ	褐	褐	1 mm以下白地。褐色地少量		
321 土師器 瓢	瓢部～底部	6.4	-	-	-	田輪舟ナメ ハウ切り	田輪舟ナメ	ヘラ	ヘラ	1 mm以下褐色地。白色地。褐色地。微細な透明白沢感		
322 土師器 瓢	底部	(5.2)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	浅黄褐	浅黄褐	1 mm以下褐色地。白色地。墨褐色地	全体的に墨化模様	
323 土師器 瓢	底部	(6.6)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	褐	褐	1 mm以下褐色地少量。1 mm以下褐色地和少量。灰褐色地。灰褐色地。微細な透明白沢感		
324 土師器 瓢	底部	(5.8)	-	-	-	田輪舟ナメ 七重目	田輪舟ナメ 七重目	浅黄褐	褐	1 mm以下灰白色地。白色地。褐色地。微細な透明白沢感		
325 土師器 瓢	底部	(5.6)	-	-	-	田輪舟ナメ ハウ切り	田輪舟ナメ	ヘラ	ヘラ	1 mm以下褐色地和少量。微細～1 mmの透明白沢感		
326 土師器 瓢	底部	(4.6)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	褐	褐	1 mm以下明赤褐色地。暗赤褐色。黑色地	内面に赤色斜斜付帯？底部へ至り外側の一帯に赤色ついた部分がある 斜斜付帯	
327 土師器 瓢	底部	6.15	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	褐	褐	2.5 mmの褐色透明白沢感！ 1 mm以下暗褐色地。暗赤褐色。褐色地	底部へ至り外側の一帯に赤色ついた部分がある 斜斜付帯	
328 土師器 瓢	底部	(5.6)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	褐色化して薄赤不規則	深黄褐	微細な透明白沢感ごく僅か	底部へ至り外側の一帯に赤色ついた部分がある 斜斜付帯	
329 土師器 瓢	底部	(7.1)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	ヘラ	ヘラ	1 mm以下赤褐色地。黑色地。微細な透明白沢感少	底部へ至り	
330 土師器 瓢	底部	(5.2)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	褐	褐	1 mm以下赤褐色地。に赤い赤褐色地少量	底部へ至り	
331 土師器 瓢	底部	(5.6)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	ヘラ	ヘラ	2 mm以下赤褐色地。に赤い赤褐色地少量	底部へ至り	
332 土師器 瓢	底部	(5.6)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	ヘラ	ヘラ	1 mm以下灰白色地。白色地。褐色地。微細な透明白沢感	底部へ至り	
333 土師器 瓢	瓢部～底部	(4.7)	-	-	-	田輪舟ナメ	田輪舟ナメ	浅黄褐	浅黄褐	1 mm以下明褐色地。褐色地。微細な墨色地	底部へ至り	

第1表 土器観察表(8)

遺物 番号	種別	部類	部位	手法・装飾・文様ほか				色調 外観 内面	出土の特徴	備考
				口径	底径	壁厚	内面			
334 土師器 片	底部	—	(7.6)	—	圓輪ナメ ハラ切り	圓輪ナメ	にない時	にない時 無	微細な透明光沢感僅か	円底灰高台
335 土師器 片	底部	—	(6.6)	—	圓輪ナメ	圓輪ナメ	洗浄時	淡青緑	1m以下褐色、灰色系、白色系少量	円底灰高台
336 土師器 片	側面～底部	—	(5.5)	—	圓輪ナメ 黒化	圓輪ナメ	粗	暗	1m程度の褐色系、黒色系。1m以下白色系少量	円底灰高台
337 土師器 高台付片	側面～底部	—	—	—	圓輪ナメ	圓輪ナメ	洗浄時	青緑青	6mmのじぶん褐色點が1つ。1m以下褐色系。黑色 色系少量	6mm以下褐色点
338 土師器 高台付片	底部	—	—	—	ハラ切り	黒化著しい	にない時	にない時	1m以上黒色光沢灰灰系。白色系僅か。黒化～！	6mm以下褐色灰
339 土師器 高台付片	底部	—	(8.6)	—	圓輪ナメ	圓輪ナメ	にない時	黒	2mmの褐色點が2つ。1m～強めの褐色系。暗 化点。黑色系。	2mm以下白色系。暗化点。体積がないためどちらか 不明
340 布衣土器	口縁～側部	—	—	—	横ナメ ナメ	布目模	粗	暗	5mm程度の褐色系が1箇。1m以下褐色系の点が1箇。	5mm以下褐色系
341 布衣土器	口縁～側部	—	—	—	ナメ 黒化著しい	布目模	粗	暗	2mm以下褐色系。白色系。	2mm以下褐色系
342 布衣土器	側面～底部	—	—	—	ナメナメ	布目模	にない時	暗	1m以上白色系	1m以上白色系
343 布衣土器	側面	—	—	—	圓輪削落時のテクスチャ模様	布目模	にない時	暗	6mmのじぶん褐色系を1粒	6mm以下褐色系
344 布衣土器	側面	—	—	—	ナメ	布目模	粗	暗	1mm以下白色系。無	不明
345 土師器 壺	口縁部	—	—	—	無施	オーリーフ灰 オーリーフ灰	無	無	無	経年 破損 瓶底 内底 BC後
346 土師器 土瓶	底部	—	—	—	—	—	—	—	最大高(2.4cm)、最大幅(1.25cm)、 孔径約45cm、重量2kg	—
347 漆器器 漆	口縁部	(8.6)	—	—	深井の内面	圓輪削ナメ 自然糊 黄茶	尚灰	1m以下褐色系僅か	片面に漆跡文	—
348 土師器 甕	口縁～側部	(8.5)	—	—	側方のナメ 一回にス 機方向のナメ後削方	削	にない時	3mm以下褐色系。白色系。2mm以下黑色系灰	2mm以下褐色系	—
349 土師器 甕	口縁部	—	—	—	人字形	ナメナメ	粗	暗	1m以上白色系	1m以上白色系
350 土師器 甕	口縁部	—	—	—	ナメナメ	側方のナメ	粗	暗	2m以上白色系灰。1m以下白色系少量	2m以上褐色系灰。1m以下白色系僅かに。2mm以 下褐色系灰。1m以上各種褐色系灰に。1m以下 黑色系灰僅か
351 土師器 甕	口縁～側部	—	—	—	ナメ 黑化著しい	ナメナメ	にない時	無	1mの褐色系點が1つ。1m～2mの褐色系透明白。暗 化点。黑色系灰。1m以下白色系透明。暗。底部付近に底あり 灰點。底付近灰。	—
352 土師器 甕	底部	—	(4.0)	—	工具による	工具による細ナメ	にない時 削いナメ	無	2～4mmの白色系。赤褐色系。純灰系。無色 系。	2～4mmの白色系。赤褐色系。純灰系。無色 系。
353 土師器 甕	底部	—	4.1	—	秋方のナメ	ナゼリ?	にない時 底あり	暗	透明白。1m以下白色系。無色透明。純灰系。無色 系多く	透明白。1m以下白色系。無色透明。純灰系。無色 系多く
354 土師器 甕	底部	—	(5.5)	—	機方のナメ+多方向力向 色化により で1回 強い工具痕	機方のナメ	にない時	無	1mmの赤褐色系。2mm以下褐色系。灰色系。 白色系。無色系。1m以下白色系。	1mm以下褐色系。灰色系。無色透明若僅か
355 土師器 甕	底部	—	(5.6)	—	ナメ	底脚部	にない時	暗	2mm以下褐色系。2mm以下白色系。	2mm以下褐色系。2mm以下白色系。
356 土師器 甕	口縁部	(8.0)	—	—	ナメナメ	ナメナメ	にない時	暗	2mm以下白色系。1m以下白色系。無色 系。	1m以下白色系。
357 土師器 甕	口縁～側部	(7.5)	—	—	ナメナメ+強め拂拭 の上生地	ナメナメ+強め拂拭 の上生地	にない時	暗	1m以下白色系僅か	—
358 土師器 甕	側面～底部	—	—	—	僅り又は スズベの透あ オズリ V	機方のナメ	にない時	暗	2～4mmの褐色系透明白。褐色系。白色系少量 1m以下白色系。	1m以下褐色系の僅か？ 褐色系有り。暗か？
359 土師器 甕	底部	—	—	—	秋方のナメ+力向 基層	秋方のナメ 斜削基層	にない時 工具ナメ	暗	3mm以下にない褐色系。1m以下にない褐色系 僅か	小型丸底窓か？
360 土師器 甕	底部	—	—	—	多方方向の 工具ナメ	にない時	暗	2～5mmの褐色系。底付近灰。底付近灰。無色 系。1m以下褐色系。角部灰。無色透明を多く	1m以下褐色系。	
361 土師器 高片	側面削	—	—	—	エドモ	エドモ後削ナメ	洗浄時	暗	2mm以下褐色系。1m以下白色系。	2mm以下褐色系。
362 土師器 高片	側面削	—	—	—	機方のナメ後削方のナメ エドモ	機方のナメ	にない時	暗	機方の各機方色。白色系僅か	2mm以下褐色系。
363 土師器 高台付片	底部	—	—	—	圓輪ナメ	圓輪ナメ	にない時	暗	2mm以下白色系。2mm以下白色系。	底部へう切り
364 土師器 脚付鉢	側部	—	(4.0)	—	機方のナメ+力向 斜削方のナメ	ナメ 壁に機方のナメ 斜削方のナメ	にない時	暗	機方の各機方色。白色系僅か	2mm以下褐色系。
365 土師器 台付片？	底部	—	—	—	機方のナメ	ナメ 拭拂灰	にない時	暗	3mm以下褐色系。2mm以下白色系	2mm以下褐色系。
366 土師器 ミチュー 土器	側面～底部	—	—	—	拭拂灰	拭拂灰	にない時	暗	1mm以下白色系。透明白灰。拭拂灰。にない 時	拭拂灰。
367 土師器 不明	底部	—	(2.0)	—	工具ナメ	工具ナメ	多方向のナメ	暗	機方の各機方色。白色系。	機方の各機方色。
368 土師器 甕	底部	—	(8.6)	—	機方のナメ後削、斜 機方のナメ	機方のナメ	にない時 向のナメ	暗	1mm以下白色系。白色系。白色系僅か	1mm以下白色系。
369 陶生土器 甕	口縁～側部	(12.4)	—	—	ナメナメ ハラミキ	機方のナメ	粗	暗	機方の各機方色多く！ 1mm以下白。白。黑色少 量	1mm以下白色系。
370 陶生土器 甕	口縁付近	—	—	—	機方のナメ 多方向 側面	機方のナメ	にない時	暗	機方から1m以下褐色系灰。2mm以下白色系 少	1m以下白色系。
371 純土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻多施ナメ	ナメ	にない時	暗	機方の各機方色。透明白灰。2mm以下褐色系 僅か	純底
372 純土器 深鉢	口縁部	—	—	—	機方のナメ	機方のナメ	にない時	暗	1mm以下白色系。透明白灰。2mm以下白色系 少	純底
373 純土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻多施	貝殻多施	にない時	暗	2mm以下白色系多く。2mm以下褐色系少	2mm以下白色系。
374 純土器 深鉢	側部	—	—	—	機方のナメ	機方のナメ	にない時	暗	1mm以下白色系。白色系。2mm以下白色系。無 機方より強烈！ 機方後	丸底より強烈！ 機方後

第1表 土器觀察表⑨

遺物 番号	種類	部位	法量			手法・調理・支拂ほか		色調		胎土の特徴	備考
			口径	底径	壁厚	外側	内側	外側	内側		
375	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	真白	に古い裏面	2mm以下に古い褐色色。黑色光沢少、1mm以下に古褐色少。表面にスス付やか?	
376	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓痕一部ナデ	貝殻食卓痕	に古い時	緑	下底灰褐色少。植物な透明光沢少。	粘土式
377	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓痕	貝殻食卓痕	緑	—	1mm以下透明白光沢、2mm以下灰褐色多。	胎土に化粧物付着、丸尾式
378	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓痕	貝殻食卓痕	灰黒	に古い時	1mm以下透明白光沢、1mm以下黑色光沢少。1mm以下透明白光沢、1mm以下黑色光沢少。	丸尾式
379	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓ナデ済	貝殻食卓ナデ済	緑	—	1mm以下透明白光沢、透明白光沢多く、1mm以下黑色光沢少。	丸尾式
380	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	風化色斑	風化色斑	緑	—	1mm以下透明白光沢少。	丸尾式
381	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様の底面ナデ	模様の底面ナデ	白	に古い赤緑	2mm以下透明白光沢。細緻な光沢多く	外表面にスス付着 内面に口唇部付着
382	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓痕	貝殻食卓痕	白	—	3mm以下白色少。2mm以下明赤褐色多く	丸尾式
383	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	工具によるナデ透過程	工具によるナデ	真白	青緑	1mm～微顯な白色。薄褐色。無色透明光沢	丸尾式
384	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様の底面食卓 料	模様の底面食卓 料	白	—	微顯な白色。1mm以下透明白光沢少、2mm以下白色少。	丸尾式
385	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓 磐石食卓	貝殻食卓 磐石食卓	白	少	2mm以下に古い褐色。透明白光沢僅か。1mm以下白色少。	丸尾式
386	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓 磐石食卓	貝殻食卓 磐石食卓	白	に古い時	1mm以下に古い褐色。透明白光沢僅か。1mm以下白色少。	丸尾式
387	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様の底面ナデ	模様の底面ナデ	白	—	3mm以下透明白光沢。1mm以下白色少。2mm以下白色少。	丸尾式
388	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様の底面食卓 料	模様の底面食卓 料	白	に古い時	1mm以下透明白光沢多く、5mm以下褐色少。	丸尾式
389	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	—	3mm以下白色少。	丸尾式
390	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	模様の底面食卓 料	模様の底面食卓 料	白	に古い時	3mm以下透明白光沢。底端黒。黑色光沢。白色光沢。褐色孔有り	丸尾式
391	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	貝殻食卓	貝殻食卓	白	に古い時	1mm以下白色少。	丸尾式
392	城文土器 深鉢	口縁付近	—	—	—	斜方向の貝殻食卓痕	斜方向の貝殻食卓痕	白	—	1mm以下白色少。2mm以下褐色少。	丸尾式
393	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	9タキ像ナデ	9タキ像ナデ	白	に古い時	2～4mm透明白光沢。2mm以下白色。1mm以下黄色光沢少。	内面に化粧物付着
394	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	貝殻食卓痕	貝殻食卓痕	白	に古い時	2mm以下透明白光沢。底端黒。黑色光沢。白色光沢。褐色孔有り	丸尾式
395	城文土器 深鉢	底部	(13.4)	—	—	模様の底面ナデ	模様の底面ナデ	ナデ	青緑	4mm以下青緑色。2mm以下白色少。	丸尾式
396	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	に古い時	1mm以下白色。1mm以下明褐色和僅か。	粘土式
397	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	—	1mm以下白色。1mm以下褐色少。	粘土式
398	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	—	4mm以下透明白光沢。2mm以下白色少。	粘土式
399	城文土器 深鉢	口縁部	(21.4)	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	に古い時	2mm以下透明白光沢少。	丸尾式
400	城文土器 深鉢	口縁部	(25.6)	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	に古い時	5mm以下白色少。	丸尾式
401	城文土器 深鉢	口縁部	—	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	に古い時	2mm以下白色少。	内面に黒斑あり
402	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	白	—	1mm以下白色少。	丸尾式
403	城文土器 深鉢	底部付近	—	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	に古い時	微顯な白色少。	丸尾式
404	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	模様のナデ	模様のナデ	白	—	微顯な白色少。	丸尾式
405	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	ナデナデ	ナデナデ	白	に古い時	3mm以下透明白光沢少。1mm以下白色少。	後期～後期前葉あたり
406	城文土器 深鉢	底部	—	—	—	模様底(網目)	模様底(網目)	白	—	2mm以下白色少。	絆縫土器
407	城文土器 台付鉢	底部	(10.0)	—	—	ナデ	ナデ	白	—	2mm以下透明白光沢。1mm以下白色少。	絆縫用

第2表 石器計測表

遺物番号	器種	石材	出土地点	法量				備考
				最大(cm)	最大(cm)	最大(cm)	重量(g)	
35	石斧	ホルンフェルス	水田遺構	12.3	6.7	2.1	187.2	
101	磨製石斧	ホルンフェルス	畝状遺構	4.4	3.9	2.5	36.6	
143	石鏃	黒曜石	SA3	1.8	1.5	0.4	0.8	上牛鼻
144	石斧	ホルンフェルス	SA3	7.0	7.2	0.8	44.4	
145	剥片	ホルンフェルス	SA3	9.7	9.6	1.3	95.7	
146	砾石	砂岩	SA3	7.8	9.8	4.0	503.8	
155	敲石	溶結凝灰岩	SA4	7.5	7.4	3.5	293.2	尾鈴酸性岩類
156	台石	砂岩	SA4	11.8	19.9	8.8	1968.6	
175	たも石	砂岩	SA5	17.5	7.0	6.1	1144.1	
176	たも石	砂岩	SA5	17.2	8.7	5.1	1021.2	
177	たも石	砂岩	SA5	19.2	5.8	5.6	877.3	
178	たも石	砂岩	SA5	18.8	7.5	5.1	1036.5	
179	たも石	砂岩	SA5	17.6	7.7	5.0	942.8	
180	たも石	砂岩	SA5	15.7	6.4	4.4	639.9	
181	たも石	砂岩	SA5	18.6	8.1	5.5	947.6	
182	たも石	砂岩	SA5	16.0	9.6	6.0	1034.3	
183	たも石	砂岩	SA5	16.3	8.2	6.0	1031.6	
184	たも石	砂岩	SA5	15.7	7.6	5.0	974.7	
185	たも石	砂岩	SA5	16.1	6.7	4.0	665.4	
186	たも石	砂岩	SA5	16.3	6.0	5.2	809.3	
187	たも石	砂岩	SA5	16.0	8.5	4.3	897.1	
188	台石	砂岩	SA5	29.6	35.7	9.4	13400.0	
194	剥片	黒曜石	SC1	2.3	2.0	0.5	1.9	腰岳
228	勾玉	ヒスイ	SE1	1.3	0.7	0.4	0.8	
258	剥片	ホルンフェルス	SE1	2.3	5.4	1.4	13.2	
259	二次加工剥片	頁岩	SE1	1.3	3.0	0.7	1.8	
260	石核	頁岩	SE1	3.9	5.1	2.3	38.5	
261	石斧	ホルンフェルス	SE1	10.4	5.4	2.9	218.8	
262	磨製石斧	ホルンフェルス	SE1	4.5	4.0	1.0	30.3	
263	敲石	砂岩	SE1	8.7	8.4	3.9	383.8	
408	おはじき	蛇紋岩	C区	1.4	1.3	0.7	2.2	
409	おはじき	砂岩	C区	2.3	2.3	0.5	4.1	
410	砾石	砂岩	H13	7.8	2.4	0.9	28.8	
411	砾石	砂岩	H12	11.1	4.2	2.1	170.0	
412	砾石	砂岩	H10	9.8	7.4	5.1	411.0	
413	石鏃	ガラス質安山岩	H11・12	2.0	1.6	0.4	1.3	
414	石鏃	黒曜石	H13	2.0	1.4	0.4	0.8	桑木津留
415	石鏃	チャート	F10	2.0	1.4	0.4	0.8	
416	石鏃	チャート	A区調査区外	2.3	1.4	0.3	0.8	
417	石鏃	チャート	G12	2.2	1.4	0.3	0.7	
418	石鏃	玉髓	H13	1.7	1.6	0.3	0.6	
419	石錐	黒曜石	H13	2.3	1.6	0.6	1.8	腰岳
420	尖頭器	チャート	G12	3.5	2.8	1.4	15.5	
421	スクレーパー	チャート	B区	3.3	3.2	0.9	8.0	
422	剥片	頁岩	C区	2.1	4.1	0.9	7.5	
423	二次加工剥片	ホルンフェルス	G10	4.3	8.0	0.8	29.3	
424	石斧	頁岩	G13	7.2	5.4	1.0	43.6	
425	石斧	砂岩	C区	10.2	5.7	1.9	125.5	
426	磨石	砂岩	A区	9.9	10.0	5.6	668.9	
427	磨石	安山岩	C区	8.7	9.9	4.9	674.4	
428	台石	砂岩	E7	23.9	23.0	5.6	4000.0	

第3表 銅製品計測表

遺物番号	器種	石材	出土地点	法量				備考
				最大(cm)	最大(cm)	最大(cm)	重量(g)	
16	煙管	銅	水田	6.05	1.2	0.7	2.7	

第IV章 自然科学分析の結果

株式会社 古環境研究センター

第1節 はじめに

花木池平遺跡は、宮崎県都城市山之口町に所在し、都城盆地の東縁部の河岸段丘面に位置する。本遺跡からは、平安時代の墓状遺構及び江戸時代の水田跡が検出された。当時の周囲の植生や環境、農耕等に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析、花粉分析及び放射性炭素年代測定を行った。

自然科学分析の結果については、すべて株式会社古環境研究センターに分析委託した。各試料採取箇所については第1図に示している。

第2節 植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オバール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000, 2009）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

(2) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 線鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。タケアキ科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(3) 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ（穂の表皮細胞由來）、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

[イネ科-タケアキ科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチ

ク属)、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科(シイ属)、ブナ科(アカガシ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

(4) 考察

稲作跡の検討

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オーバール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山、2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構や畑遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 調査区南壁

①層(試料1)から⑥層(試料6)までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、①層(試料1)では密度が6,100個/gと高い値であり、②層(試料2)～⑤層(試料5)でも3,100～4,600個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

⑥層(試料6)では、密度が2,700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) 調査区西壁

II層(試料1)からIX層(試料8)までの層準について分析を行った。その結果、II層(試料1)、III層(試料2)、IV層(試料3)からイネが検出された。このうち、II層(試料1)とIII層(試料2)では密度が3,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。IV層(試料3)では、密度が1,000個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

3) SS 1地点

試料1(黒色土)と試料2(黒色土、暗褐色土、側池ボラの混在層)について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、試料1では密度が3,700個/gと比較的高い値である。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。試料2では密度が1,600個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属型(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型(シコクヒエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類(穎の表皮細胞)は、調査区南壁の①層(試料1)および調査区西壁のII層(試料1)とIII層(試料2)から検出された。密度はいずれも500個/gと低い値であるが、穎(桺殻)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、これらの層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類な

どの作物は分析の対象外となっている。

その他の分類群

上記以外の分類群では、ほとんどの層準でネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、キビ族型、スキ属型、ウシクサ族A、メダケ族型、チマキザサ族型、および樹木(照葉樹)のマンサク科(イスノキ属)、ブナ科(シイ属)、ブナ科(アガシ属)、クスノキ科なども認められた。また、調査区南壁の①層や調査区西壁の②層では、シバ属型、マダケ属型が検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おむねネザサ節型が優勢であり、部分的にヨシ属、スキ属型もくなっている。

第3節 花粉分析

(1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm²を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯浴
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの筋で繕などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯浴)を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸ブクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラートを作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属。節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

(3) 結果

分類群

検出された分類群は、樹木花粉25、樹木花粉と草本花粉を含むもの8、草本花粉26、シダ植物胞子2形態の計61である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表2に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを示した(図3)。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

【樹木花粉】

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複管束亜属、スギ、イチイ科一イヌガヤ科ヒノキ科、ヤナギ属、カバノキ属、クマシダ属アサダ、クリ、シイ属マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アガシ亜属、ニレ属ケヤキ、エノキ属ムクノキ、サンショウウ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ノブドウ、グミ属、ハイノキ属、イスノキ属

【樹木花粉と草本花粉を含むもの】

クワ科イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、マメ科sp.1(ゲンゲ属ミヤコグサ属上りやや大きく、孔は小さい比較的小型の花粉でハギ属に似る。ササゲ属など栽培植物とは異なる形態)、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属ガマズ

ミ属

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ゲンゲ属-ミヤコグサ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、ゴマ、オオバコ属、オミナエシ科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

花粉群集の特徴

1) 調査区南壁

下位の⑥層（試料6）から①層（試料4）にかけては、草本花粉の占める割合が高く、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンボボ亜科、チドメグサ亜科などが伴われる。また、⑥層（試料6）ではゴマが検出された。樹木花粉では、マツ属複雑管東亜属、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などが認められた。③層（試料3）から②層（試料2）にかけても、おおむね同様の結果であるが、アブラナ科が増加傾向を示し、②層（試料2）ではソバ属が出現している。①層（試料1）では、アブラナ科、ゲンゲ属-ミヤコグサ属が増加し、ヨモギ属は減少している。樹木花粉では、スギが増加傾向を示し、シイ属-マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属は減少している。

2) 調査区西壁

下位のⅦ層（試料6）からⅣ層（試料5）にかけては、樹木花粉の占める割合が比較的高く、コナラ属アカガシ亜属が優勢で、コナラ属コナラ亜属、クリ、シイ属-マテバシイ属などが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属、タンボボ亜科、イネ科などが認められた。V層（試料4）では、樹木・草本花粉のマメ科、マメ科sp.1が増加し、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属は減少している。IV層（試料3）では、樹木・草本花粉のマメ科sp.1、草本花粉のイネ科が増加し、ソバ属が出現している。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が減少している。

3) S S 1地点

試料1と試料2では、草本花粉の占める割合が高く、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、ヨモギ属、アブラナ科、タンボボ亜科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、クリ、マツ属複雑管東亜属、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが認められた。

第4節 放射性炭素年代測定

（1）はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村, 2003）。

（2）試料と方法

試料は、堅穴建物から採取された炭化材7点および土器付着炭化物3点の計10点である。表1に試料の詳細を示す。試料の前処理・調整として、超音波洗浄、有機溶剤処理（アセトン使用）、酸-アルカリ-酸処理（AAA処理）を行い、測定は加速器質量分析法（AMS法: Accelerator Mass Spectrometry）を行った。

（3）測定結果

AMS法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および曆年代（較正年代）を算出した。表1にこれらの結果を示し、図1に各試料の曆年較正結果（較正曲線）、図2に曆年較正年代マッチプロット図を示す。

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD 1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差 (\pm) は1 σ (68.2%確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

3) 暦年代 (Calendar Years)

放射性炭素 (^{14}C) 年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動や ^{14}C の半減期の違いを較正している。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値および溝井県黒水月湖の年輪堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはoxCal 4.4である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、oxCal の確率法により 2 σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4) 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 では 1750 ± 20 BP (2 σ の暦年代で AD 243 ~ 364, 370 ~ 375年)、No.2 では 1720 ± 20 BP (AD 253 ~ 288, 324 ~ 406年)、No.3 では 1600 ± 20 BP (AD 421 ~ 538年)、No.4 では 1835 ± 20 BP (AD 129 ~ 246, 301 ~ 303年)、No.5 では 1670 ± 20 BP (AD 263 ~ 275, 347 ~ 426年)、No.6 では 1705 ± 20 BP (AD 258 ~ 280, 331 ~ 410年)、No.7 では 1670 ± 20 BP (AD 263 ~ 275, 347 ~ 423年)、No.8 では 1585 ± 20 BP (AD 427 ~ 545年)、No.9 では 1635 ± 20 BP (AD 382 ~ 387, 392 ~ 396, 402 ~ 443, 448 ~ 480, 492 ~ 537年) の年代値が得られた。No.10については炭素量不足により測定不能であった。

なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

第5節 自然科学分析のまとめ

自然科学分析 (植物珪酸体分析、花粉分析) の結果に基づいて、地点ごとに周辺の植生と環境および農耕について考察する。

調査区南壁

下位の⑥層から④層 (古代) にかけての堆積当時は、イネ科 (ヨシ属など) やカヤツリグサ科などが生育するような潤湿な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田耕作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属 (おもにネザサ節)、ススキ属やチガヤ属、キビ属などのイネ科植物、およびヨモギ属、タンボボ属、チドメグサ属などの草本類が生育していたと考えられ、日当たりの良い人里の環境が示唆される。また、⑥層ではゴマが栽培されていた可能性も認められた。森林植生としては、周辺地域にシイ類 (シイ属・マテバサイ属)、カシ類 (コナラ属・アカガシ属)、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林、および二次林とみられるクリやナラ類 (コナラ属・コナラ属) などの落葉樹、マツ属 (クロマツ、アカマツ) が分布していたと推定される。

③層から②層 (近世) にかけても、おおむね同様の状況であったと考えられるが、栽培植物を含むアブラナ科、ソバ属の出現から、これらを栽培する畑作が示唆される。アブラナ科やソバ属は虫媒花であり、風媒花と比較して現地性が高く花粉の生産量も少ないことから、他の分類群と比較して過大に評価する必要がある。アブラナ科には、アブラナ (ナタネ) をはじめ、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。

①層 (近世～近代) では、水田耕作に加えてアブラナ科の栽培が本格化したと考えられ、綠肥としてのレンゲ栽培が行われていた可能性も認められた。また、周辺ではシバ属、マダケ属も見られるようになったと考えられる。マダケ属にはマダケやモウ

ソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。森林植生としては、周辺地域で造林とみられるスギが増加傾向を示し、人為的な影響などでシイ類、カシ類などの照葉樹林は減少したと推定される。

調査区西壁

VI層（古墳時代以前）より下位層準の堆積当時は、イネ科、ヨモギ属、タンボボ亜科、メダケ属（おもにネザサ節）、スキ属やチガヤ属などが生育する比較的の良い環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類、シイ類、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が優勢に分布し、ナラ類やクリなどの落葉樹も見られたと推定される。

V層（古墳時代）からIV層（古代）にかけては、マメ科（ハギ属？）やイネ科が増加し、人為的な影響などでカシ類などの照葉樹林は減少したと推定される。III層（近世～近代）からII層にかけては、水田稻作およびムギ類の栽培が行われていたと考えられ、周辺ではシバ属、マダケ属（マダケやモウソウチクなど）もみられるようになったと推定される。

S S 1 地点

試料2（平安時代）から試料1（黒色土）にかけては、イネ科、ヨモギ属はじめタンボボ亜科、メダケ属（おもにネザサ節）、スキ属やチガヤ属などが生育する日当たりの良い里の環境であったと考えられ、調査地点もしくはその近辺では稲作およびアラナ科の栽培が行われていたと推定される。森林植生としては、周辺地域にカシ類、シイ類、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林、および二次林とみられるナラ類やクリなどの落葉樹、マツ属（クロマツ、アカマツ）などが分布していたと推定される。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—考古学と自然科学、19、p. 69-84。
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2)、p. 109-123。
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社。p. 189-213。
- 杉山真二（2009）植物珪酸体と古生態 人と植物の関わりあい④ 大地と森の中で—縄文時代の古生態系—縄文の考古学Ⅲ 小杉康ほか編。同成社。p. 105-114。
- 中村純（1967）花粉分析。古今書院。p. 82-110。
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究、13、p. 187-193。
- 中村純（1977）稻作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p. 21-30。
- 中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学、9、p. 15-29。
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学、17、p. 73-85。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」、日本第四紀学会。p. 3-20。
- 中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と層年代較正。環境考古学マニュアル。同成社。p. 301-322。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), p.337-360.
- Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p.725-757.

分類群	学名	地点・試料						面積						SN2
		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	
イネ科	Gramineae													
イネ	<i>Oryza sativa</i>	61	46	31	36	36	37	37	37	10				37
イネ類(稻の表皮胞)	<i>Oryza sativa (husk Phytolith)</i>	5	5					5	5	5	10	5	5	5
ムギ科(穀の表皮胞)	<i>Hordeum-Thicum (husk Phytolith)</i>	5	10	15	10	26	16	11	5	5	10	5	5	5
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	5	5	5	5	5	5	5	11	5	10	5	5	5
シバ属	<i>Zoysia type</i>	5	5	5	5	10	5	5	5	10	15	25	49	12
キビ属	<i>Panicum type</i>	5	5	5	5	10	5	5	5	10	15	25	33	10
ススキ属	<i>Aristida type</i>	30	20	31	15	47	86	79	53	35	15	25	33	21
ウツクサ族A	<i>Antrachne type A</i>	56	10	20	36	26	22	84	69	30	36	25	33	12
タケ科	Bambusoideae													73
メダガラ属型	<i>Phlebotomus sect. Nipponochamus</i>	20	20	10	26	5	11	11	32	10	10	33	5	6
ネガサク属型	<i>Phlebotomus sect. Nezasa</i>	91	90	102	144	83	118	216	275	199	153	186	170	18
チャキチサク属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	5	5	10	10	5	5	5	11	10	10	16	10	5
ミヤコサク属型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>													
マダガラ属型	<i>Phyllostachys</i>	5												
未分類等	Others	40	56	46	26	16	22	42	42	35	31	40	60	20
その他イネ科														37
着皮手形型	Others	20	15	10	21	16	5	11	37	5	10	5	5	21
棒状柱體	Husk hair origin													10
葉部組織	Rooted	76	86	77	128	78	113	111	100	104	61	35	38	12
茎部組織	Stem origin													42
未分類等	Others	131	101	97	154	52	129	153	158	164	138	101	104	81
樹木起源														120
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	15	10	10	5	5	5	5	11	10	5	5	5	5
ブナ科(アガシ属)	<i>Quercus subgen. Cerris/latifoliae</i>	5												
クヌキ科	Laureaceae	10	5	5	21	5	11	11	5	5	5	5	5	5
マツサク科(イスノキ属)	<i>Diospyros</i>	25	41	41	93	115	102	21	26	114	46	15	16	21
その他	Others	30	20	26	41	42	22	32	26	50	31	40	27	18
(海綿骨)	Sporangia spicules													31
植物珪酸体比較	Total	642	567	523	761	563	700	658	924	860	592	513	693	292
														517

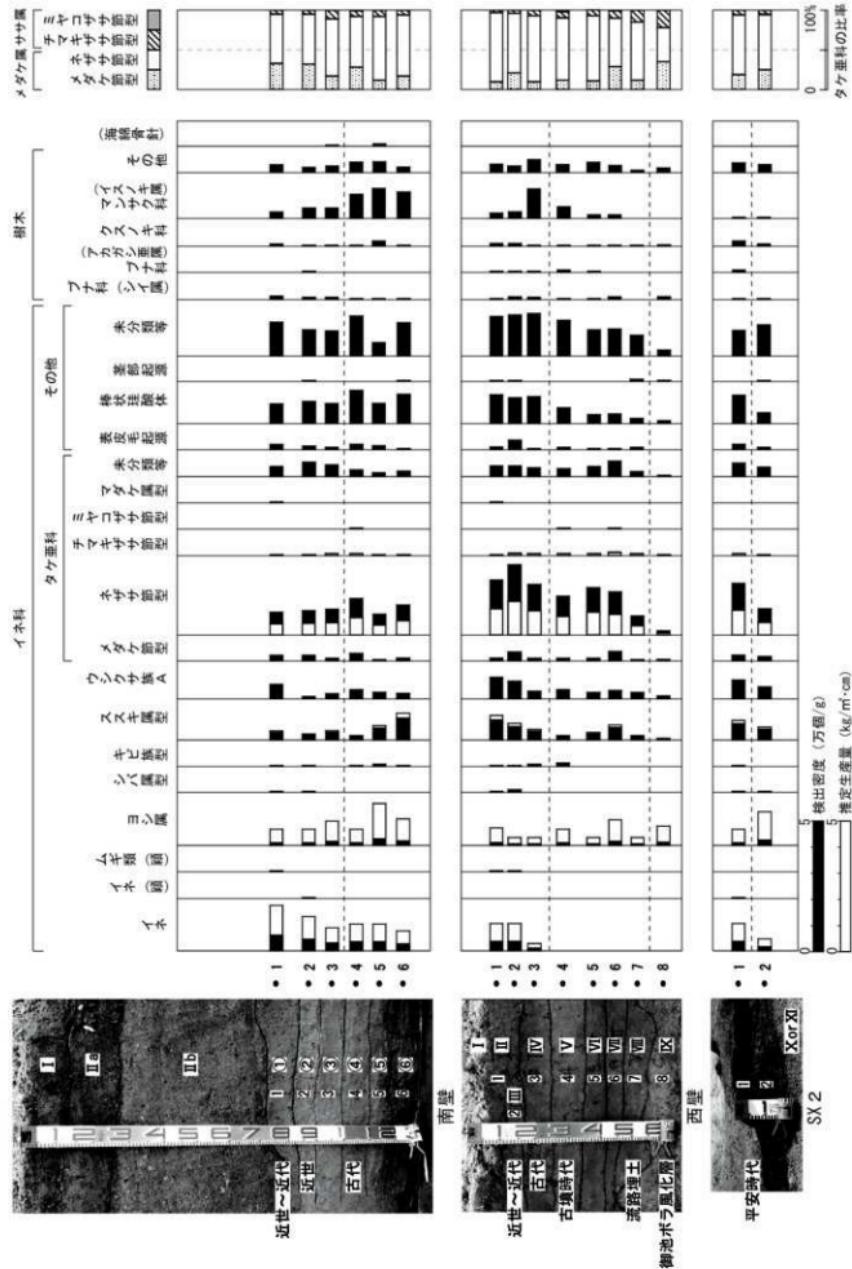
3.6. 分類群の検定生産量(単位: kg/m²): 試料の面積を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.78	1.34	0.90	1.06	1.67	0.79	1.08	1.09	0.29	1.13	1.11	2.29	1.12	0.55	1.19	2.5
		0.64	0.64	0.97	0.65	1.64	1.02	0.66	0.33	0.31	0.64	0.32	1.04	0.32	0.77	0.66	1.32
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38	0.25	0.38	0.19	0.58	1.07	0.98	0.65	0.43	0.19	0.31	0.61	0.19	0.08	0.78	0.52
ススキ属	<i>Miscanthus type</i>	0.23	0.23	0.12	0.30	0.06	0.12	0.12	0.37	0.12	0.12	0.12	0.38	0.06	0.07	0.24	0.18
メダガラ属	<i>Phlebotomus sect. Nipponochamus</i>	0.44	0.46	0.49	0.69	0.40	0.57	1.04	1.32	0.95	0.73	0.89	0.82	0.36	0.69	0.98	0.50
ネガサク属	<i>Phlebotomus sect. Nezasa</i>	0.04	0.04	0.68	0.08	0.04	0.04	0.08	0.07	0.08	0.08	0.12	0.08	0.05	0.08	0.04	
ミヤコサク属	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>			1													
ミヤコサク等	Mediolaratio	95	89	91	92	94	97	96	93	90	93	90	85	78	94	95	

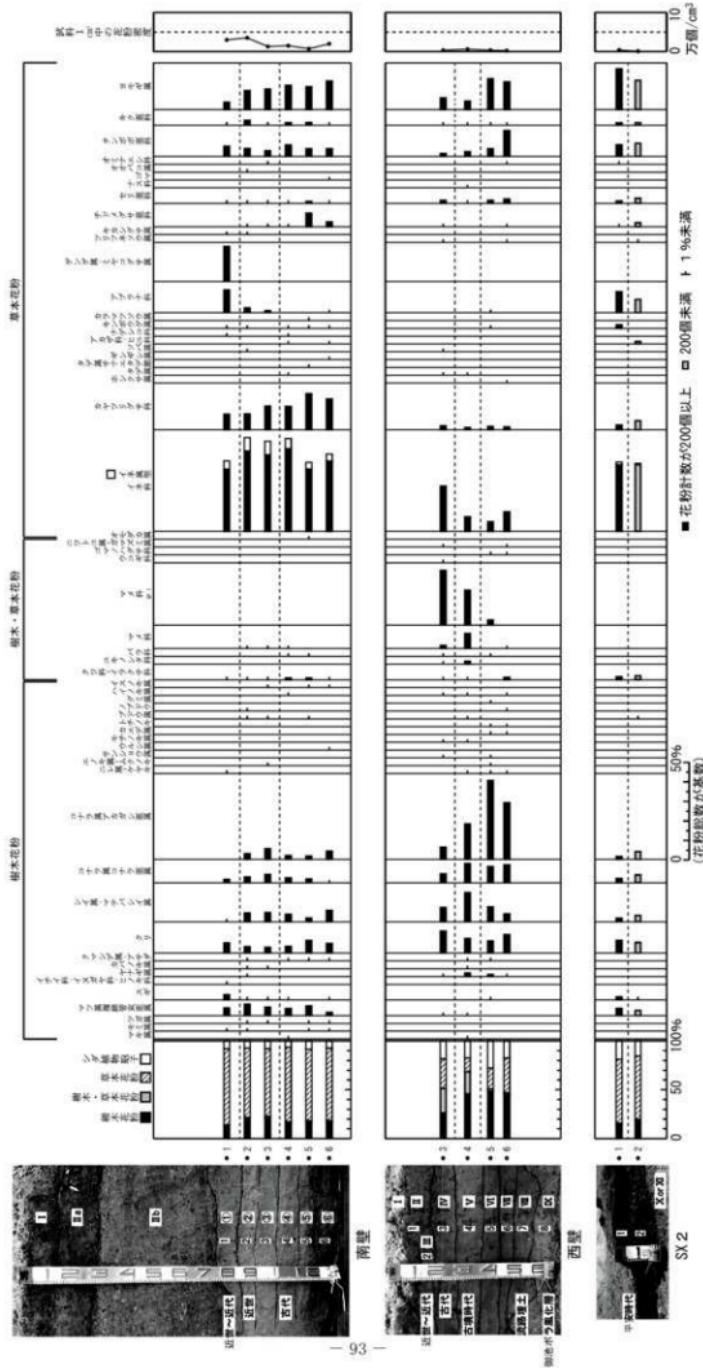
第4表 植物珪酸体分析結果

分類群	和名	南極						西極			SN 2		
		1	2	3	4	5	6	3	4	5	6	1	2
Arboreal pollen	樹木花粉				1								
<i>Podocarpus</i>	マツ科												
<i>Atheros</i>	セイヨウアザミ属	1	2			1	1						
<i>Tsuga</i>	ツガ属		1	1		1	1						
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複種系木本属	16	29	19	19	29	7	1	1			12	4
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ科	11	4	2	4	1						5	1
Taxaceo-Cephaelanthaceo-Cupressaceae	イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科	1											
Saxifrage	ヤナギ科属			1				3	6	4	1		
<i>Betula</i>	カバノキ属		1	2					1				
<i>Gymnospermae japonica</i>	クマツ科属・アザダ												
<i>Carpinus crenata</i>	クリ属	21	16	13	18	26	21	43	24	24	30	21	8
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属・タガバシイ属	2	23	21	20	8	25	28	48	29	13	6	5
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalans</i>	コナラ属・コナガシ属	7	15	19	13	8	3	18	32	32	29	7	6
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalans</i>	コナラ属・アカガシ属												
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	イニシ属・ヤマモキ		14	24	10	7	18	24	58	153	92	5	6
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エニシ属・ムククズ			1					1	1			
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属							2		1			
<i>Rhus</i>	ウルシ属						1						
<i>Betis</i>	セイヨウキヌ属							2	3				
<i>Acer</i>	カエデ属									2	1		
<i>Aesculus nobilis</i>	トネリコ									2	3		
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1	1		1			1				1	
<i>Amelanchier brevipedunculata</i>	アメランギ科												
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	1											
<i>Symplocos</i>	ハイヌキ属			1				1	1				
<i>Dioscore</i>	イヌキ属				1	1	2	1	1				
Arboreal+ Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉												
Momco- Urticaceae	クワ科・イラクサ科	1	4	4	5	4	3	1	1		4	5	3
Saxifrage	ユキノシタ科							1	5				
Rosace	バラ科					1	1		1				
Leguminosae	マメ科	1	1	2				6	25		2		
Leguminosae sp. I	マメ科 sp. I							106	37	10			
Araliaceae	ウコギ科							1					
Scrophulariacae	ゴンカルバグサ科									2	1		
Sambucus-filiatum	ニワトリコ属・ガマズミ属						2		1				
Nonarboreal pollen	草本花粉												
Agrostis	オガタ属						1						
Gymnosperme	イネ科	127	201	171	216	127	152	98	23	19	32	108	50
Oryza-type	イネ科型	17	33	30	27	14	15	1	1		4	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	32	40	53	62	74	67	8	4	7	5	8	7
Ericaceae	ホシノササ属									1			
Polygonum	タグラ属					1		1	1				
Polygonum sect. Persicaria	タグラ属サニエタケ節						3						
Rumex	ギンジン属							2					
Equisetum	ゾウリ属	2							2				
Chenopodiaceo-Amaranthaceae	アカバナ科・ヒユ科			2		1		1					2
Caryophyllaceae	ナシコ科	2											
Ranunculaceae	キンボウゲ属	2	2		1	3	2			2		6	
Dulichium	カラツツク属					1							
Cruciferae	アブラナ科	47	12	5		2			1		34	10	
Astragalus-Lotus	タング属・ヤコガサ属	72											
Impatiens	タング属・タコノイ属							2		1		1	
Rubiaceae	ホウキグサ属	1	1										
Hydrocotyleoidae	タシタグサ科	1	1	2	3	28	11	1		1	1	1	3
Aquifoliace	セリバグサ科	1	1	1	2	4	4	6	2	6	7	4	4
Solanace	ナス科							1					
Sesamum indicum	ゴマ					1							
Plantago	オオバコ属	1											
Valerianaceae	オオバエヒキ科		2								1	1	
Lactucae	タンボボ酢酸科	21	20	13	30	16	17	6	8	15	42	19	10
Asteroidae	キク科	1	12	4	7	6	2	2	1	2	1	4	2
Artemisia	ヨモギ属	15	48	46	64	47	62	23	14	60	45	66	22
Arboreal pollen	樹木花粉	60	109	104	87	74	81	122	126	254	172	56	31
Arboreal+ Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	5	5	8	5	3	118	88	13	8	5	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	338	374	327	416	321	338	139	55	112	136	255	112
Total pollen	花粉總數	399	488	436	511	400	422	279	219	379	316	316	146
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	3.0	3.5	1.3	1.5	7.2	2.6	3.5	5.8	3.6	2.3	4.2	7.2
	($\times 10^3$)	$\times 10^3$											
Unknown pollen	未同定花粉	10	9	14	7	11	10	14	12	22	13	11	7
Fern spore	シダ植物孢子												
Monolete type spore	単生微孢子	17	18	20	22	19	19	47	43	107	48	24	17
Trilete type spore	三生微孢子	19	19	17	13	18	15	38	23	39	19	50	10
Total Fern spore	シダ植物孢子總數	36	37	37	35	37	34	85	60	146	67	74	27
Parite egg	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石细胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかに消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal woods fragments	燃細胞物・熱細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Organic detritus (All Charcoal + woods fragment)	($\times 10^3$)	1.4	0.9	1.9	0.4	0.4	0.4	1.4	0.4	0.4	0.9		
未分解體碎片		15.0	15.5	8.0	7.9	6.9	13.4	33.3	15.0	18.8	11.0	21.6	9.6
分解質體碎片													
炭化體碎片(熱細木)													

第5表 花粉分析結果



第66図 植物珪酸体分析結果



第67図 花粉ダイアグラム



— 50 μ m —

写真 1 植物珪酸体 (プランツ・オパール)

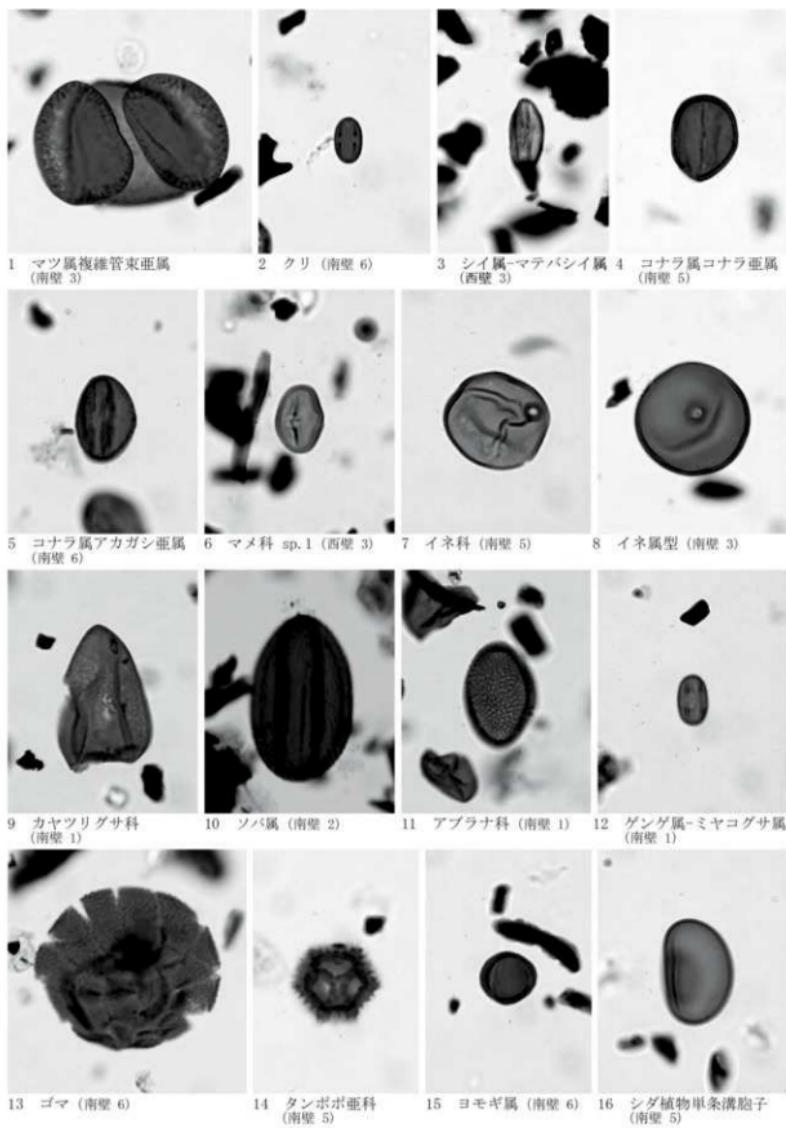
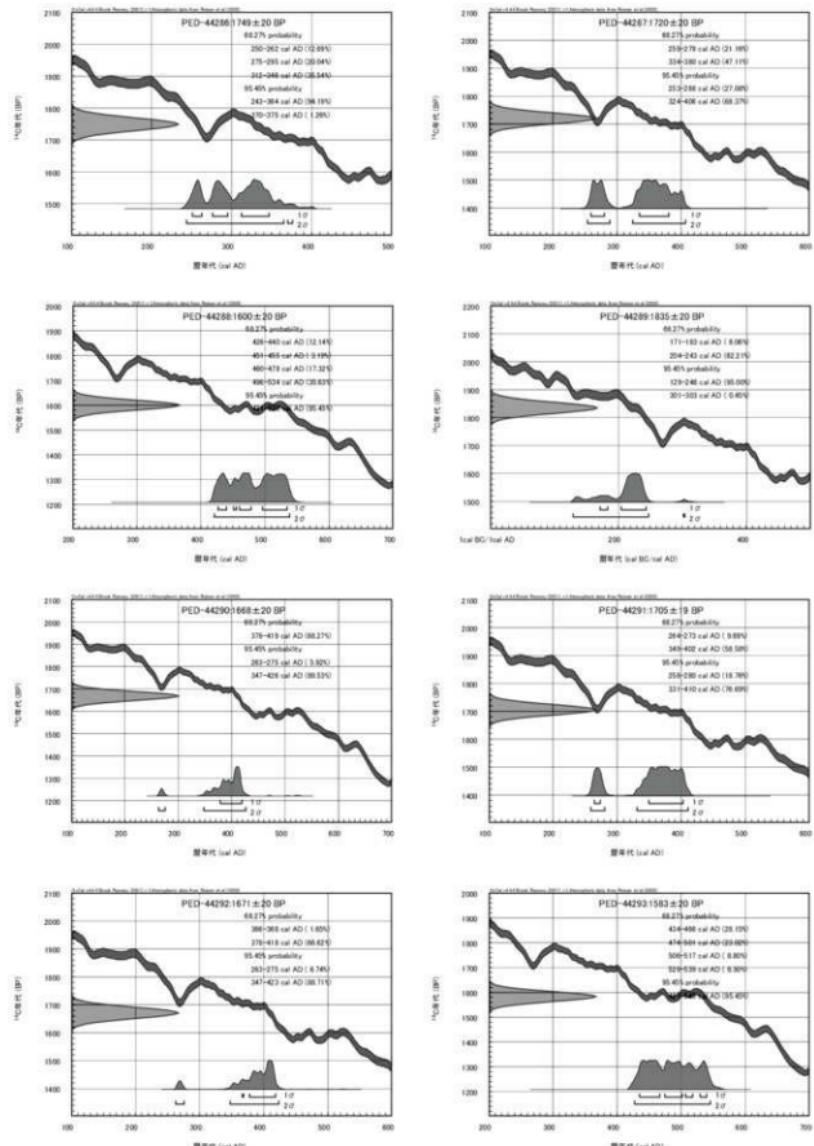
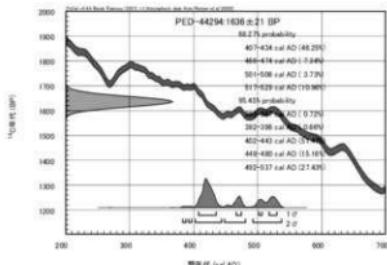


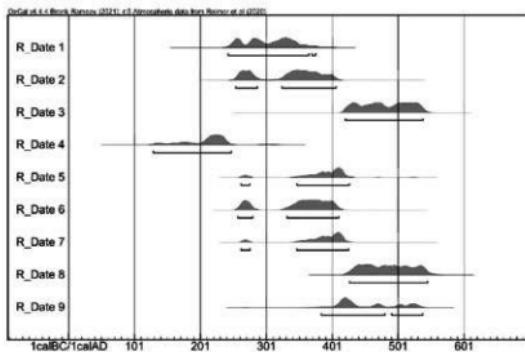
写真2 花粉



第 68 図 歴年較正結果①



第69図 歴年較正結果②



第70図
歴年較正年代マルチプロット図

試料No.	測定No. P-CD-	試料の詳細	種類	面處理 測定法	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (yrBP)	歴年較正用 年代(年BP)	歴年代(較正年代)	
								1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
1	44286	SA 1-10	炭化材	AAA処理 AMS法	-27.65 ± 0.17	1759 ± 29	1749 ± 20	cal AD 259-265 (12.69%) cal AD 278-295 (28.94%) cal AD 312-346 (35.54%)	cal AD 243-364 (94.19%) cal AD 370-375 (1.26%)
2	44287	SA 1, 西ピット一括	炭化材	AAA処理 AMS法	-28.52 ± 0.17	1720 ± 29	1720 ± 20	cal AD 259-279 (21.16%) cal AD 334-380 (47.11%)	cal AD 253-288 (21.08%) cal AD 324-406 (68.37%)
3	44288	SA 4 内 Na168 土器付壺物(外側)	炭化物	AAA処理 AMS法	-26.94 ± 0.22	1600 ± 29	1600 ± 29	cal AD 426-449 (12.14%) cal AD 451-455 (1.2.19%) cal AD 469-473 (17.32%) cal AD 496-534 (35.63%)	cal AD 421-536 (95.43%)
4	44289	SA 4, 南櫻土坑	炭化材	AAA処理 AMS法	-27.14 ± 0.23	1835 ± 29	1835 ± 20	cal AD 171-183 (6.06%) cal AD 204-243 (62.21%)	cal AD 129-246 (95.09%) cal AD 301-303 (0.45%)
5	44290	SA 5 内 Na173 土器付壺物(外側)	炭化物	AAA処理 AMS法	-27.65 ± 0.20	1670 ± 29	1668 ± 20	cal AD 378-419 (68.27%)	cal AD 263-275 (5.92%) cal AD 347-426 (89.53%)
6	44291	SA 5 内, P23	炭化材	AAA処理 AMS法	-29.21 ± 0.21	1705 ± 29	1705 ± 19	cal AD 264-273 (9.69%) cal AD 349-402 (56.58%)	cal AD 256-280 (18.76%) cal AD 331-410 (76.69%)
7	44292	SA 5 内, P31	炭化材	AAA処理 AMS法	-28.96 ± 0.17	1670 ± 29	1671 ± 20	cal AD 366-368 (1.65%) cal AD 378-419 (66.62%)	cal AD 263-275 (6.71%) cal AD 347-423 (88.71%)
8	44293	SA 6-37	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.52 ± 0.20	1585 ± 29	1583 ± 29	cal AD 434-466 (28.15%) cal AD 474-501 (23.02%) cal AD 506-517 (8.80%) cal AD 529-539 (8.30%)	cal AD 427-545 (95.45%)
9	44294	SA 6-10	炭化材	AAA処理 AMS法	-30.19 ± 0.17	1635 ± 29	1636 ± 21	cal AD 407-434 (46.22%) cal AD 466-474 (1.7.54%) cal AD 501-506 (3.72%) cal AD 517-529 (16.96%)	cal AD 382-397 (0.27%) cal AD 392-396 (0.66%) cal AD 492-443 (51.47%) cal AD 448-486 (15.46%) cal AD 492-537 (27.47%)
10	44295	SE 1 内 Na169 土器付壺物(外側)	炭化物	AAA処理 AMS法	出素量不足 により測定不能		—	—	—

第6表 放射性炭素年代測定結果

第V章 総括

花木池平遺跡では、古墳時代中期から後期を中心に、縄文時代後期～近世まで幅広い遺構・遺物を確認した。そこで、本章では、確認された各時代の遺構・遺物をもとに、それぞれの時代の様相について、若干の考察を加えて概観する。

第1節 縄文時代の様相

縄文時代は後期・晚期の遺構や遺物が検出された。遺構としては、縄文土器のみが出土した土坑（S C 2）と自然流路を検出するにとどましたが、遺物量は68点と遺構数に比べ多かった。そのほとんどが、山之口運動公園一帯を最高地点として、南北の尾根状地形の緩斜面に立地する調査区西側から南西側にかけて検出された。理化学的な年代測定を行える資料を得られなかったため、実年代を推定するには難しいが、遺物は全てが後期から晩期のものである。後期の土器として、貝殻腹縁による連続刺突文を施す丸尾式土器、晩期の土器として、主なものは組織痕土器や貼付刻目突帯文土器、黒色磨研土器の黒川式土器、松添式土器がある（詳細は土器觀察表備考欄参照）。自然流路については、同時期に発掘調査を実施した上平遺跡方面的谷部から続くものと考えられる。上平遺跡では、後期の堅穴建物1軒が検出されていることから、本遺跡との関連性が注目される。

第2節 古墳時代の様相

遺構では、第1次調査で堅穴建物跡5軒、第2次調査で堅穴建物跡1軒と溝状遺構を検出した。本調査で確認した遺構と遺物は、分析した土器の年代観や堅穴建物の存続時期について、近年の土器編年（近沢 2016）を勘案すると、古墳時代後期に収まるものと考えられ、この時期に堅穴建物が点在する集落が形成されていたものと考えられる。放射性炭素年代測定の分析結果としては、堅穴建物跡出土の炭化物と土器付着炭化物とともに一部を除いて暦年代で calAD250～calAD550 前後にある。それぞれの建物毎では、比較的まとまった測定値が示されている。時期としては、①古墳時代前期から中期、②古墳時代中期後半から末、③古墳時代中期半ばから後期の3時期に分かれる結果となり、土器の年代観から見るとやや古い測定値を得た。分析結果と現行土器編年による相対年代との齟齬について今後も注視していく必要がある。今回検出した堅穴建物跡のうち、S A 4では南側の壁際の床面に横倒しになった甕が出土したことから、建物を廃絶させる際に置かれたとも考えられる。S A 5は、他の堅穴建物跡に比べて規模が大きいことから、工房跡の可能性も考えながら調査を進めたが、台石やたも石が出土したのみであった。S E 1は、これら堅穴建物と同時期に存在していたと考えられる。溝の流路から大きく広がりをみせる箇所では、破碎された甕（195）と壺（204・206）が、溝両岸のほぼ対称となる位置で、まとまって出土した。また、溝のすぐ横からは、ヒスイ製の勾玉が出土した。勾玉については、弥生時代中期から後期にかけての北陸系勾玉の可能性が考えられ、孔の周辺が摩滅していることを含めると、消費地での伝世の可能性も考えられる。飛躍的に推測するならば、勾玉を入手した時から数世代に渡って保管継承していた人々が、土器を人為的に破碎した、もしくは置いた可能性も考えられ、祭祀的行事を行っていたとも考えられよう。

出土遺物は、土師器の甕や壺、坪、高坪がみられ、最も多いのは甕である。完形もしくはある程度全

体的な器形の分かれる資料は限定的であるが、出土した甕は、頸部に刻目突帯をもつといわゆる「成川式」の影響が想定される遺物が多く出土している。

近隣の上平遺跡では、古墳時代後期に属するとみられる地下式横穴墓と木棺墓が検出されている。本遺構の想定期とも重なることから、関連性も含め当該期の集落の様相がさらに明らかになっていくことを期待したい。

第3節 平安時代の様相

平安時代の遺構は、据立柱建物跡1棟と竪状遺構、溝状遺構3条、小穴を検出した。出土遺物は比較的多いものの、遺構の年代を断定できる遺物はあまりなかった。D区ではビットが密集して検出されており、これらの中にはS B 1のような本来建物跡を構成する柱穴であるものが含まれると推測される。小穴は、近接する竪状遺構があるため、建物のある区域と耕作地とを分ける門柱や柵列の可能性を考えておきたい。小穴の北側及び南側で類似する小穴の検出を試みたが、削平のため検出できなかつた。また、竪状遺構を造営した集団の生活跡については、S B 1のみの検出であった。また出土した61の坏の底部には、漆が付着し、漆製品の加工を行っていた可能性が考えられる。同様の生産活動は、同市内の大島畠田遺跡や真米田遺跡（都城市教育委員会2014）でも確認されている。9世紀所産の越州窯の水注や縁袖陶器も出土しており、他地域との交流も窺うことができる。

第4節 江戸時代の様相

江戸時代の遺構は、D区の水田遺構のみであった。部分的に畦畔や水田を造成したような痕跡が確認できたが、全体的な広がりまでは特定できなかつた。第IV章で示したとおり、自然科学分析で検出したプラントオパールや、出土した遺物から水田を営んでいたことは間違いない。遺物では、17～19世紀代に属する遺物が出土している。近世のこの地域が、宮崎と都城を結ぶ交易路の中間地点として、交通の要衝であり、近世薩摩焼の陶磁器類が出土しているのは、そのような歴史的背景に起因していると考えられる。

（参考文献）

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『木脇遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第43集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『三俣城北東曲輪跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第97集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『銀座第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第120集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『野首第1遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第157集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009『尾花A遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第185集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『富言前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第209集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2015『一本松遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第236集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2020『松下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第252集

(参考文献)

- 宮崎市教育委員会 2019『松添遺跡』宮崎市文化財調査報告書第125集
- 宮崎市教育委員会 2006『本野原遺跡三』宮崎市文化財調査報告書（田野町文化財調査報告書）第53集
- 都城市教育委員会 2009『都城市山之口地区（旧北諸県郡山之口町）遺跡詳細分布調査報告書』
都城市文化財調査報告書第94集
- 都城市教育委員会 2010『二本松遺跡』都城市文化財調査報告書第96集
- 都城市教育委員会 2010『萩ヶ久保第1遺跡』都城市文化財調査報告書第97集
- 都城市教育委員会 2012『王子山遺跡』都城市文化財調査報告書第107集
- 都城市教育委員会 2014『真米田遺跡 七日市前遺跡』都城市文化財調査報告書第111集
- 都城市教育委員会 2015『富吉平遺跡』都城市文化財調査報告書第114集
- 都城市教育委員会 2016『山之口一本松遺跡』都城市文化財調査報告書第124集
- 都城市教育委員会 2019『土角遺跡』都城市文化財調査報告書第136集
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2009『梅田萱峰遺跡V』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書28
- 近沢恒典 2016「都城盆地における古墳時代の土器について」
『宮崎平野地域の考古資料に関する編年的研究II』宮崎考古学会
- 今塙屋義行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器 - 宮崎平野部を中心にして -」
『古墳時代中～後期の土器 - その編年と地域性 - 第5回九州前方後円墳研究会実行
委員会発表要旨資料』第5回九州前方後円墳研究会実行委員会
- 腰岳黒曜石原産地研究グループ 2020『シンポジウム 日本列島のなかの腰岳黒曜石原産地』
腰岳黒曜石原産地研究グループ 研究報告2
- 石器原産地研究会 2002『Stone Sources No.1』石器原産地研究会会誌

図版 1

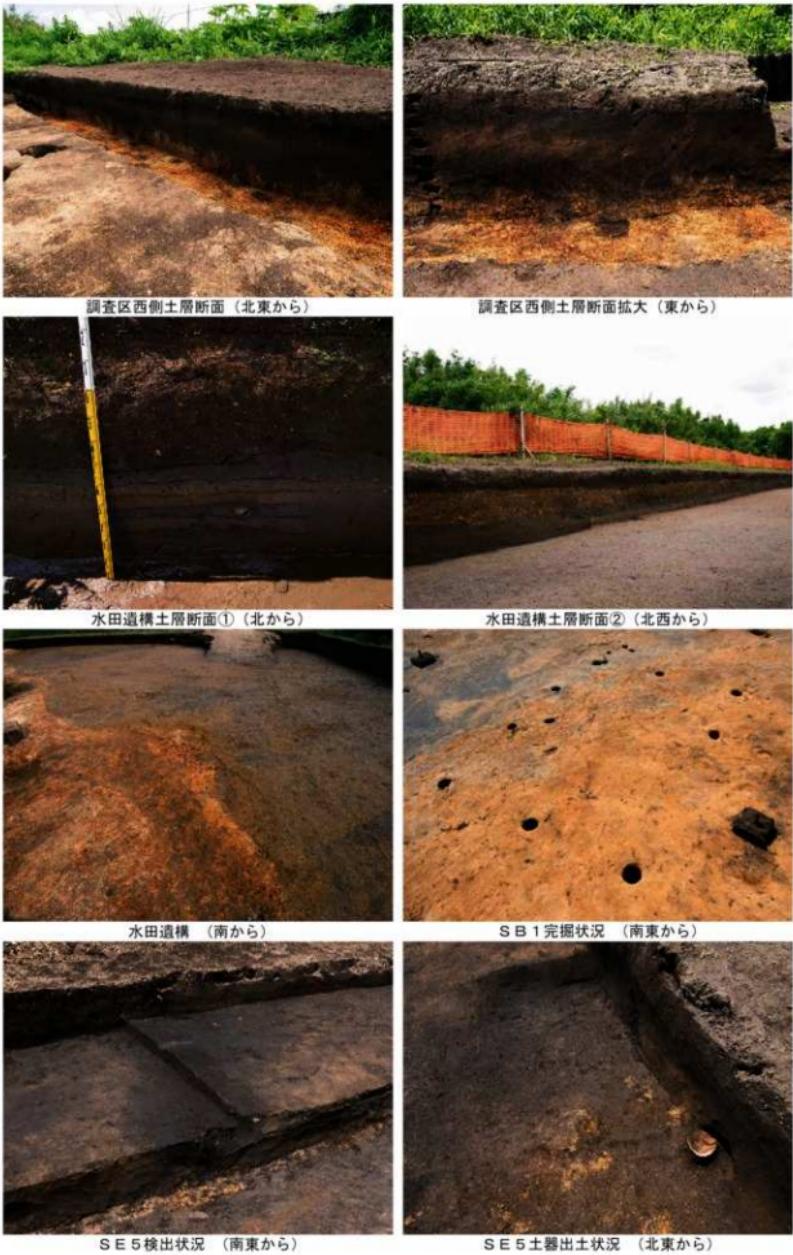


調査区遠景（東から）

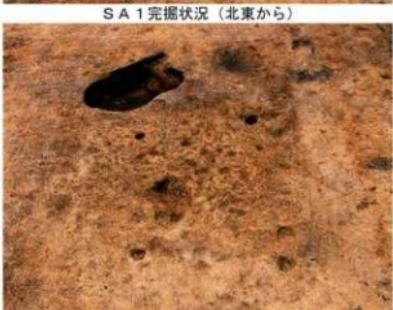
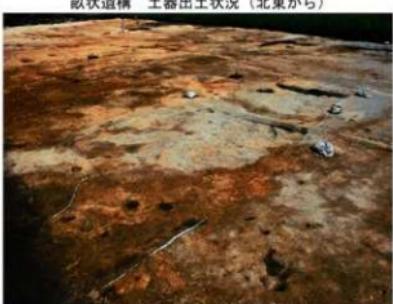


調査区全体合成写真（上が北）

図版 2



図版3



図版 4



S A 3 床面状況（南東から）



S A 3 床面状況（北東から）



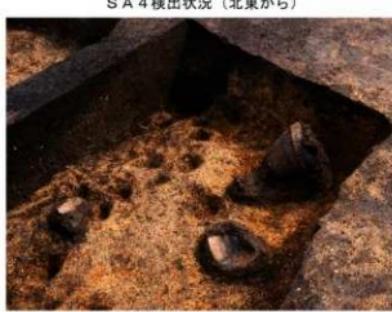
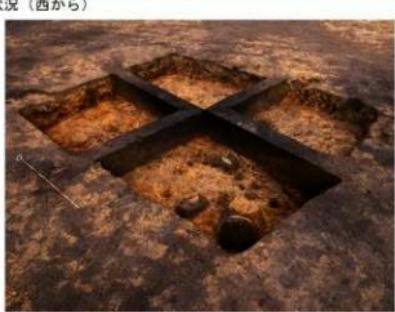
S A 3 土層堆積状況（南東から）



S A 3 完掘状況（北から）



S A 3 遺物出土状況（北西から）



図版 6



S A 5 完掘状況（南西から）



S A 5 梢出状況（東から）



S A 5 土層堆積状況（南東から）



S A 5 たも石出土状況（西から）



S A 5 遺物出土状況（北から）



S A 6 完掘状況（北西から）



S A 6 掘出状況（北西から）



S A 6 土層堆積状況（南西から）



S E 1 掘出状況（南から）



S E 1 遠景（南から）

図版 8



SE 1 全体写真（上が北東）



SE 1 北ベルト土層堆積状況（北西から）



SE 1 中央ベルト土層堆積状況（南西から）



SE 1 遺物出土状況①（南から）



SE 1 遺物出土状況②（南西から）

図版9



図版 10



水田遣構出土 陶磁器・土師器・須恵器・石器



S B 1・欠状遣構出土 土師器



S E 5・欠状遣構出土
陶磁器・土師器・須恵器・縄文土器



S A 1・S A 2出土 土師器・須恵器

図版 11



S A 3 出土 土師器



S A 3 出土 土師器・須恵器・石器

図版 12



S A 5出土 土師器



S A 5出土 石器

図版 13



S A 4 出土 土師器・石器



S A 6 · S C 1 出土 土師器・石器

図版 14



SE 1 出土 土師器①



SE 1 出土 土師器②



SE 1 出土 土師器・須恵器



SE 1 出土 勾玉



S C 2 出土 縄文土器



自然流路出土 縄文土器①



自然流路出土 縄文土器②



自然流路出土 石器

図版 16



包含層出土 中近世陶磁器



包含層出土 弥生土器・土師器・須恵器



包含層出土 土師器



包含層出土 須恵器



包含層出土 縄文土器①



包含層出土 縄文土器②

図版 18



包含層出土 石器①



包含層出土 石器②



包含層出土 石器③

報 告 書 抄 錄

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第262集

花木池平遺跡

県有体育施設整備事業(調整池)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社 宮崎南印刷

〒889-2161 宮崎市大字田吉 350-1

TEL 0985(51)2745 FAX 0985(52)2682

Miyakonojo City

HANANOKI KENBIRA Site

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center

vol.262

2022

Miyazaki Prefectural Archaeological Center